

船倉貝塚

倉敷市埋蔵文化財発掘調査報告 第8集

倉敷埋蔵文化財センター

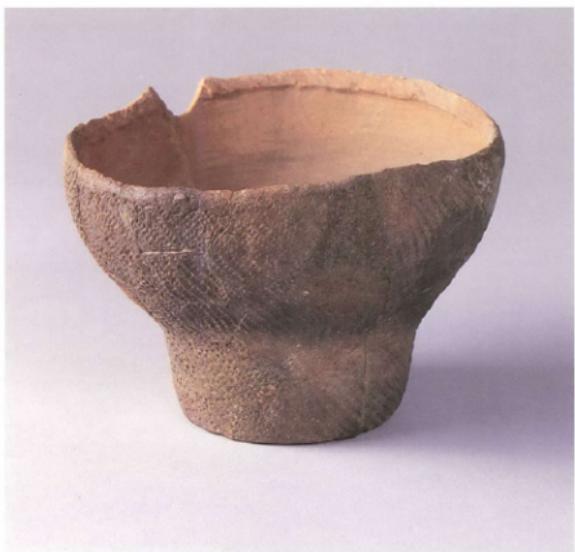
1999.3



1. 1号土墳墓と2号土墳墓



2. 3号土墳墓



3. 1号土壙墓出土の土器



4. 装身具

序

瀬戸内海に面し、穏やかな気候に恵まれた倉敷市は、西日本でも屈指の縄文時代貝塚の密集地として知られています。

倉敷市周辺では、縄文時代の海進により、平野の奥部にまで遠浅の海が入り込み、河川によって運び込まれた土砂や有機物によって、適度な栄養をもった干潟が形成されていました。豊かな海の幸に恵まれた縄文入たちは、入海の沿岸に住み、多くの貝塚を形成したと考えられています。

市内に所在する貝塚では、古くから盛んに調査が行われており、羽島貝塚や船元貝塚、福田貝塚等々全国的にも知られている貝塚もたくさんあります。

このたび、ここに報告いたします船倉貝塚は、今までその存在が知られていなかった貝塚であります。不幸にも道路の建設工事中に発見され、現状での保存はかなわず、やむを得ず緊急発掘調査を実施いたしました。調査自体は小規模なものでしたが、貝塚全体を調査した稀な例となり、さまざまな考古遺物や埋葬構造、多種多様の自然遺物等も出土し、多くの貴重な資料を得ることができました。

この報告書は、こうした貝塚の発掘調査の成果をまとめたものです。本書が今後の文化財の保護、保存に活用されますとともに、学術研究のための資料として、また郷土の歴史研究の資料として、いささかなりとも役立てば幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査をはじめ、出土資料の整理に至りますまで、ご指導ご協力を賜りました関係各位に対しまして衷心より厚くお礼申し上げます。

平成11年3月31日

倉敷市教育委員会
教育長 山田錦造

例　言

1. 本書は、都市計画道路羽島四十瀬線工事に伴い発掘調査を実施した、倉敷市船倉町地内に所在する船倉貝塚の発掘調査報告である。
2. 発掘調査は、倉敷市教育委員会文化課職員 福本 明、鍵谷守秀、小野雅明、藤原好二が担当した。現地調査は、北調査区と南調査区に分けてを行い、1991年7月8日～9月27日と10月17日～11月30日にかけてそれぞれ実施した。
3. 出土人骨の同定、分析については、兵庫医科大学解剖学教室 欠田早苗氏に現地調査を依頼し、同学解剖学第二教室 和田 洋氏がこれを引き継いで整理分析を担当された。
4. 動物遺存体の同定、分析については、早稲田大学考古学資料室 金子浩昌氏に依頼し、石材の同定については、倉敷市立自然史博物館 武智泰史氏に依頼した。
5. 本書の執筆は、第2章を福本、第3章～第5章の石器については藤原、他を小野が担当し、編集は鍵谷が行った。また、和田 洋氏、金子浩昌氏には玉稿をいただいた。
6. 発掘調査における遺構写真は福本と鍵谷が行い、遺物の写真撮影は藤原が行った。
7. 出土遺物の整理・報告書の作成にあたっては、倉敷埋蔵文化財センター嘱託職員 内田智美、臨時職員 大江久仁子、洲脇奈奈、三宅利恵子の協力を得た。
8. 採図中に使用した高度値は海拔高であり、方位は全て磁北である。
9. 発掘調査で出土した遺物及び実測図・写真等は、全て倉敷埋蔵文化財センターにて保管している。
10. 発掘調査から出土遺物の整理・報告に至るまで、下記の方々にも御指導、御教示を賜った。記して感謝する次第である。
　間壁忠彦、間壁葭子、江田伸司、瀬口眞司、内山純蔵、稻葉正子、山廢康平、植月 学、
　高橋進一（順不同、敬称略）

目 次

序

例言

第1章 遺跡の位置と環境	1
第1節 地理的環境	1
第2節 歴史的環境	1
第2章 調査の経緯	4
第1節 調査に至る経緯	4
第2節 調査の経過	5
第3章 発掘調査の概要	7
第1節 調査区の概要と層序	7
第2節 繩文土器の分類について	12
第3節 遺構と出土遺物	13
第4節 包含層出土の遺物	22
第4章 貝層の調査概要	26
第1節 貝層の調査方法	26
第2節 貝層出土の人工遺物	27
第3節 貝層出土の貝類	37
第5章まとめにかえて	40
付論1 船倉貝塚出土の縄文時代の人骨について	43
付論2 倉敷市船倉貝塚出土の節足、脊椎動物	73
出土遺物観察(一覧)表	88
1. 土器観察表	88
2. 石器計測表	91
3. 遺構出土石器組成表	91
4. 骨角貝製品観察表	91
5. 貝層内容物表	93
6. 貝類の出土量	95

挿図目次

第1図 遺跡の位置	1 第20図 土壌1出土の土器(S=1/3)	20
第2図 周辺の縄文時代遺跡	2 第21図 土壌1(S=1/20)	20
第3図 船倉貝塚周辺の地形	4 第22図 土壌1出土の石器(S=2/3)	21
第4図 貝層上面の地形(S=1/200)	7 第23図 溝状遺構(S=1/20)	21
第5図 貝層除去後の地形(S=1/200)	8 第24図 包含層出土の土器1(S=1/3)	23
第6図 北調査区断面図(S=1/80)	9 第25図 包含層出土の土器2(S=1/3)	24
第7図 南調査区断面図(S=1/80)	10 第26図 包含層出土の石器(S=2/3)	25
第8図 北調査区遺構配置図(S=1/100)	14 第27図 北調査区貝層(S=1/100)	26
第9図 1号人骨検出状況(S=1/30)	15 第28図 南調査区貝層(S=1/100)	26
第10図 1号土壌墓(S=1/30)	15 第29図 貝層出土の土器1(S=1/3)	28
第11図 1号土壌墓下層出土の土器(S=1/3)	16 第30図 貝層出土の土器2(S=1/3)	29
第12図 1号土壌墓上層出土の土器(S=1/3)	16 第31図 貝層出土の土器3(S=1/3)	30
第13図 1号土壌墓出土の石器(S=2/3・1/2)	17 第32図 貝層出土の土器4(S=1/3)	31
第14図 骨角器(S=2/3)	18 第33図 貝層出土の土器5(S=1/3)	32
第15図 2号・2b号人骨検出状況(S=1/20)	18 第34図 貝層出土の土器6(S=1/3)	33
第16図 2号土壌墓断面図(S=1/20)	19 第35図 貝層出土の石器(S=2/3)	34
第17図 2号土壌墓出土土器(S=1/3)	19 第36図 貝層出土の石器・石製品(S=2/3・1/2)	35
第18図 2号土壌墓出土石器(S=2/3・1/2)	19 第37図 貝層出土の骨角貝製品(S=2/3)	36
第19図 3号人骨検出状況(S=1/20)	20	

表目次

貝類遺体種名表1	38 貝類遺体種名表2	38
----------------	-------------------	----

巻頭図版目次

巻頭図版1 1. 1号土壌墓と2号土壌墓 2. 3号土壌墓	巻頭図版2 1. 1号土壌墓出土の土器 2. 装身具
----------------------------------	-------------------------------

図版目次

図版1 北調査区

1. 貝層検出状況(南から)
2. 貝層断面(北から)
3. 貝層断面(1号土壙墓付近)

図版2 南調査区

1. 貝層検出状況(東から)
2. 調査風景(貝層土壙サンプリング中)
3. 貝層の遺物出土状況

図版3 土壙墓

1. 1号・2号土壙墓
2. 1号土壙墓(下層の状況)
3. 3号土壙墓

図版4 その他の遺構

1. 土壙1
2. 溝状遺構
3. 貝塚遠景(左側トンネル手前)

図版5 1号土壙墓出土土器

図版6 包含層出土土器(1)

図版7 包含層出土土器(2)

図版8 貝層出土土器(1)

図版9 貝層出土土器(2)

図版10 貝層出土土器(3)

図版11 貝層出土土器(4)

図版12 貝層出土土器(5)

図版13 貝層出土土器(6)

図版14 出土土器(1)

図版15 出土土器(2)

図版16 土壙墓出土石器

図版17 包含層・貝層出土の石器

図版18 骨角貝製品・動物遺体

図版19 動物遺体(1)

図版20 動物遺体(2)

図版21 動物遺体(3)

第1章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

船倉貝塚は岡山県倉敷市船倉町で発見され、発掘調査が行われた縄文時代の貝塚である。

倉敷市は岡山県南部中央やや西の、瀬戸内海に面した場所に位置する。市域の北は標高300m以下の丘陵群が存在し、その南には近世以降の干拓によって生まれた平野が広がる。干拓平野の中には、かつての内海の島々がとりこまれ、平地の中にいくつもの小丘陵が点在する様相を呈する。船倉貝塚もそうした丘陵の裾に立地しているのである。

平野部から沿岸部にかけてのおおまかな状況を見ていくと、市の南東部はかつて県内最大の島であったといべき児島の西端部分にある。児島の北・西岸は干拓平野に覆われ、海水と切り離されているが、南岸は現在でも海岸である。市域の中央から南西部は江戸時代以降の干拓地の沖に昭和期の埋め立てによって生まれた水島工業地帯を繼ぎ足したようななかたちとなっている。この部分に岡山県三大河川のひとつである高梁川が南流し、水島灘に注いでいる。

当地域における縄文時代の遺跡の多くは、これまで述べたようなその当時の海岸線に連なるようにして存在する。即ち、平野の北側の山裾や児島の北岸から西岸にあたる部分。そして平野に点在する小丘陵の裾に立地するのが一般的である。

第2節 歴史的環境

船倉貝塚は倉敷市街の南東にある標高約100mの向山丘陵の西裾に立地する。江戸時代に諸物資の集散地として繁栄した倉敷の古い町並に程近く、船倉の地名は蔵屋敷が倉敷川沿いに立ち並んだことに由来している。貝塚の眼下に流れる倉敷川の水運は、町並の発展の基盤となったものである。倉敷川は、近世干拓が進むなか、高梁川の古い時代の分流の水尾筋を整備改修したものと考えられており、南で児島湾につながっていた。満潮時には海水がさかのぼり、汐入川と呼ばれた。昭和前半期に児島湾干拓工事が進み、湾の淡水湖化が完了するまでは細々とながら海と通じていたのである⁽¹⁾。

貝塚周辺の平野の大部分は、先述したように近世干拓により形成されたもので、それ以前は高梁



第1図 遺跡の位置

川により徐々に沖積化が進行する遠浅の入海であった。時代を縄文海進期にまで逆上れば、より深く広い海域が出現していたはずであるが、市内数カ所におけるボーリング調査によると、現在の平野部における海進以降の堆積層の厚さが10mくらいであり、縄文貝塚が形成された時代でも、海底はそれほど深くなかったと推定されている⁽²⁾。

船倉貝塚周辺の縄文時代遺跡を見てみると、同一丘陵の北麓に羽島貝塚、その東の早島丘陵に五日市貝塚、黒崎貝塚が存在する。羽島貝塚は旧海岸にできた砂州の上に立地するもので、前期前半の羽島下層式の標識遺跡である。この地域が入海になって縄文人が生活はじめたころの代表



- | | | | |
|-------------|---------------|---------------|-------------|
| 1. 船倉貝塚 | 2. 羽島貝塚 | 3. 五日市貝塚 | 4. 黒崎貝塚 |
| 5. 西岡貝塚 | 6. 菅生小学校裏山遺跡 | 7. 舟津原貝塚 | 8. 磯の森貝塚 |
| 9. 船元貝塚 | 10. 広江・浜遺跡 | 11. 福田貝塚 | 12. 浦田貝塚 |
| 13. 連島西之浦貝塚 | 14. 里木貝塚（船穂町） | 15. 凉松貝塚（船穂町） | 16. 長尾神社南遺跡 |
| 17. 島地貝塚 | 18. 富田小学校西遺跡 | 19. 月の木遺跡 | 20. 岸本貝塚 |
| 21. 山の神西遺跡 | 22. 煙の前遺跡 | 23. 阿原遺跡 | 24. 東元浜貝塚 |
| 25. 西元浜貝塚 | 26. 中津貝塚 | | |

第2図 周辺の縄文時代遺跡

的な遺跡である⁽³⁾。一方船倉貝塚、黒崎貝塚は海岸より少し上がった斜面に立地している。倉敷市街地北の山裾には西岡貝塚、菅生小学校裏山遺跡がある。菅生小学校裏山遺跡は山陽自動車道の倉敷インター建設に先立ち発掘調査が行われており、旧石器時代・縄文・弥生・奈良時代以降の遺構、遺物が報告されている⁽⁴⁾。縄文時代の遺構では晚期の木の実貯蔵穴が特筆される。市街地の南では、児島の北岸に位置する舟津原貝塚でも晚期の木の実貯蔵穴が検出されている⁽⁵⁾。その西隣は、当地域において最も早くから貝塚が形成されたと考えられる磯の森貝塚である。羽島貝塚において羽島下層式(前期前半)の時期にはまだ貝塚は形成されておらず、次の磯の森式(前期中頃)の時期でも貝塚は見られない。この前期中頃に本格的な貝塚が形成されたのが磯の森貝塚である。高梁川河口に近く、貝の生育に適した干潟がより早くから発達する条件に恵まれたと思われる羽島貝塚よりも古い時期にこの磯の森貝塚が形成されたことは、周辺の自然環境を考える上で注目される⁽⁶⁾。児島の西岸には浦田貝塚、福田貝塚そして広江・浜遺跡が存在する。広江・浜遺跡は貝塚を伴わない縄文後・晚期の遺跡で、弥生時代前・後期の土器、古墳後期の製塩土器、奈良・平安時代から中世にいたる遺物も出土している⁽⁷⁾。児島の沿岸では古墳時代後期に土器による製塩が盛んに行われ、船元貝塚、浦田貝塚、福田貝塚でも上層から製塩土器が出土している。児島の西には高梁川の旧分流をはさんで連島の丘陵がある。その南麓には連島西之浦貝塚が存在する。

高梁川西側でも山裾や小丘陵麓に里木貝塚、涼松貝塚、島地貝塚などの縄文遺跡が並び、密集地帯を形成している。その中で、山の神西遺跡は海岸線より奥まった地点にある。柏島丘陵と黒崎との間にある細長い干拓地に面して、東元浜貝塚、西元浜貝塚、中津貝塚が存在する。中津貝塚は旧海岸段丘上に立地しており、後期初頭の中津式土器の標識遺跡として知られている。昭和30年(1955)に埋葬人骨の調査が行われ、屈葬人骨を納めた楕円形の土壙墓が確認された⁽⁸⁾。当地域における縄文遺跡のうち縄文人骨が発見された例は中津貝塚の他、羽島貝塚、西岡貝塚、磯の森貝塚、船元貝塚、福田貝塚、里木貝塚、涼松貝塚、西元浜貝塚など数多くあり、船倉貝塚も新例として加わった。

註(1) 間壁忠彦「倉敷川畔の昭和初期金石文字」『倉敷の歴史 第7号』倉敷市史研究会 1997年

(2) 間壁忠彦「倉敷市街地の地盤」『新修倉敷市史 第8巻』倉敷市史研究会 1996年

(3) 藤田憲司ほか「羽島貝塚の資料」『倉敷考古館研究集報 第11号』1975年

(4) 「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告81」岡山県教育委員会 1993年

(5) 「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告71」岡山県教育委員会 1988年

(6) 間壁忠彦「貝塚の時代」『新修倉敷市史 第1巻』倉敷市史研究会 1996年

(7) 間壁忠彦・間壁蘋子ほか「広江・浜遺跡」倉敷市教育委員会 1979年

(8) 錦木義昌「縄文遺跡における埋葬施設の一例」『石器時代 1』石器時代文化研究会 1955年

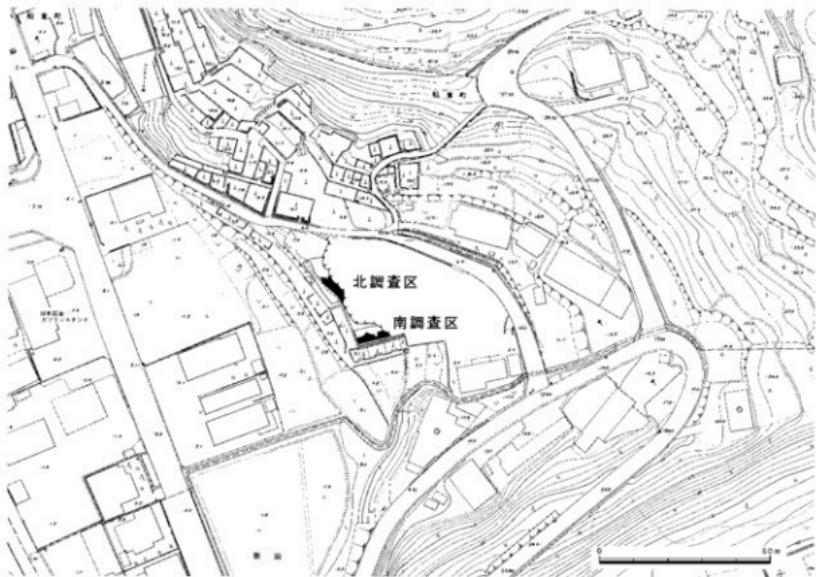
第2章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯

都市計画道路羽島四十瀬線は、美観地区を中心とした倉敷市街地の南側周辺における慢性的な交通渋滞の緩和を目的に計画された道路である。この路線の内、羽島から船倉町に至る間にある標高90mほどの向山丘陵は、延長800mにおよぶトンネルで抜けるというもので、平成3年度中の開通をめざして工事が進められていた。平成3年7月の時点では、トンネル本体はすでに貫通し、付帯工事およびトンネル西出口から既存の道路へ接続する部分の工事へと入った段階であった。

平成3年7月5日の夕方、市内新田在住の川瀬潔氏が、たまたま当該工事現場近くを散歩していたところ、トンネル出口部分で削り残されていた崖断面に厚さ30cmほどの貝層が露出しているのを発見された。このことは当日の内に市埋蔵文化財担当者に連絡され、翌朝7月6日に現地において当該貝層が縄文貝塚の一部であることが確認された。当該貝塚については、それまでその存在が確認されていないものであったため、工事を発注していた市土木部道路建設課(当時)に対し、状況を説明するとともに当該地付近の工事の中止を求め、遺跡の取扱いについての協議を開始した。

発見当时、貝塚はトンネル側からの工事により、東側から大きく削平をうけており、また西側は



第3図 船倉貝塚周辺の地形

かつての墓地造成によりコンクリートの擁壁となっていたために、貝塚部はかろうじて東西4m、南北16mほどの半島状に残された恰好となっていた。一方、貝塚と計画道路との位置関係については、貝塚がトンネル西出口から約80mほどの、道路予定地のほぼ中央に位置していることが明らかとなった。こうした状況を踏まえ、協議を進める中で貝塚の現況での保存は不可能であるとの判断に達し、やむを得ず緊急発掘調査を実施することになった。これを受け、発掘調査委員会が組織され、調査が開始された。

第2節 調査の経過

船倉貝塚の緊急発掘調査は、平成3年7月8日から同年11月30日にかけて実施し、その経費はすべて原因者である倉敷市が負担した。

調査は、まず削平された東側の崖面の精査から行われ、貝層は現地表下約40cmほどのところで幅約10mにわたって存在することが確認された。調査にあたっては工事用計画杭を利用し任意の基準線を決め、グリッドを設定し掘り下げを開始した。またこれにより貝層西側部分についても、墓地造成以前にすでに削平を受けていることが明らかとなり、残された貝層の上面の広がりは、東西約3m、南北約10mほどの細長いものとなった。貝層の掘り下げに際しては、グリッドにあわせ50cm単位のメッシュを組み、精査を行うとともに、メッシュ毎に10cm厚で分層して貝層の採取を行った。このため貝層の掘り下げには多くの期間を要したが、8月9日にはおおむね貝層部分の掘り下げを完了し、貝層断面の剥ぎ取り転写を行った。

なおこの間、貝層の全容がほぼ明らかとなった8月4日に現地説明会を開催したところ、約180人の参加者を得ることができ、本貝塚に対する市民の关心の高さをうかがわせた。

このうち、貝層下面を精査する中で、調査区の南寄りの地点で2基、西寄りで1基のあわせて3基の土壙墓が発見され、それぞれ良好な状態で人骨が残存していることが判明した。このため人骨の分析については、兵庫医科大学解剖学教室の欠田早苗氏および和田 洋氏に依頼し、9月3日には人骨についての現地調査が行われ、指導助言をいただいた。

引き続き、土壙墓の掘り上げ、地山の確認等の作業を行い、ひとまず9月27日で現地調査は終了した。

ところが、その後の工事の進展に伴い、貝層のみつかった地点から南へ約11mほど離れた地点にも貝層が残存していることが判明した。このため、すでに調査の完了した区域を北調査区、今回新たに見つかった貝層部を南調査区と呼称し、急遽10月17日に調査を再開することになった。当該地は、本線から側道への取り付け部にあたり、墓地の一部として残されていた部分である。貝層は、南へ向かって傾斜する斜面に堆積しており、小規模ながらさらに工事予定地外へと広がっているものと思われた。ここでの貝層の広がりは、調査区域内で東西約9m、南北約3mにわたって確認され、厚さは約40cmに達するところがあった。調査については、北調査区から延長した基準線を用い、貝層部分についても北調査区と同様の手法により精査を行い、貝層の採取も行った。南調査区については、土壙墓等はみられず、11月30日をもって現地でのすべての作業を完了した。

なお、遺物整理については、小野雅明が中心となり、平成4年度までは文化課粒浦分室にて行い、平成5年度以降は新設なった倉敷埋蔵文化財センターで行った。整理にあたっては、貝層の洗浄選別に多くの期間を要すこととなったが、とりわけ自然遺物については数多くの貴重なデータを得ることができ、貝および獸骨等の分析にあたっては、早稲田大学の金子浩昌氏のお手をわざらわした。

船倉貝塚発掘調査委員会

委員長	今田昌男	倉敷市教育委員会	教育長
副委員長	杉本保男	〃	教育次長
委 員	三好繁光	〃	社会教育部長
〃	間壁忠彦	倉敷市文化財保護審議会	会長
〃	山本慶一	〃	副会長
〃	小野一臣	〃	委員
専門委員	福本 明	倉敷市教育委員会文化課	学芸員
〃	鍾谷守秀	〃	
〃	小野雅明	〃	
〃	藤原好二	〃	
監 事	三宅正廣	倉敷市教育委員会	社会教育部次長
事務局長	香西文雄	倉敷市教育委員会文化課	課長補佐
書 記	橋本篤男	〃	文化財係長

(肩書き及び役職名等はいずれも調査当時)

第3章 発掘調査の概要

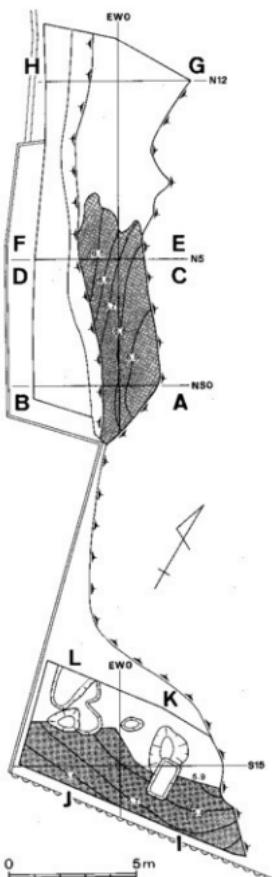
第1節 調査区の概要と層序

船倉貝塚は向山丘陵の西裾で等高線が東に入り込んだ、やや傾斜のゆるやかなところに位置する。標高は約5mから7mの地点である。道路建設に伴う掘削工事により最初に発見されたのは、北側の貝塚であったため、当初はこの地区を中心に発掘調査が進められた。しかし、後に南側にも貝塚が残っていることが判明し、引き続き発掘調査が行われた。これら2つの貝塚は分断されており、両者の関係は不明であるが、当地は開墾や宅地造成などのため削平されているらしく、両地点の貝塚は本来連続したものであった可能性もある。そのため、北貝塚、南貝塚とする呼称は避け、北調査区貝層、南調査区貝層とする。調査区は、北調査区貝層の任意の点を基準点として、細長く残されている貝層を見すえ、AからHまでのグリッドに区分した。南調査区の調査では、この基準線を延長して基準点から南15mのところを中心にIからLに区分した。このため、全体的に均整を欠いたグリッド割りとなった。貝層は東側を道路工事により削り取られ、西側は宅地造成などにより切断されていた。南調査区貝層ではさらに南辺が石垣の造成により破壊を受けていた。もともとの貝層の広がりがどのくらいであったのは不明であるが、工事関係者の話によれば、掘削工事の過程で北調査区の東(山側)10mくらいから貝層が見えはじめたという。調査した貝層の平面積は北調査区で約20m²、南調査区で約17m²である。

調査区の土層観察は、幅30cmの畦を設けて行った。貝層の周辺を含め、基盤層までの全層位を羅列すると煩雑になるが、北調査区と南調査区とに分けて概略を記述する。

北調査区の層序

1層～4層(造成層) 厚さ約40cmの淡茶褐色土層で、破碎された貝殻が少し含まれる。ブロック塀、電柱などの基礎工事による掘り込みが散見される。近代の遺物、縄文時代の遺物が出土している。



第4図 貝層上面の地形(S=1/200)

5層～7層 貝層西側が段状にカットされた部分に二次堆積したもの。5層は貝層の二次堆積である。

8層～10層 E、Fグリッドの間で検出された土壌内の堆積層。円礫混じりの土層で、縄文時代の遺物に混じり、9層から中世の遺物が出土している。なおこの土壌は、土層観察用の畦の中に納まるくらいの狭小なものである。

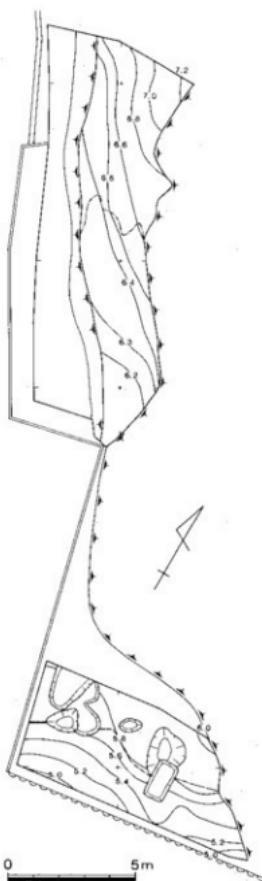
11層・12層 E、F、G、Hグリッドにかけて検出された円礫層である。土層断面は土壌状であるが、明確な掘り方は検出されなかった。11層から古墳時代後期の須恵器杯が出土している。

13層 円礫を含む灰褐色土層で、縄文時代後期の遺物が少量出土している。

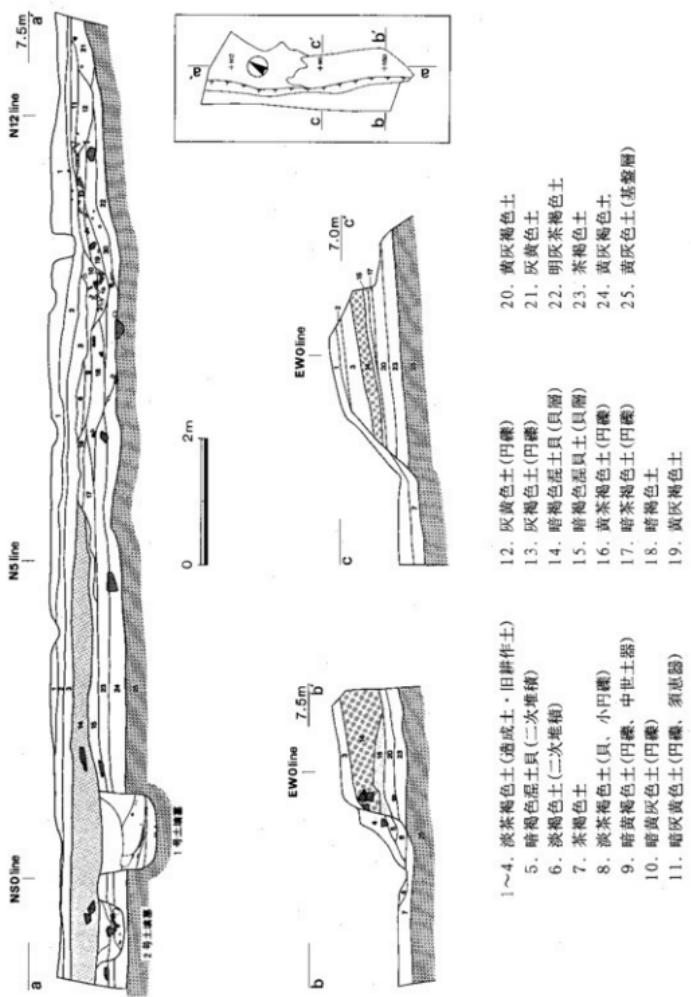
14層・15層(貝層) 貝塚を構成する堆積層で、貝の含まれる密度の違いから14層の暗褐色混土貝層と15層の暗褐色混貝土層に分けられる。貝層はマガキ主体で、ハマグリ、ハイガイやアカニシ、ウミニナ類などが含まれている。同種の貝がまとまるブロックや貝の破碎層は認められない。出土した土器は、縄文時代前期の羽島下層式、磯の森式、彦崎ZI式、里木I式、中期の船元I式から船元III式、後期の中津式、福田KII式、津雲A式、彦崎KI式、彦崎KII式である。このうち羽島下層式の出土量はごくわずかで、比較的上位より出土していることから他層から混入した可能性が強い。船倉貝塚で検出されたような貝層は、出土した土器が示すように、長期間にわたり同じ場所に貝殻などの日常の食べカスが廃棄され、それと同時にまわりの堆積過程と同様に土砂が流れ込みながら形成された堆積層であると理解される。近年の貝塚の調査方法として、廃棄の単位あるいはそのまとまりを明らかにすることを目的として綿密な貝層の区分を行い、それに基づいた分析が行われるのが通例であるが、船倉貝塚においては、間層などの土層を区別する指標となるものが認められないために分層は行っていない。このことは、貝層と周辺の堆積層との関連を理解する上でも障害となっている。15層を除去した段階で1号土壌墓、2号土壌墓が検出された。

16層 マンガンを含む黄茶褐色土層で、円礫が少し混じる。後期の遺物が目立って出土しており、13層とともに縄文時代の包含層として捉えられるであろう。

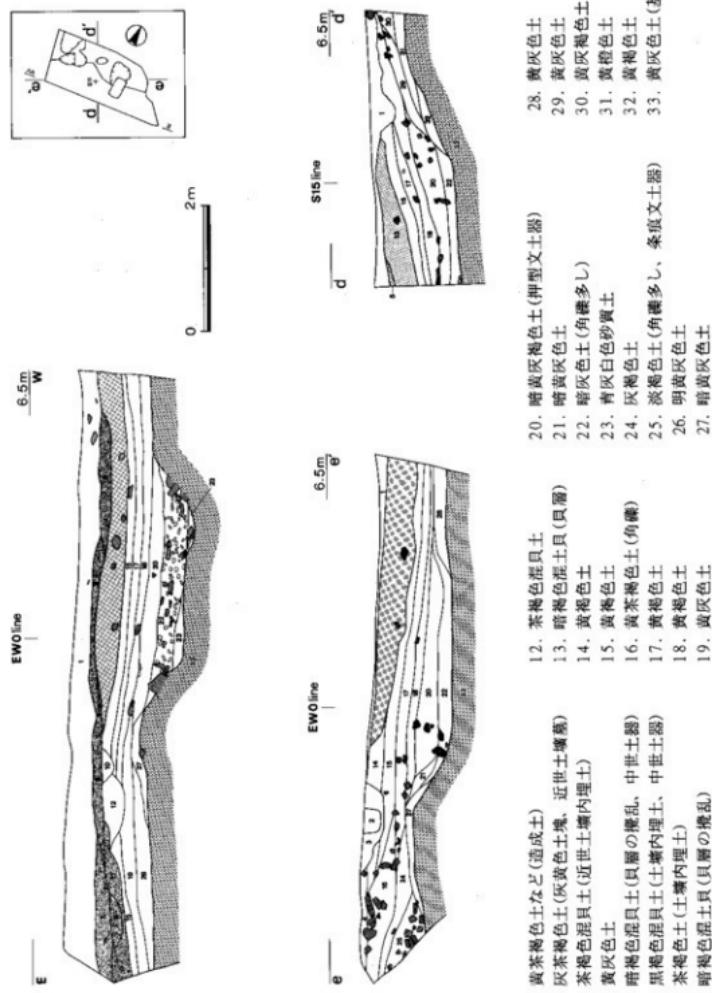
17層～19層 マンガンを含む暗茶褐色土層・暗褐色土層・黄灰褐色土層で、北側に向かって人為



第5図 貝層除去後の地形(S=1/200)



第6図 北調查区断面図 (S=1/80)



第7図 南調查区断面図 (S=1/80)

的な落ち込みが認められる。Eグリッドにおいて後期の溝状遺構が検出されており、この時期の生活痕跡として捉えられる。層位的には、貝層の下にあたることから、1号土壙墓、2号土壙墓が検出された付近の貝層と区分する材料になるであろう。後期の遺物に混じって里木I式、船元I式も出土している。

20層 マンガンを含む黄灰褐色土層で、落ち込みの中の堆積層である。基盤層に近いところから後期の土器が出土しているが、里木I式を中心とした前期の土器も出土する。Fグリッドにおいて、この層の下から前期の土壙1が検出されている。

21層 マンガンを含む灰黄色土層で、遺物はほとんど出土していない。

22層 マンガンを含む明灰褐色土層で、基盤層直上に堆積する。磯の森式、里木I式が出土している。

23層 貝層の直下に堆積する茶褐色土層である。羽島下層式、彦崎ZI式などが少量出土した程度で、遺物はあまり含まれていない。本来は少なくとも調査区全面に広がっていたと思われるが、貝層の北側では縄文時代後期を中心とした活動により失われたと考えられる。

24層 基盤層直上に堆積する黄灰褐色で、23層と同様に貝層の北側ではみられない。土器はほとんど出土しておらず、わずかにサヌカイトのチップが出土している。この層を掘り下げる過程で3号土壙墓を検出した。

25層 マンガンを含む黄灰色土で、南調査区へも続き、付近一帯を覆っている。今回の調査で基盤層として捉えた土層である。

以上、北調査区の層序を概観したが、貝塚は縄文時代前期から後期の期間、同じ場所に引き続き形成されていること。また、貝塚の北側は、後期土器の出土量の多さや溝状遺構の存在が示すように、この時期の活動が活発であったことが知られる。

南調査区の層序

1層(造成層) 宅地造成土で、貝殻が少し混じる。貝層の土壤がブロック状に含まれる部分もある。近代の遺物、縄文時代の遺物が出土している。

2層(近世土壙墓の埋土) 灰茶褐色土層で、厚さ2~3cmのタタキ状の灰黄色土塊が重なった状態で検出された。灯明皿などの土器、陶磁器片、魚骨などが出土している。

3層(近世土壙の埋土) 茶褐色混貝土層で、土壙墓の構築に伴う可能性もある。

4層 黄灰色土層で、近世の整地土と思われる。

5層~8層・11層(貝層の攪乱層) 内容物は貝層に近いが、後世の活動により貝層土壤が攪乱を受けた層である。調査区の南には石垣が築かれており、調査区南端は破壊されている。7層から中世の遺物が出土している。

9・10層(中世土壙の埋土) Iグリッド南壁で検出されたもの。9層の埋土は貝層の土壤で、土師質椀などが出土している。

13層(貝層) 暗褐色混土貝層で、北調査区のように貝が含まれる密度の違いは認められない。マガキ主体で、ハマグリ、ハイガイやアカニシ、ウミニナ類の他少量のオキシジミ、ヤマトシジミな

ども含まれている。貝の破碎層、間層などは認められず、分層は行っていない。出土土器は、前期の磯の森式、彦崎Z I式、里木I式、中期の船元I式から船元III式、後期の中津式、福田K II式、津雲A式、彦崎K I式、彦崎K II式である。上層観察では明確にできなかったが、地区ごとにみると、Iグリッドでは後期の遺物が多く、J・Lグリッドでは磯の森式の遺物が多いといった差異が認められる。磯の森式は、北調査区においてはわずかしか出土しておらず、J・Lグリッドの調査によって、貝層にこの時期の遺物が含まれることが明らかとなった。

14層 I・Kグリッドにみられる貝層縁辺の堆積層。船元I式などが出土している。

15層 貝層直下の堆積層。Iグリッドで円礫の集中する火所が検出された。少量の土器片が出土している。

16層～32層 小さな谷状地形に、角礫を含んだ土砂が順次堆積していった過程をしめす。遺物はわずかながら、20層から楕円押型文土器、25層から二枚貝条痕の土器が出土している。

33層(基盤層) マンガンを含む黄灰色土層で、北調査区の22層に対応するものである。

以上、北調査区、南調査区の堆積層について略記したが、貝塚の形成過程に焦点をしぼって概観したい。貝塚が最初に形成されはじめたのは前期磯の森式の時期と考えられる。J・Lグリッドの貝層でその時期の遺物がよく保存されているとみられる。その後、里木I式の時期までに、ある程度の範囲で貝層の堆積が進んだであろう。この時期には北調査区で土壌墓、土壙が構築されており、当貝塚が重要な活動の拠点であったことがうかがえる。しかし、中期前半の遺物は比較的少ないことから、活動の中心が別の場所に移ったのかもしれない。そして、中期後半の遺物はほとんどみられなくなる。後期になると再び遺物も目立ちはじめ、後期中頃の遺物は包含層出土を含めて最も量が多い。上層が失われている可能性を考慮に入れなければならないが、その後の縄文時代の遺物はこれまでの整理の過程で確認されていないことから、彦崎K II式の時期に船倉貝塚は終焉を迎えたと考えられる。

第2節 縄文土器の分類について

今回の調査で出土した縄文土器は、縄文時代早期から後期までにわたる。これらを整理報告するために分類し、下記のとおり便宜上の名称を与えることにする。分類にあたっては従来の編年型式を基準とすることは言うまでもないが、最近の研究成果に即していない点があることを最初にお断りしておく。

〈縄文時代早期〉

包含層から押型文土器が出土している。また、編年の位置が明らかにできないが、二枚貝条痕調整の著しい土器が包含層から出土している。

〈縄文時代前期〉

前期I類：口縁外面を段状貼りつけにより肥厚させるもの。この部分に刺突文を加えるものもある。内面、外面には二枚貝による条痕がみられる。羽島下層式の特徴をもつ。

前期II類：口縁部付近に爪形文をめぐらし、胸部には縄文が施される。爪形文をもたず縄文のみ

施されるものもある。船倉貝塚では個体数が少ないため爪形文の種類も少なく、右に開口し、上下に区画沈線をもつものと連続爪形文が確認されている程度である。縄文は節が細長く密接しており、繊細な感じがする。また、前期IV類のものに比べて器表に浅く施文される傾向がある。器厚は薄手で内面を平滑に仕上げるのが一般的である。磯の森式の特徴をもつ。

前期III類：竹管状工具で押引き刺突文を施す。地文は無文とし、器表には指頭様の押圧、押引き刺突文による裏面への影響をそのまま残すなど凹凸が顕著にみられる。出土量はごくわずかである。彦崎II式の特徴をもつ。

前期IV類：縄文地に細い貼り付け突帯をめぐらし、その上に竹管状工具による押引き文を施したり、幅広の粘土帯を貼り付けた上に縄文や竹管文を施すもの。口縁部の形態でみると、口縁内外を被うようにして粘土帯を貼りつけるものや内側に折り返し状になるもの、外側を肥厚させるものなど様々なものがあり、出土個体数は比較的多いと言えよう。里木I式の特徴をもつ。

〈縄文時代中期〉

中期I類：燃りがゆるく細めの縄文を地文とし、爪形文、二枚貝の圧痕や竹管状工具による平行沈線がつけられるもの。出土量は少ない。船元I式の特徴をもつ。

中期II類：貼り付け突帯により文様を描くもの。出土量はごく少ない。船元II式の特徴をもつ。

中期III類：貼り付け突帯に沿って竹管状工具による平行沈線がつけられるもの。竹管状工具により直線と弧状曲線を組み合わせて描くもの。沈線あるいは短沈線により文様を描くものなどがある。地文としての縄文は太い原体によるものであるが、地文をもたないものや縦位に平行沈線を施すものもある。このような文様の要素は、船元III式の内容の一部である。

〈縄文時代後期〉

後期I類：磨消縄文を施すもので、中津式の特徴をもつ。

後期II類：3本1組の沈線をめぐらし、その内側に縄文を施す。出土量は少ない。福田KII式の特徴をもつ。

後期III類：いわゆる縁帶文土器で、従来の型式名称として津雲A式、彦崎K I式の名がある。この2型式の内容の違いは、地域差を示すものとする見解と、時期差を示すものとする見解の2とおりがあるが、近年の調査研究で津雲A式が彦崎K I式に先行するとの見解が示されている。

後期IV類：従来の彦崎K II式の特徴をもつものを中心とした。この形式に先行する資料がいくつかの報告で示されており、それらと対比できる内容をも含む。また、今回の報告では、後出的な要素をもつものも含んでいる。

後期無文土器：後期I類から後期IV類に伴う無文土器を一括する。全く文様の要素が認められないものと、口縁端に刻目等の簡素な施文がみられるものが該当する。

第3節 遺構と出土遺物

北調査区の貝層を除去した段階で3基の縄文時代の土壙墓が確認された。検出順に1号から3号の番号で呼ぶことにする。また、北調査区貝層の北側で縄文時代前期の土壙と縄文時代後期とみられ

る溝状遺構が検出された。これらの遺構について概要を記述する。

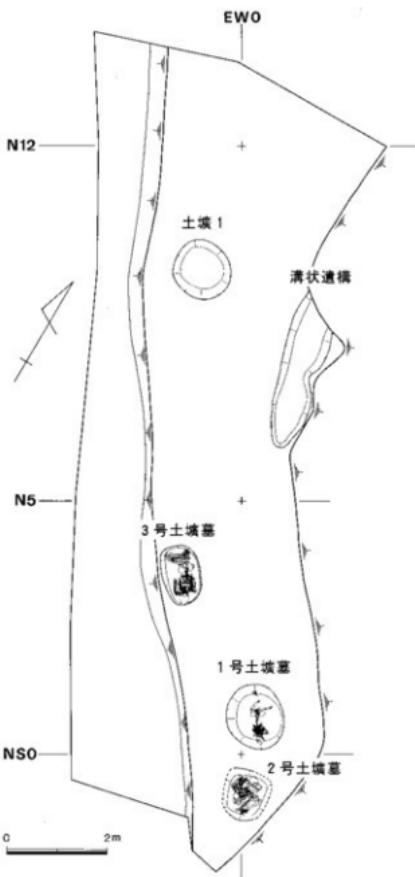
1号土墳墓

遺構と出土人骨

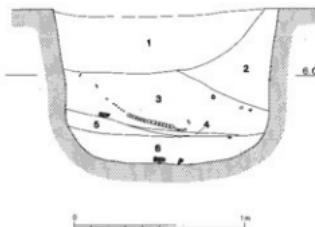
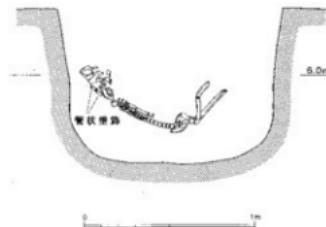
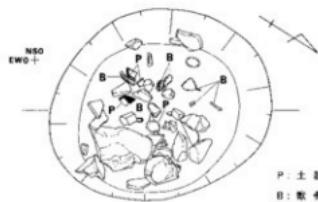
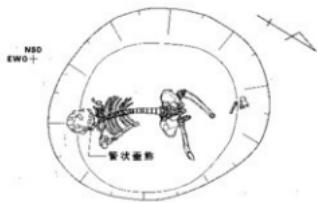
貝層最下部の暗褐色混貝土層を全て採取し、茶褐色土層の上面を露出した段階で確認された。検出面は標高6.4mくらいで、暗褐色混貝土層が堆積した後に墓壙が築かれているとみられる。平面形は130×110cmの楕円形で、残存する深さは約90cmである。底は基盤層を掘りこみ、底面は標高5.5m前後に位置している。

土壙墓内には埋葬人骨1体が残存しており、1号人骨と呼称する。頭位は南東で、仰向けにして頭部と脚部を高くした状態で検出された。体位を横からみると、臀部を最下点としてゆるくV字状に屈曲している。腕の位置は不明である。両脚部は大腿骨までしか残っていないが、埋葬時の姿勢が保たれているとしたら膝を立てた状態であったかも知れない。右側頭部(右の耳付近)に接して管状垂飾2点が出土した。

土壙墓内の埋土は埋葬人骨を境にして上層を3つ、下層を4つに分層した。1層は暗赤褐色混貝土層で、すぐ上の暗褐色混土貝層との区別は、貝の含まれる密度が少ないと土色の違いで明らかである。2層は灰赤褐色土層で貝の含まれる密度は低い。3層は暗褐色混貝土層で貝の含まれる密度は高い。直接埋葬人骨に被さる土層である。4層は暗褐色混貝土で、埋葬人骨の上半身の下だけにみられる。埋葬遺体を安定させるための置き土であるのかもしれない。5層は黒灰色粘質土で、炭化物が面的に広がった状態であった。6層は黄茶褐色土でほとんど貝は含まれない。7層は暗茶褐色土で粒状の炭化物が混じ



第8図 北調査区遺構配置図(S=1/100)



第9図 1号人骨検出状況 (S=1/30)

第10図 1号土壤墓 (S=1/30)

り、人頭大の縄が入り込んでいる。ほとんど貝は含まれない。この層から残りのよい縄文土器やイノシシの頸骨を中心とした動物遺体がまとめて出土している。

出土遺物

土 器(第11・12図)

1号土壤墓からは縄文時代前期IV類の土器が比較的まとまって出土しており、特に埋土下層には保存状態のよい土器が含まれる。1~4は同一個体と思われる。口縁部内外を肥厚し、その上に縄文を施す。口縁端には竹管状工具による押引き文が2列めぐる。土器を正面から見た場合の押引きの方向は、口縁上端のものが右から左、その下のものが左から右となっている。5は口縁端を尖らせ気味にし、内側を縄文帶で飾る。11はほぼ完形のもので、口縁には凹状に窪んだ部分がみられ、その両側は三角形の突起状となるのであろう。外面全体と口縁内面の肥厚部に縄文を施す。内面には横方向のヘラ調整がみられ、口縁肥厚部の直下や胴部と底部の境には指頭圧痕跡が残る。15・16は文様をもたない。埋土上層から出土した33には、無文地に竹管状工具による押引き文が施されており、前期III類の時期の可能性がある。

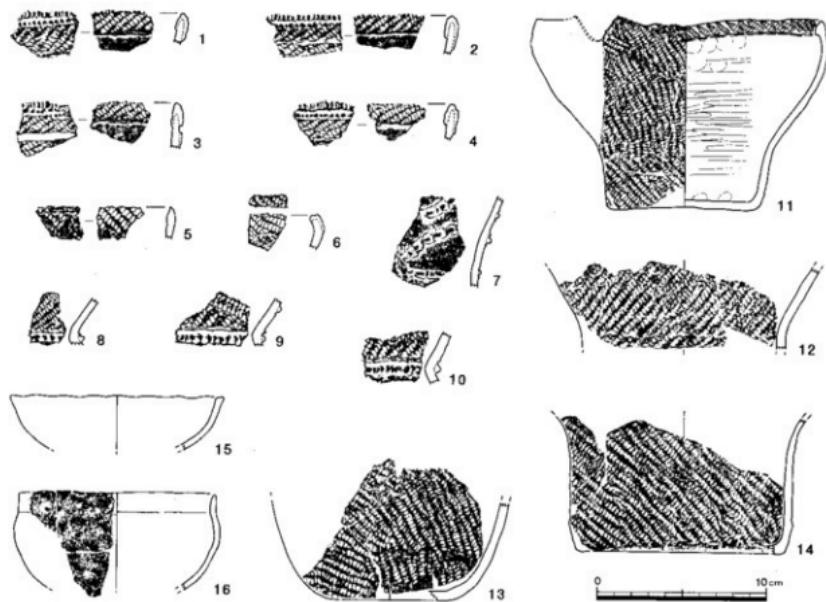
石 器(第13図)

石鏃15点・石匙1点・異形石器1点・スクレイバー2点・叩石1点・石錐2点を図示した。

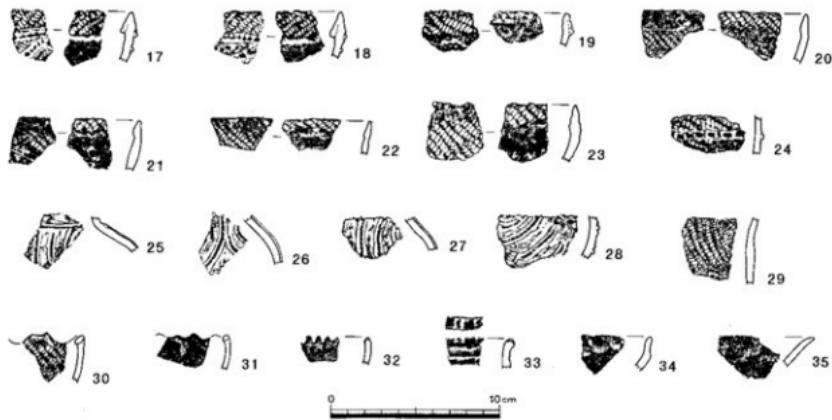
1~15はサヌカイト製の石鏃である。1~12は凹基鏃、13が平基鏃、14・15が凸基鏃である。凹基鏃は2~4のように脚部がすんなりと尖るものが多いようである。凸基鏃は2点ともやや幅が広く、14は特に厚手で粗雑な作りである。

16はサヌカイト製の石匙である。左右対称の横型のもので、両面調整の刃部はわずかに弧状を呈

している。刃部加工は背面側から行われたものが顕著であるが、逆につまみの部分は腹面側から主に成形されているようである。

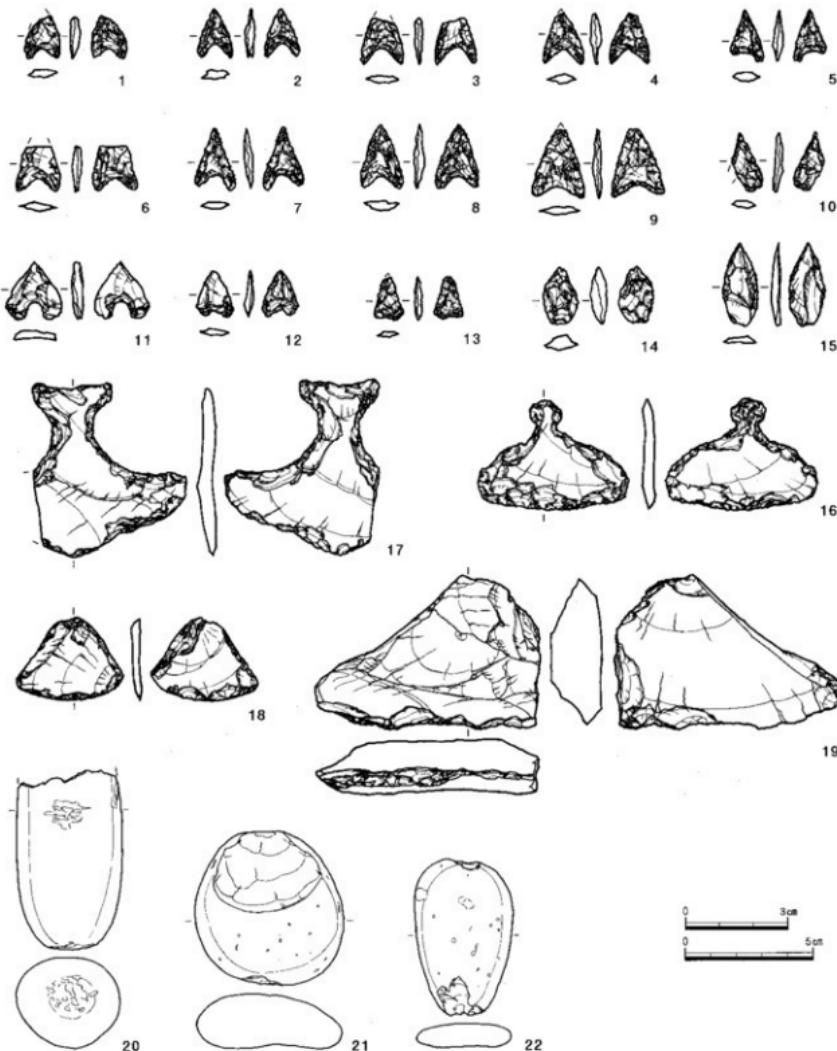


第11図 1号土墳墓下層出土の土器 (S=1/3)



第12図 1号土墳墓上層出土の土器 (S=1/3)

17は単なる石匙の可能性もあるが、鳥あるいは魚をかたどった石製品の可能性もあるためここでは異形石器として扱うこととする。一部欠損しているが、本来は左右対称形であろう。つまみは魚の尾鰭、身部は鳥が翼を広げたかのような形状である。また、石匙ならば刃部にあたる辺には、明

第13図 1号土塙墓出土の石器($S=2/3 \cdot 1/2$)

瞭なコーナー部が認められる。

18・19はサヌカイト製のスクレイバーである。18は小型で弧状を呈する両面調整の刃部を持つ。19は残核を利用した厚手のものである。刃部は急な角度の片面調整で成形されている。

20は安山岩製の叩石である。上部を欠損しているが、長辺に2カ所、先端部に1カ所の敲打痕が残っている。

21・22は打欠石錘である。21は流紋岩製で重量が99.8g、22は玄武岩製で重量33.2gである。

骨角器(第14図)

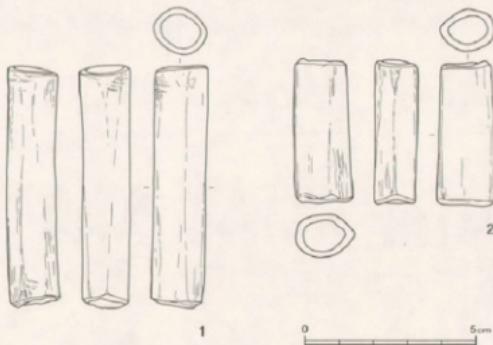
1・2は、1号人骨の右側頭部に接して出土した管状垂飾である。線刻などの装飾はないが、表面はよく研磨されていて光沢がある。素材は大型鳥類の脛骨と思われる。

2号土塚墓

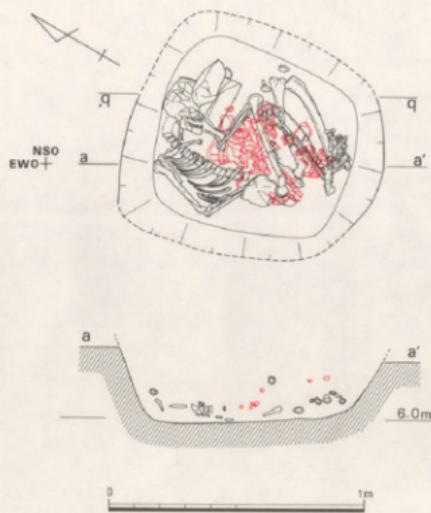
遺構と出土人骨

1号土塚墓が確認された時点で周囲の精査を行い、1号土塚墓の南50cmの位置で土層観察竪の断面により確認された。竪にかかる部分以外は、貝層堆積物としてサンプリング処理されたため、上部の壁は半分以上が失われた。検出面は標高6.4mくらいで、暗褐色混貝土層を切って築かれている。平面形は底部の形状から推定すると $100 \times 90\text{cm}$ 程度の不整隅丸方形ではないかと思われる。残存する深さは約30cmである。底面は基盤層まで達しておらず、標高6.0mに位置している。

2号土塚墓では、埋葬人骨が少なくとも2体残存していた。ほぼ全身骨格が



第14図 骨角器(S=2/3)



第15図 2号・2b号人骨検出状況(S=1/20)

残っていて埋葬時の姿勢を保つものを2号人骨と呼称し、2号人骨とともに葬られた約300からなる焼骨片を一括して2b号人骨と呼称する。2号人骨は1号人骨とは逆に頭を北にしている。埋葬位は体の

左側を下にした側臥屈位で、頭を腹部に向けて曲げている。そして、頭部直上には長さ20cm、幅、厚みとも10cmくらいの角礫が2つみられる。

2b号人骨は2号人骨のほぼ下半身の上を中心に検出された。くわしくは付論1を参照していただきたいが、ほとんどが頭部、上肢、下肢の骨片で、これらの全てが1個体に由来するかどうかは不明とされている。

埋土は5つに分層した。1層は暗褐色混土貝層で、すぐ上の貝層との区別は明瞭でない。2層と3層は茶褐色混貝土層で、土壤中央部にはみられない。4層は黄灰褐色土層、5層は暗褐色土層で、ともに貝をわずかに含む。

出土遺物

土 器(第17図)

2号土壤墓からは縄文時代前期IV類の遺物が出土している。土器はすべて小片で、出土量は少ない。

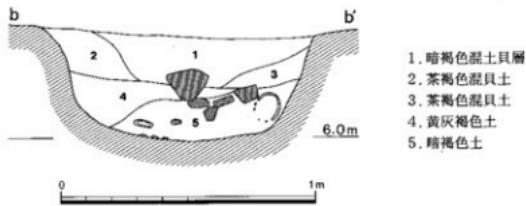
石 器(第18図)

石鏃2点・石錐4点を図示した。23・24はサヌカイト製の凹基盤である。23は前期によく見られる形態で幅が広い。25~28は打欠石錐である。25は粘板岩製、26・27は流紋岩製、28は砂岩製である。重量は25g~53gと比較的まとまっている。

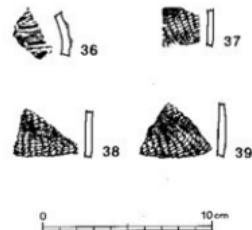
3号土壤墓

Dグリッドにおいて、黄色灰褐色土層を掘り下げる過程で確認された。検出面は標高6.0m。平面形は118×76cmの長楕円形で、残存する深さは約20cmである。底は基盤層を掘りこみ、標高5.8mくらいに位置している。

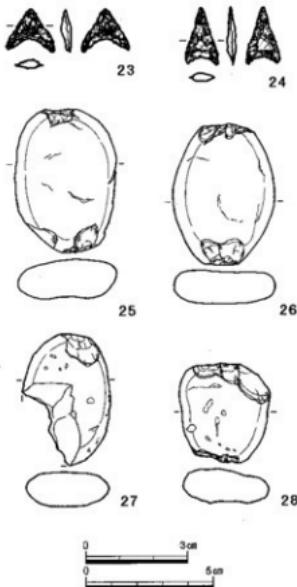
3号土壤墓では、埋葬人骨が1体残存しており、3号人骨と



第16図 2号土壤墓断面図 (S=1/20)



第17図 2号土壤墓出土土器 (S=1/3)



第18図 2号土壤墓出土石器 (S=2/3-1/2)

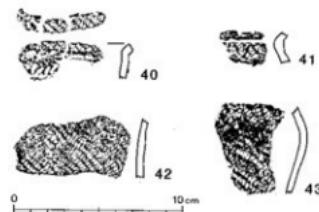
呼称する。頭位は1号人骨と同じ南東で、埋葬位は両脚を左に強く曲げた仰臥屈位である。右腕は、肘を強く曲げて体右側に添わせており、左腕は肘をほぼ直角に曲げて腹部の上に置いている。

埋土は茶褐色土層のみで、貝は含まれない。遺物は出土していないので、時期は明らかではないが、検出状況から他の土壙墓と同じ前期IV類に属する可能性がある。

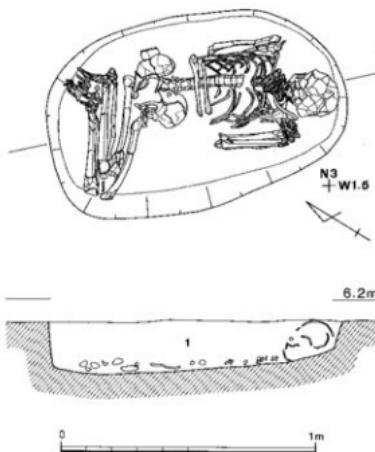
土 壙 1

Fグリッドにおいて、黄灰褐色土層を除去し、基盤層を検出した段階で確認された。検出面は標高6.0m前後。平面形は径120cmの円形で、残存する深さは45cmである。埋土には角礫が混入している。大きいもので長さ35cm、幅、厚みがともに20cm程度である。1層は灰褐色土層で、マンガンを含んでいる。2層は暗褐色土層で、わずかに炭片、焼土を含んでいる。底には基盤層に含まれる角礫が露出している。

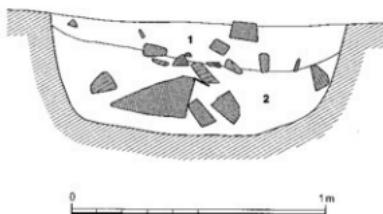
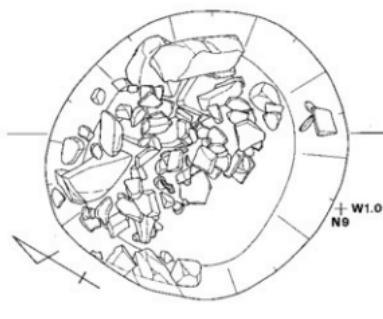
出土遺物には少量の土器・石鏃があり、土器の時期は前期IV類に属すると思われる。石鏃はすべて安山岩製であるが、29は平基鏃で加工が先端部側辺にしか行われていない。また、基部には原礫面を残している。30~32は凹基鏃である。



第20図 土壙1出土の土器 (S=1/3)



第19図 3号人骨検出状況 (S=1/20)

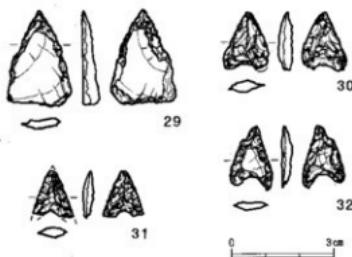


第21図 土壙1 (S=1/20)

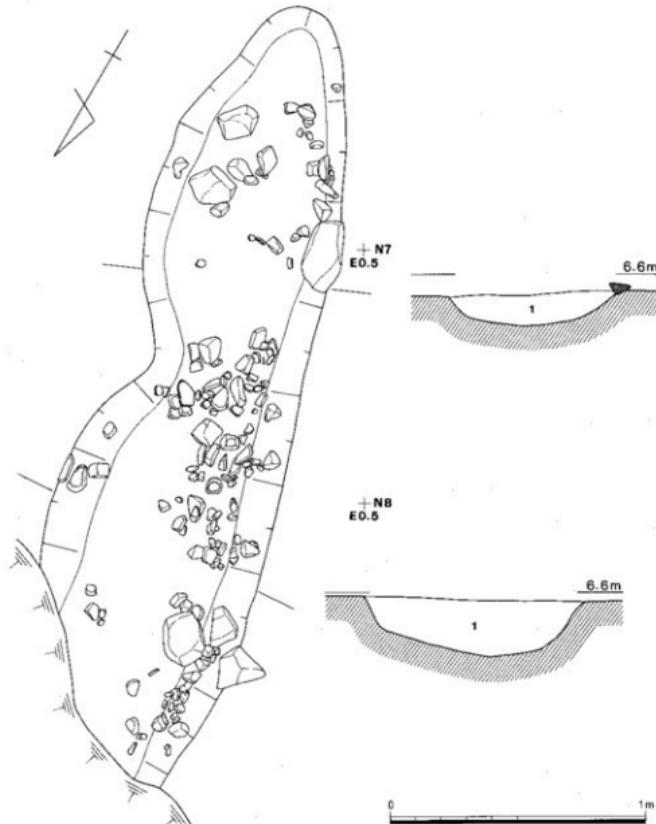
溝状遺構

Eグリッドにおいて、暗茶褐色土層、暗褐色土層を掘り下げる途中で確認された。ほぼ南北方向にのびており、南側に端を確認しているが、北側は工事により切断されている。検出面は南側で6.3m、北側で6.5mである。残存する長さ3m、幅約80cm、深さは15~20cmである。埋土は暗褐色土層で、人頭大の角礫や拳大の円礫が混入している。

出土遺物には數十点の土器があるが、磨滅が著しく図化できなかつた。時期は後期IV類に属すると思われる。



第22図 土壌1出土の石器(S=2/3)



第23図 溝状遺構(S=1/20)

第4節 包含層出土の遺物

1. 土器(第24・25図)

第1節で述べたように、貝層周辺の堆積層および貝層より下の層位において、縄文時代の遺物包含層が確認された。これらの出土遺物のうち比較的残りがよく、特徴がわかるものを選んで掲載する。

早期(44)

44は内外に二枚貝による条痕調整を行い、口縁端面には二枚貝背面を押し当てたものとみられる圧痕がみられる。器厚は7~8mmで、内面には炭化物が付着している。編年的位置がはっきりしないが、早期のなかに位置付けておく。この他、押型文土器がわずかに出土しているが、小片で磨滅が著しいため図化できなかった。

前期I類(45~48)

45は口縁外面を粘土帶貼りつけにより肥厚させ、多裁の竹管状工具の管外側を深く押し当てた刺突文が斜方向に配列されている。肥厚帯直下にも刺突列が一巡し、その下にも口縁部と同様な施文が行われているようである。内面には二枚貝による条痕調整が施されている。46・47の口縁部も肥厚され、内外に二枚貝による条痕調整が行われている。48は胸部で器厚は4mmである。

前期III類(49)

49は無文地に半裁竹管で押引きした刺突文がめぐる。内外とも器壁に凸凹が目立つ。

前期IV類(50~55)

50は口縁内側をく字状に肥厚させ、縄文を施している。この部分にあたる外面にはナデが加えられている。51の口縁内側は剥離している。52・53は胸部である。54・55は底部外面にも縄文が施されている。

中期I類(56~57)

56・57は口縁内側に縄文帶があり、56は口端にも縄文を施している。

中期II類(58)

58は器表を宽带で飾るものである。

後期I類(59)

59は波状口縁となる器形で、太く深い沈線による磨消縄文で飾られている。

後期II類(60)

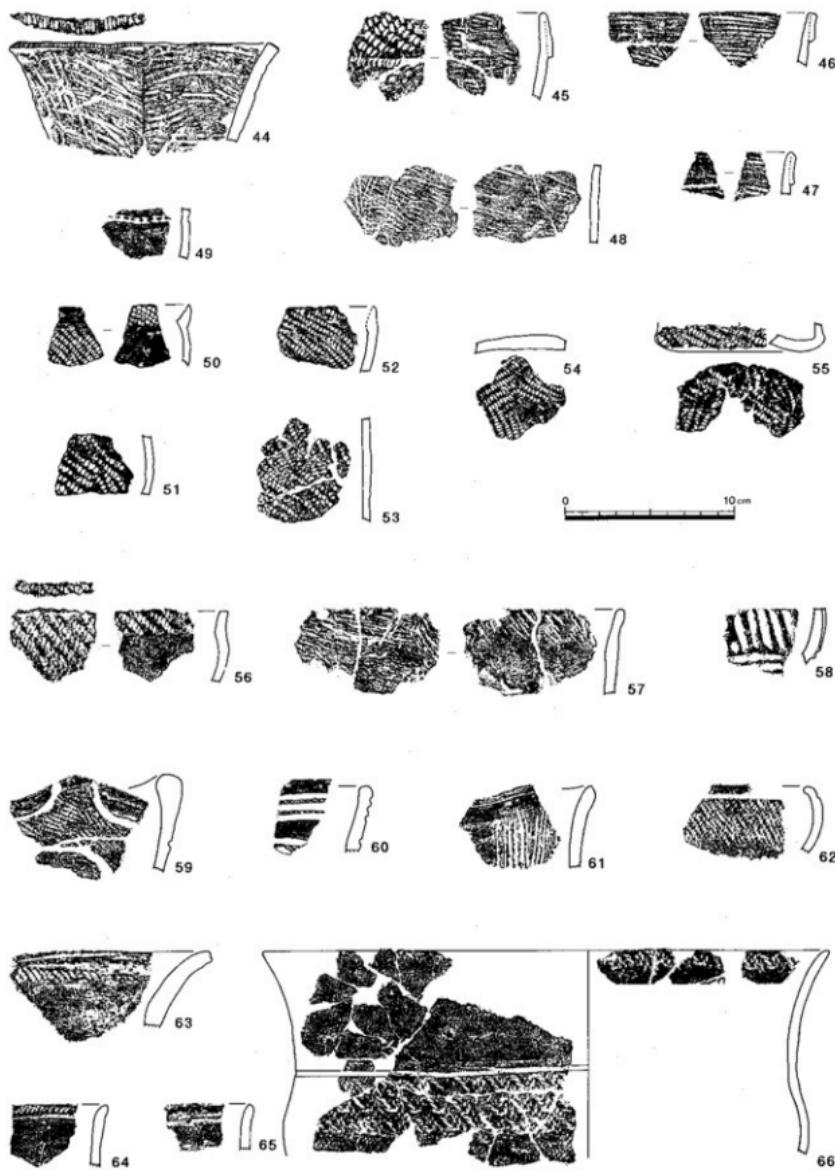
60は3本沈線による文様がめぐり、沈線間の狭いスペースに縄文を配している。

後期III類(61)

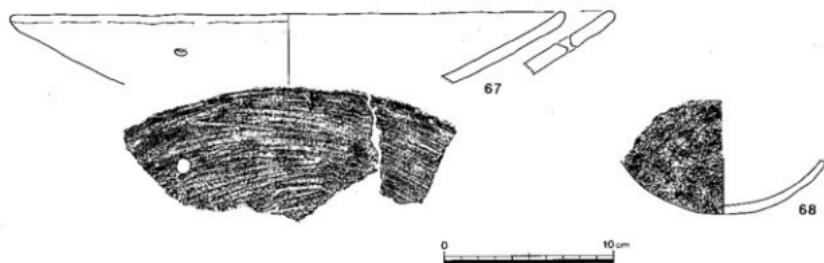
61は波状となる口縁に沿って2本の沈線を加え、その下に垂下条線を施したものである。

後期IV類(62~66)

62は丸く膨らんだ形状の口縁で、口端に沿って沈線を一巡させ、その下に縄文を施している。63は口縁外側に狭い縄文帶をもち、口端には1本の沈線を加えている。器面の内外はナデ調整が施さ



第24図 包含層出土の土器1 (S=1/3)



第25図 包含層出土の土器2 (S=1/3)

れている。64・65は口縁外側をわずかに肥厚させ、64はこの部分に縄文を施すもの、65は施さないもので、どちらも内外面とも横位のミガキ調整が行われている。66は外反する頸部に丸く膨らむ胸部をもつ器形を有しており、後期IV類の深鉢のプロポーションを表すものである。頸部と胸部の境には沈線により区画されている。施文具には結節縄文を用い、口縁内側と胸部に回転施文している。頸部は無文であるが、内外ともていねいなミガキ調整が行われているようである。

67は後期の無文土器で、浅鉢形の器形を有する。内外面とも巻貝による条痕調整が行われ、内側にはていねいなミガキ調整、外側には軽くナデ調整が加えられている。口縁部には穿孔がある。68は丸底となる底部で、施文は認められない。おそらく後期IV類に属する鉢類のものと思われる。内外面とも巻貝による条痕調整が行われたのちナデ仕上げされている。

2. 石器(第26図)

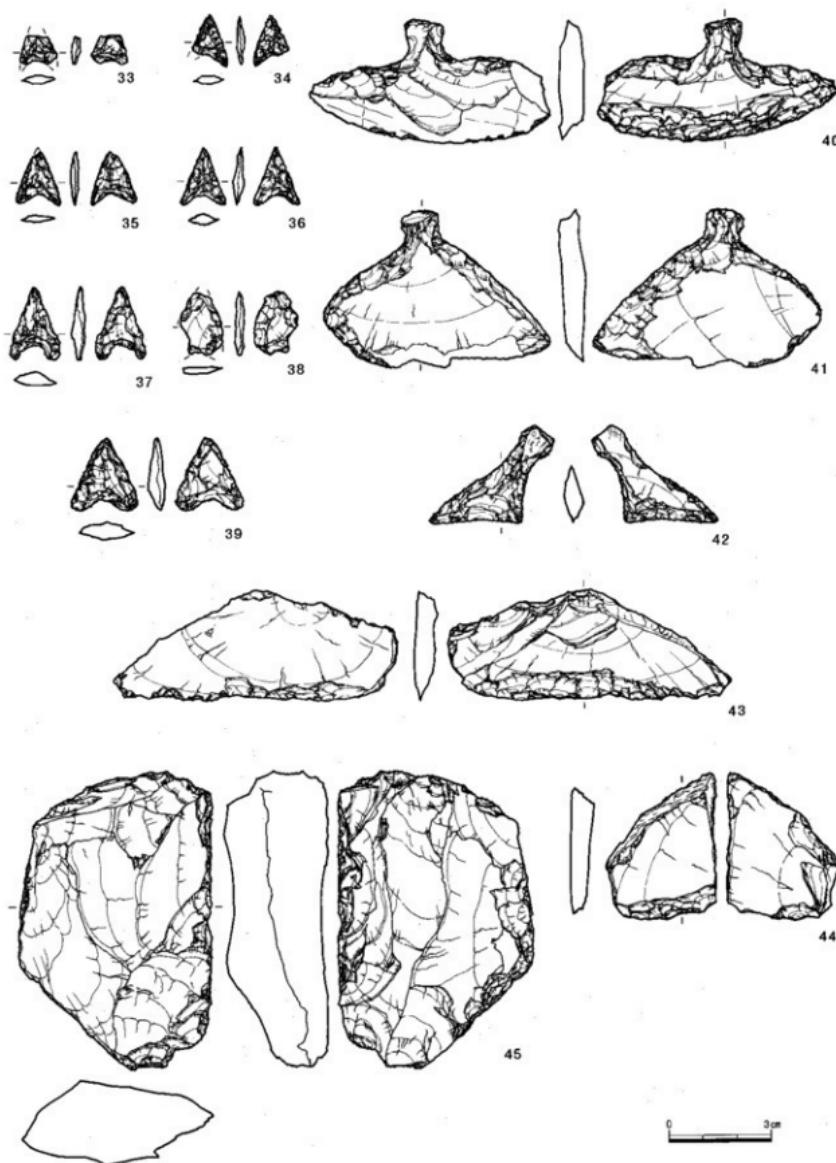
石鏃7点・石匙3点・スクレイバー2点・石核1点を図示した。すべてサヌカイト製である。

33～39の石鏃はすべて四基鏃である。33～39は抉りはそれほど深くないが、すんなりと尖った脚部を持つものである。38は欠損が激しいが、周縁加工があまり深くまで及ばないものである。39は正三角形を呈し、脚部が丸くおさまる形態をしている。

40～42は左右非対称の横型の石匙である。40は槍先の一方の側邊につまみを付けたような形状で、刃部は弧状を呈している。急な角度の刃部加工が背面側から行われている。41は刃部を欠損しているが、やはり片面調整のものであろう。42は小型の石匙である。刃部は両面調整である。3点とも刃部の一端を尖らせていることが特徴である。

43は横長の剥片を用いた両面調整の刃部を持つスクレイバーである。44は片面調整の刃部を持つスクレイバーである。背面側から角度の急な刃部加工を行っている。

45は石核である。重量169gと今回出土した中では最も大きなものである。図の左右から不定形剥片をはぎ取っており、側辺はかなりつぶれが著しい。図の上下は剪断面となっている。



第26図 包含層出土の石器(S=2/3)

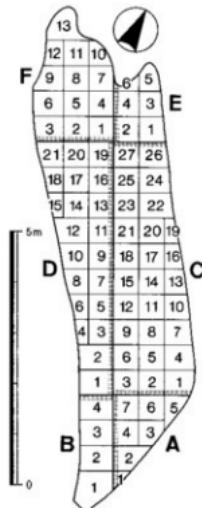
第4章 貝層の調査概要

第1節 貝層の調査方法

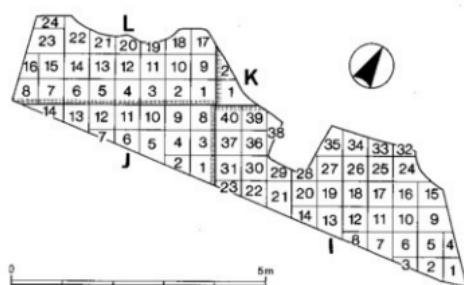
貝層は、北調査区で20m²、南調査区で17m²の範囲にわたって残存していた。はじめに発見された北調査区において、表面の宅地造成土や旧耕作土を除去したあと、貝層の上面を精査し、長さ10m、幅2m強の南北に細長い範囲で検出した。これを縦断するように土層観察用の畦を設定し、2カ所で東西方向の畦を設けた。次いで発見された南調査区では、北調査区の調査基準線を延長し、貝層を十字に区切るように土層観察用の畦を設定した。

北調査区貝層は、東側を工事により削り取られていたため、この崖面で調査前の断面観察を行った。貝層は南向きの斜面に堆積しており、土砂や礫を多く含む。一般的に混土貝層と呼ばれるもので、二次的に流動している可能性が当初から指摘されていた。さらに内部の堆積状況を調べるために東西畦に沿って細長いトレンチを設けたが、貝層を細分する指標が得られなかったため、機械的に処理を行う方法を選択した。それは、A～Fグリッドまでに区分けられた貝層をさらに平面的に50×50cmの小グリッドに区分し、標高の数値に合わせ、厚さ10cmごとに水平方向にカットしてサンプリングするもので、南調査区の貝層についてもこのような方法を探った。採取した貝層サンプルは整理箱1,100個分で、総重量は約20,000kgである。なお、サンプリング作業中に目についた遺物は、出土グリッド名を記して貝層土壌とは別にして取り上げた。

調査現場から持ち帰った貝層サンプルは、その中に含まれている微細な資料を検出するために、水洗選別を行った。その作業にあたって、当初は貝層サンプルを乾燥させてから重量と堆積を計測していたが、乾燥させることによって貝殻と土壌が分離しにくくなり、水洗作業中に貝殻を破碎してしまうことがしばしばであったため、温ったままで処理する方法に切り換えた。



第27図 北調査区貝層
(S=1/100)



第28図 南調査区貝層 (S=1/100)

貝層に含まれる土壌は粘性があり、ビニル袋の中で乾燥または半乾燥しているものを堆積を計測するために碎くには抵抗がある。そのため、次の方法で計測を行った。まず、貝層サンプルを8部分量のバケツに適量入れてハカリの上にのせ、目盛りを0にする。その中に全体が8部分になるように水を加える。そして、加えた水の堆積(水の比重を1とする)を引いた残りを貝層サンプルの堆積とした。

水洗選別作業にあたっては、1・3・5mmのフリイを重ねて水槽の中へ入れて行った。5mmのフリイの残留物としては礫の他、発掘調査中に回収できなかった土器類、石器類、骨角貝製品、貝殻、大形の魚類、獸類などの動物骨がある。3mmのフリイの残留物としては砂、貝殻の碎片、土器、石器類の小片、魚類、獸類などの動物骨、微小巻貝がある。1mmのフリイの残留物としては細砂、石器類の小片、魚類椎体などの動物骨、微小巻貝がある。また、水槽内の浮遊物としては、細かい炭化物、微小巻貝がある。以上の資料を種類ごとに拾い上げて整理作業を行うのであるが、短時間で多くのグリッドについて水洗処理し、各資料について個別の整理を行うことは不可能である。そのため今回は、貝層サンプルの報告については今までに整理作業を終了させているJグリッドとCグリッドの一部について報告することにしたい。

第2節 貝層出土の人工遺物

1. 土器(第29~34図)

貝層から出土した土器の量は、1グリッド内で整理箱1個から2個分である。これは、未整理の貝層サンプルの中に存在する若干の小片が加わるとしても少ない量である。今回の報告では、発掘調査時に取り上げたものを中心一部を掲載する。

前期II類(69~75)

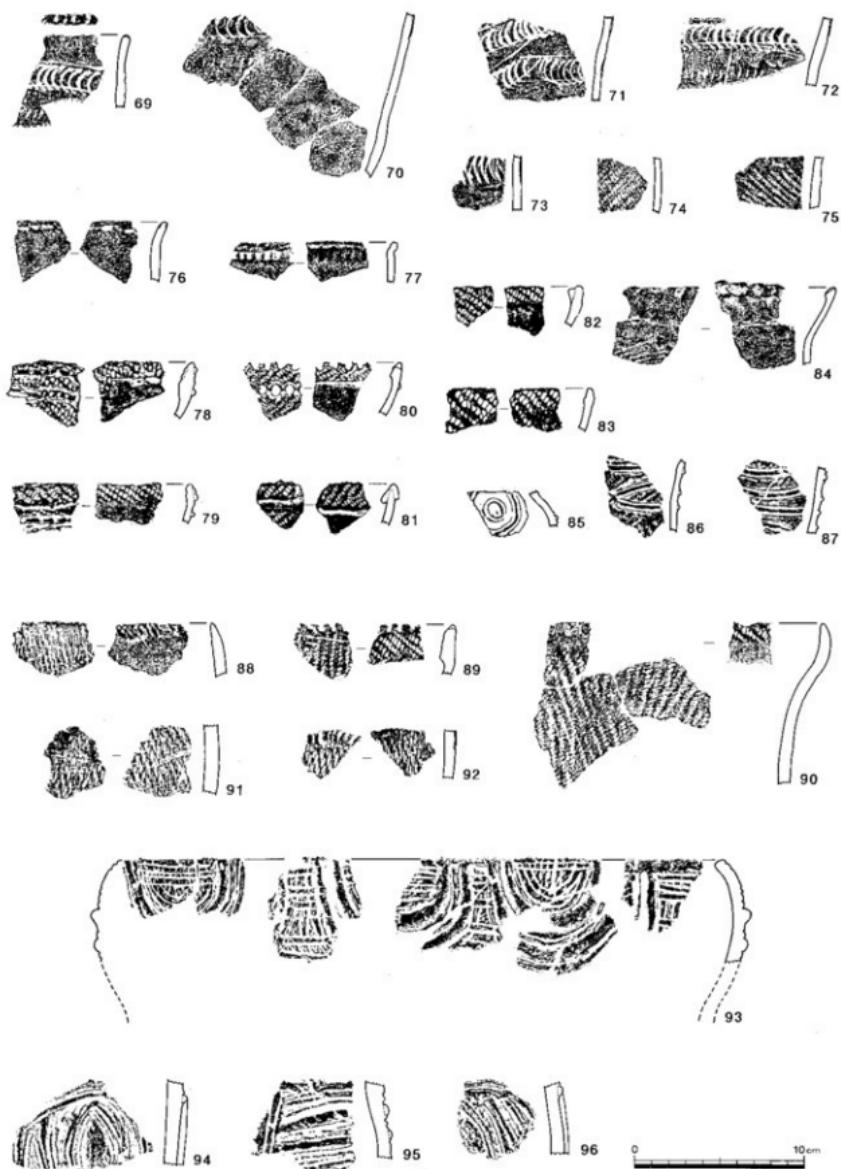
69~72は、胎土、色調が似ており、同一個体と思われる。口縁部を爪形文で飾るもので、割りつけ線としての平行沈線を伴う。69の口縁端には刻目がみられる。73には連続爪形文が施されている。74・75は繩文が施される胸部の小片と思われ、75は羽状繩文である。繩文は節が細長く密接している。

前期III類(76・77)

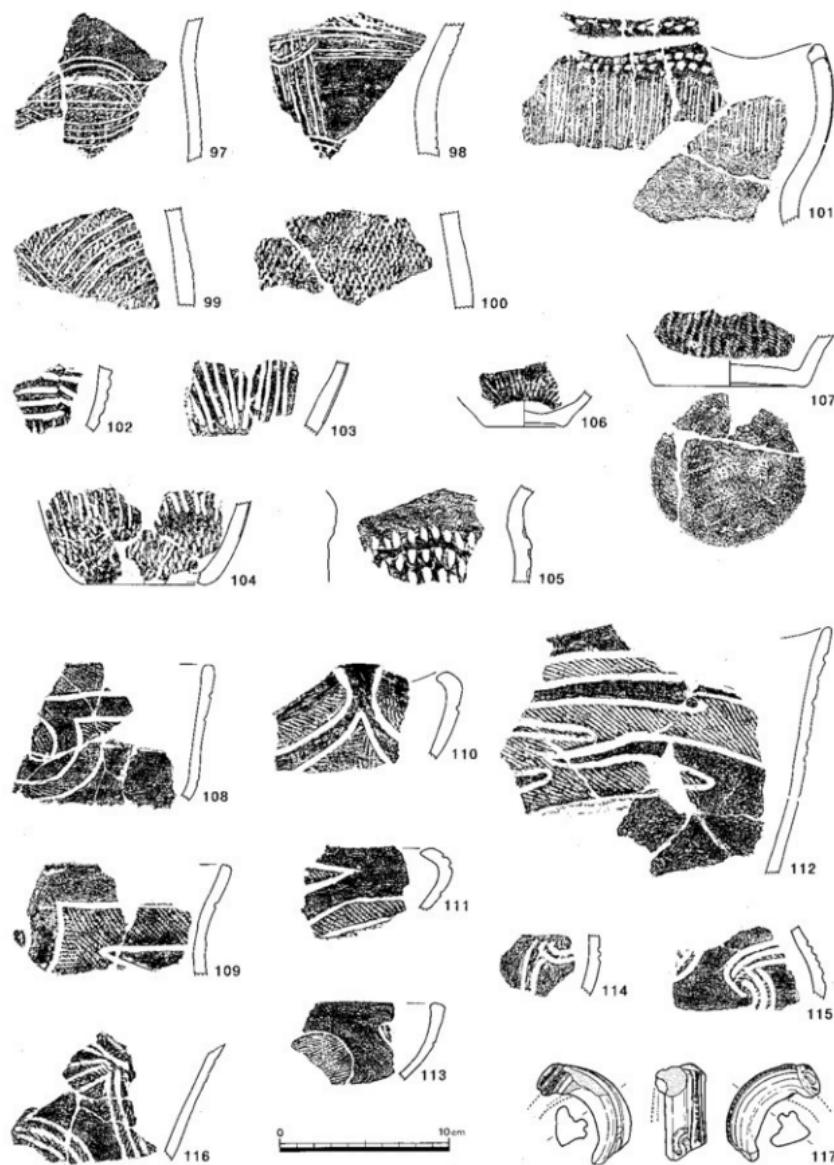
77は竹管状工具で押引き刺突文を施す。口縁内側にも刺突が加えられており、それらの影響を受けて、器表には凸凹がみられる。

前期IV類(78~87)

地文としての繩文をもち、口縁内側も肥厚させるなどして、繩文帯をつくるものである。78・79には細い貼り付け突帯をめぐらし、その上に竹管状工具による押引き文が施されている。78の口縁は細かい波状を呈するもので、口縁内側を折り返し状にしている。79は口縁外側を肥厚させている。80は口縁内側を肥厚させ、口縁端には深く刻目が付けられている。外面には突帯を貼り付け、それを分断するかのような深い幅広の刻み目がつけられている。81は口縁内外を肥厚せるものである。83は口縁部を肥厚させない。84は口縁内側を肥厚させ、押圧を加えている。口縁部付近は無



第29図 貝層出土の土器 1 (S=1/3)



第30図 貝層出土の土器 2 (S=1/3)



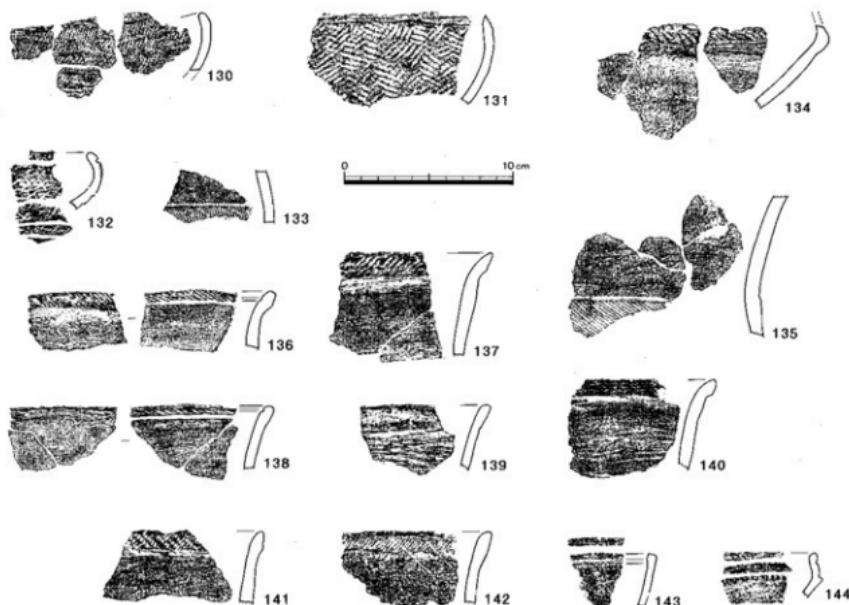
第31図 貝層出土の土器 3 (S=1/3)

文となっているが、胸部には縄文が施文されているようである。85～87は竹管状工具による押引きのある貼り付け突帯を同心円状、あるいは曲線的にめぐらしている。

中期Ⅰ類(88～92)

88は擦りのゆるい細めの原体を用いた縄文を施し、口縁外側には爪形文が密につけられている。口縁内側は縄文帯で飾られる。89は擦りが比較的強く、あまり大きくない原体を用いた縄文で、口縁外面には平行竹管文がつけられている。口縁内側には段状につくられた縄文帯をもつ。口縁端は三角形状となり、竹管状工具により刻目が加えられている。90はやや太い原体を用いた縄文を施し、口縁外面には二枚貝放射肋の圧痕がつけられている。口縁内側には縄文帯をもつ。91・92は内外に88に類する縄文が施される小片で、92には爪形文が認められる。

中期Ⅲ類(93～105)



第32図 貝層出土の土器 4 (S=1/3)

93～96は縄文地に突帯文と竹管状工具による平行沈線文で飾られるものである。93の口縁部を飾る突帯文は、逆アーチ形を複数に重ねたものを横に連続させている。97～99は平行沈線文だけで飾られるもので、直線と曲線を組み合わせたような文様構成である。100は99と同一の個体と思われる。101は口縁部に竹管状工具による縦位の沈線が施される。口縁に沿って刺突文列がめぐらされている。地文は明らかでないが、頸部のくびれ部は無文である。102～105は棒状工具により刺突文や沈線文が施されるものである。102～104は同一個体と思われるもので、横位の短かい沈線文の下に縦位の沈線が施される。底部にみられる縄文は、地文として器面全体に施文されたものであろう。105は突帯状の高まりをもち、その上下に刺突文列を配している。

106・107は底部で、107の底面には縄の圧痕がみられる。

後期 I 類(108～113)

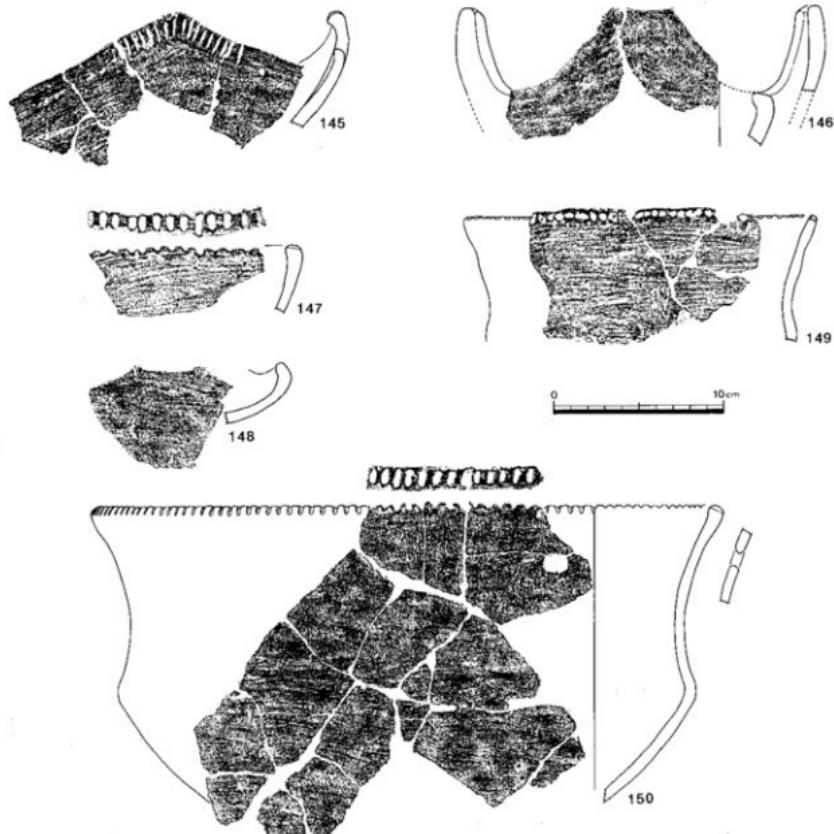
中津式特有の磨消縄文が施されるものである。波状口縁となるもの(110・112)と平縁となるものがある。

後期 II 類(114～117)

3本あるいは2本1組の沈線による磨消縄文が施されるものである。117は口縁部の橋状把手である。

後期Ⅲ類(118~127)

いわゆる縁帶文土器である。118~120は口縁部の外側を肥厚させ、文様帶としている。118は波頂部に孔を開け、そのまわりに沈線を半周させている。口縁端と肥厚部の下端にだけ縄文が施されるようである。肥厚部の直下には、波頂部を中心に向かい合わせにした弧状文を配している。119は縄文地に溝文を描いている。120の詳細は不明であるが、119・120とは異なり直線を基調とした文様意匠のようである。今回の報告では後期Ⅲ類に含めておく。121~124は口縁部の内側を肥厚させ、文様帶としている。121の外面には櫛描状の条線がみられる。125は口線上端を拡張させて広い面をつくり、文様帶としている。頸部には櫛描状の条線を縦に引き、それに対し、斜めに交差させるような図柄を描いている。胴部には頸部の文様とはつながらないように条線を垂下させている。

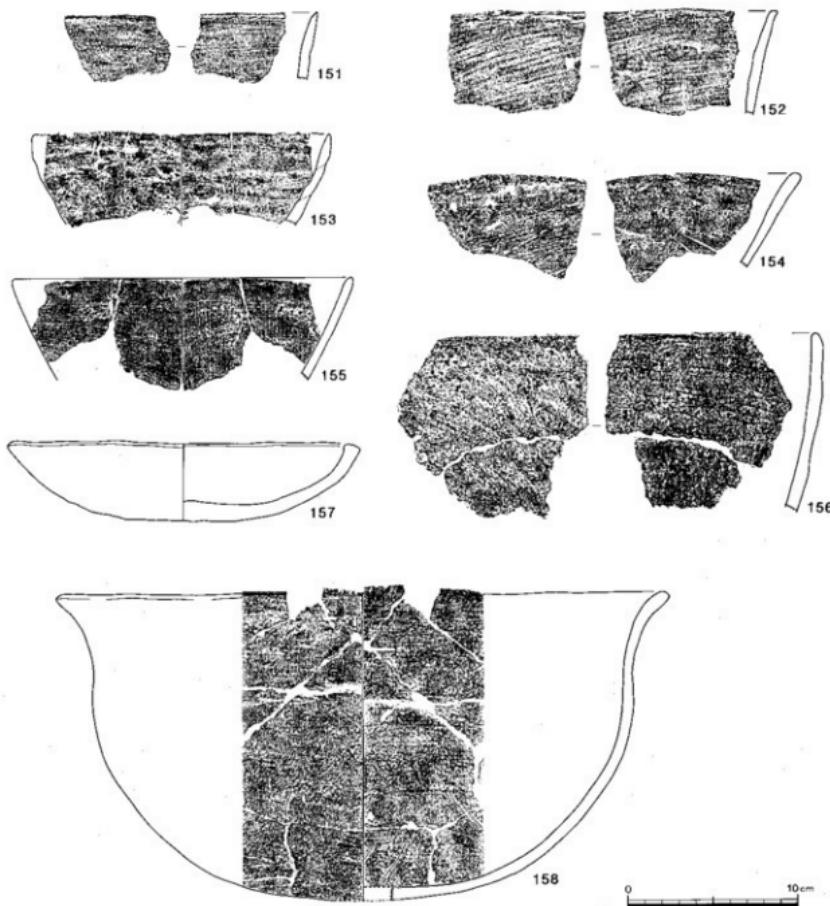


第33図 貝層出土の土器 5 (S=1/3)

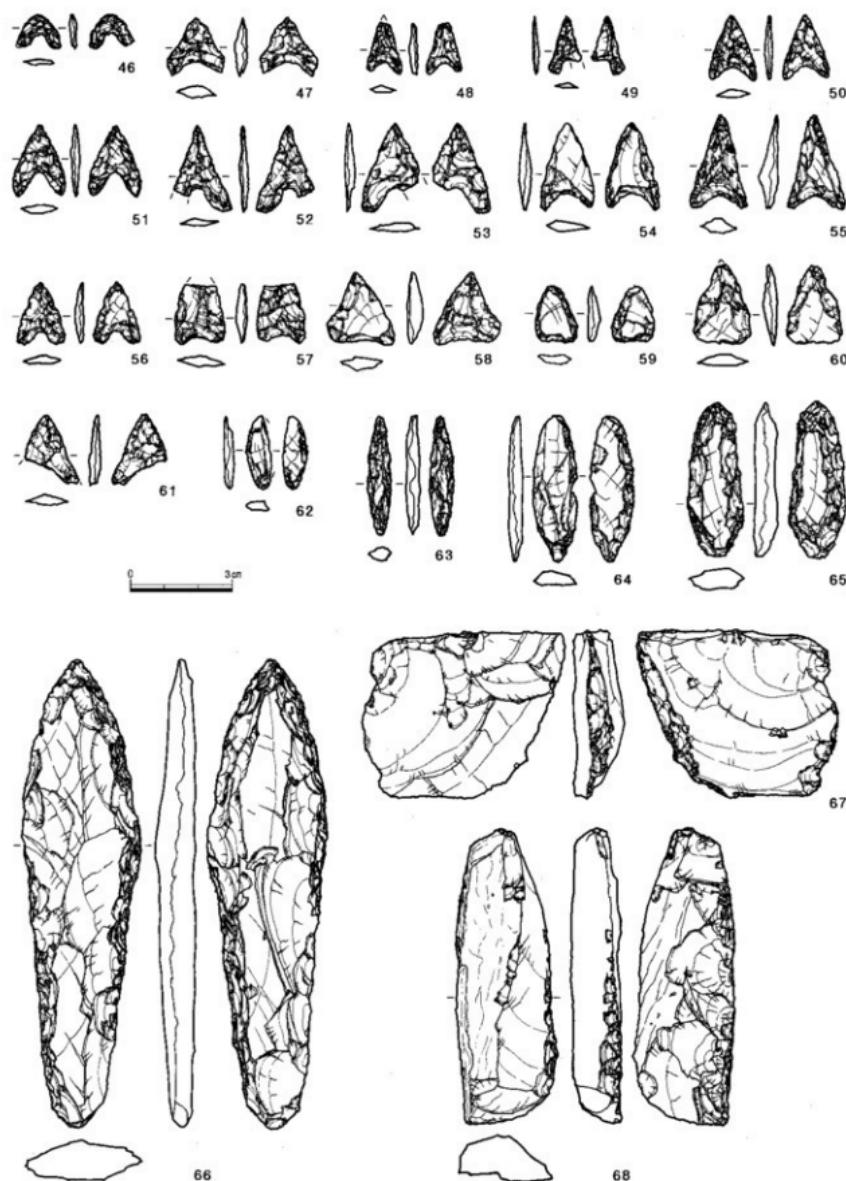
126は口縁部の橋状把手、127は垂下条線をもつ胴部の小片である。

後期IV類(128~144)

128は口縁に平行する二本の沈線の間に縄文を配した磨消縄文で飾られる。129は丸底の鉢である。口縁部と胴部に無節縄文を施し、外反する頸部を無文としている。今回の報告ではこの2点を後期IV類に含めておく。130~132は丸く膨らんだ口縁部をもつもので、131には疑似羽状縄文、132には縄文原体の側面にループ(環)がついたものを回転施文し、口縁に平行する沈線を描いている。133は列点により縄文部と無文部とを区画している。134は胴部に縄文帯をもつものであるが、器形

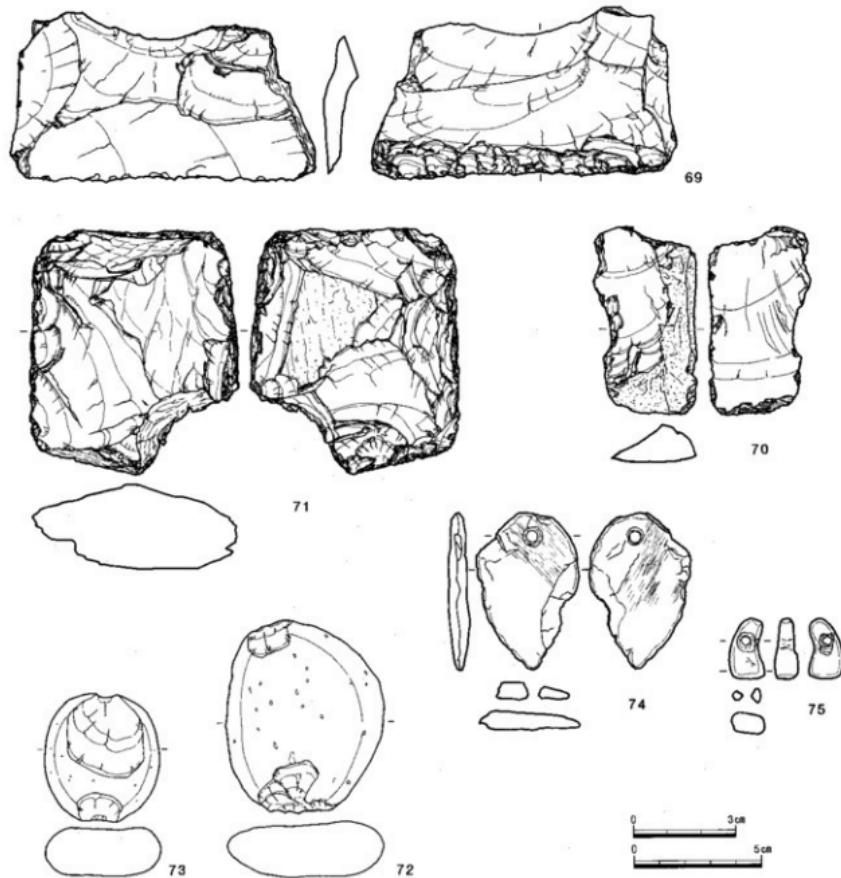


第34図 貝層出土の土器 6 (S=1/3)



第35図 貝層出土の石器 (S=2/3)

等の詳細は不明である。135は無文の頭部から縄文を施文する胴部にかけての破片である。136～142は口縁部の諸形態をまとめた。136は口縁内外に縄文帯をもち、内側には沈線がめぐる。調整については、内外面ともていねいなミガキ調整を行っている。138は口縁内側に沈線を伴う縄文帯をもつ。外側は無文とし、巻貝条痕を残している。内外ともミガキ調整を行っている。137・141・142は口縁外側だけに縄文帯をもつ。調整は巻貝条痕のちミガキ調整を行っている。139・140は口縁外側をやや肥厚させるが、縄文をもたない。調整は巻貝条痕のちナデ調整を行っている。143は口縁内側に小さな円形の刺突列をめぐらしている。口縁端には浅く細い刻目がある。144は屈曲する口縁部に2本の沈線をめぐらしている。沈線文の上下には刺突がみられる。



第36図 貝層出土の石器・石製品 (S=2/3-1/2)

後期無文土器(145～158)

後期Ⅰ類～Ⅳ類に伴う無文の土器である。145は波頂部の口縁に線刻状の刻目がある。146の波頂部は水平になっている。147・150の口縁端の刻目は棒状工具によるもので、149のそれは竹管状工具を垂直に刺突したものである。148は波状口縁となる浅鉢である。155は外面が横方向、内面が縦方向のていねいなミガキ調整が施されている。158は大型の丸底鉢で、調整は巻貝による調整のうち、内面は横方向のミガキ、外面は口縁部に横方向のミガキ、胸部にナデ調整が行われている。

2. 石器(第35・36図)

石鎌20点・石槍1点・スクレイバー3点・ノッチ1点・石核1点・石錐2点・石製装身具2点を図示した。

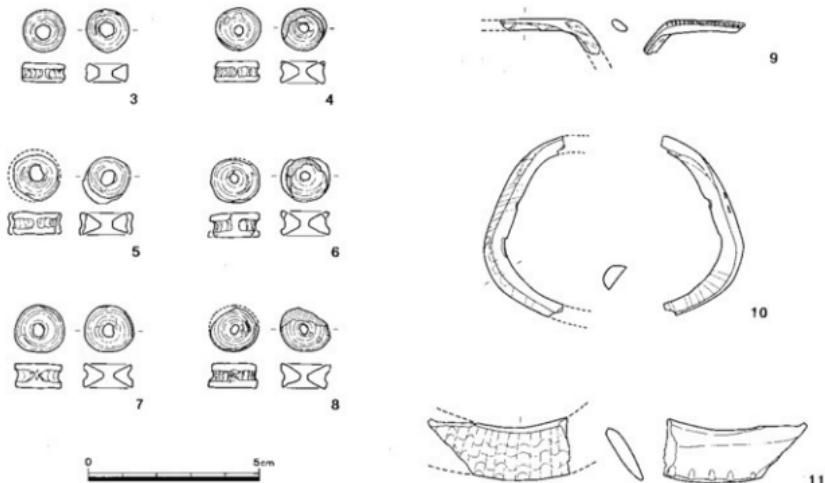
46～58は凹基鎌である。46は小型で幅が広く縄文前期に見られる形態のものである。59・60は平基鎌で、いずれも加工の浅いものである。62～65は尖基鎌である。63は紡錘形で先端と基部の区別が不明確である。65は厚手で大型のものであるが、64とともに茎部を明瞭に作り出している。

66は石槍である。茎部と尖頭部の境は比較的明瞭である。縄文前期に属すると考えられる。

67～69はスクレイバーである。いずれも片面調整の刃部を持つものであるが、67・68が急な角度の刃部加工を行っているのに対し、69は比較的緩やかな角度で刃部を加工している。

70は黒曜石製のノッチである。打点は折りとられているが、縦長剥片を利用している。背面には先行する剥離面が1枚と原礫面がある。

71は石核である。平面形は正方形で、4側辺はかなりつぶれが著しい。一部に原礫面を残し、不定



第37図 貝層出土の骨角貝製品(S=2/3)

形剥片を剥離している。

72・73は打欠石錐である。72はデイサイト製で重量が153.1g、73がアプライト製で重量64.6gである。

74・75は石製装身具である。74は滑石製の垂飾りである。孔径2.7mm、穿孔は両側から行われており、錐の痕跡は明瞭である。孔の上部には紐ずれの痕跡がある。また表面には擦痕が著しい。75は蛇紋岩製の勾玉である。孔径2.4mm、穿孔は両側から行われており、錐の痕跡は明瞭である。

3. 骨角貝製品(第37図)

骨製垂飾6点、貝輪3点がある。いずれも水洗選別により検出された。3~8は大型エイの椎骨の中央に穿孔した垂飾で、孔の直径は、3・5が4mm、7が3mm、4・6・8が2mm程度である。この他に長さ・幅とも5mm、厚さ3mm、孔径1mm程度の小型の製品が1点ある。9~11は貝輪で、材質はサルボウガイまたはアカガイと思われる。11の表面はよく研磨され美しい放射肋を表出している。

第3節 貝層出土の貝類

船倉貝塚の貝層から出土した自然遺物には次のものがある。

軟体動物門 腹足綱(巻貝)・斧足綱(二枚貝)

節足動物門 甲殻綱(フジツボ・カニ)

脊椎動物門 軟骨魚綱(サメ・エイ)・硬骨魚綱(スズキ・クロダイなど)・両生綱(カエル)

爬虫綱(カメ)・鳥綱・哺乳綱(イノシシ・シカ・タヌキ・イヌ・サルなど)

これらのうち本節では軟体動物門の貝類について扱い、節足動物門と脊椎動物門は付論2を参照されたい。

貝類の整理

Jグリッド貝層サンプルを中心に水洗選別を行った結果、次頁の貝類を検出した。主な貝種の出土数については巻末の表に記載する。

個体数の算定は、腹足綱(巻貝)の場合は殻軸数を、斧足綱(二枚貝)の場合は左右の殻頂数のうち多い方を個体数とした。稚貝の扱いについては、個別に算定する必要があるが、今回の報告分ではそれほど数が多くないので除外した。

主要貝種であるマガキ、ハマグリ、ハイガイ、アカニシについては、殻長・殻高・殻径を計測した。ハマグリの場合は計測できるものが少ないため、資料中から完形のものを選び、左右それぞれ殻長22mm~102mmまでのモデルをつくり、それに殻頂を照らし合わせて殻長を推定する方法を探った。

貝類の組成

大小各グリッドの貝類の組成は巻末のグラフに示すとおりである。Jグリッド全体における垂直方向の変化を見てみると、ほとんどのカットにおいてマガキが占める比率は80%以上で安定して出土している。細かく見れば、下位から上位にいくに従って主体貝種であるマガキの比率がわずかな

腹足綱 Class Gastropoda

原始腹足目	Order Archaeogastropoda
リュウテンザザエ科	Family Turbinidae
スガイ	<i>Lunella coronata coreensis</i>
アマオブネガイ科	Family Neritidae
アマガイ	<i>Nerita japonica</i>
中腹足目	Order Mesogastropoda
ウミニナ科	Family Potamididae
カワアイ	<i>Cerithideopsis djadjariensis</i>
ヘナタリ	<i>Cerithideopsis cingulata</i>
フトヘナタリ	<i>Cerithidea rhizophorum</i> <i>rhizophorum</i>
ウミニナ	<i>Batillaria multiformis</i>
イボウミニナ	<i>Batillaria zonalis</i>
ホソウミニナ	<i>Baillaria cumingii</i>
カワニナ	<i>Semisulcospira libertina libertina</i>
タマガイ科	Family Naticidae
ツメタガイ	<i>Glossaula didyma</i>
新腹足目	Order Neogastropoda
アクキガイ科	Family Muricidae
アカニシ	<i>Rapana venosa</i>
イボニシ	<i>Thais (Reishia) clavigera</i>
レイシガイ	<i>Reishia bronni</i>
テングニシ科	Family Melongenidae
テングニシ	<i>Hemifusus tuba</i>

斧足綱 Class Pelecypoda

フネガイ目	Order Arcoida
フネガイ科	Family Arcidae
サトウガイ	<i>Scapharca satowi</i>
ハイガイ	<i>Tegillarca granosa</i>
ハゴロモガイ	<i>Diluvicula ferruginea</i>
カリガネエガイ	<i>Barbatia virescens obtusoides</i>
ウゲイサイ目	Order Pteroida
イタボガキ科	Family Ostreidae
マガキ	<i>Crassostrea gigas</i>
マルスダレガイ目	Order Venerida
バカガイ科	Family Mactridae
シオフキガイ	<i>Mactra (Mactra) veneriformis</i>
フナガタガイ科	Family Trapeziidae
ウネナシトマヤガイ	<i>Trapezia litratum</i>
シジミ科	Family Corbiculidae
ヤマトシジミ	<i>Corbicula japonica</i>
マルスダレガイ科	Family Veneridae
アサリ	<i>Ruditapes philippinarum</i>
ハマグリ	<i>Meretrix lusoria</i>
オキシジミ	<i>Cyclina sinensis</i>
アシガイ科	Family Psammobiidae
ムラサキガイ	<i>Soletellina diplos</i>
オオノガイ目	Order Myidae
オオノガイ科	Family Myidae
オオノガイ	<i>Mya (Arenomya) arenariaoonogai</i>

貝類遺体種名表 1

腹足綱 Class Gastropoda

原始腹足目	Order Archaeogastropoda
ツタノハガイ科	Family Petellidae
属・種不明	<i>Gen. et sp. indet.</i>
中腹足目	Order Mesogastropoda
ヤマタニシ科	Family Cyclophoridae
ヤマタニン	<i>Cyclophorus herklotsi</i>
タマキビガイ科	Family Littorinidae
タマキビガイ	<i>Littorina brevicula</i>
ムカデガイ科	Family Vermetidae
オオヘビガイ	<i>Serpulorbis imbricatus</i>
新腹足目 Order	Neogastropoda
ムシロガイ科	Family Nassariidae
アラムシロガイ	<i>Reticunassa festiva</i>

柄眼目	Order Stylommatophora
キセルガイ科	Family Clausiliidae
属・種不明	<i>Gen. et sp. indet.</i>
オカクチキレガイ科	Family Subulinidae
オカチヨウジカイ	<i>Allopeas kyotoense</i>
ホソオカチヨウジガイ	<i>Allopeas pygula</i>
コハクガイ科	Family Zonitidae
コハクガイ属	<i>Zonitidae sp.</i>
ベッコウマイマイ科	Family Helicarionidae
ハリマキビ属	<i>Parakaliella sp.</i>
キビガイ	<i>Gastropontella stenogrya</i>
ヒメベッコウ属	<i>Discocolumus sp.</i>
ヒザラガイ綱	Class Polyplacophora
科不明	Family indet.

貝類遺体種名表 2

がら減少している傾向が認められるが、これは、ウミニナ類の比率の増加と連動したものと言える。ハマグリの占める比率は各カットにおいて5%前後と少ないが、変動も少ない。次に小グリッドで見ると、J1では上記の傾向とはかけ離れている。出土貝類の絶対数が少ないため偏差が大きくなっていると思われる。その他はだいたい同じような変化を示していると言えるであろう。C1グリッドでは、Jグリッドと比較して中位にハマグリの比率が多くなっている。この部分での1カット中の実個体数は150～200個で、ハマグリの貝殻が集中的に捨てられた時期が存在する。

貝類の大きさ

これまでの水洗選別で検出された貝類のうち、マガキについてはJ1～J4の資料の殻高を計測した。マガキは他の二枚貝に比べていびつな形をしており、周縁が壊れやすいので正確な計測値が得にくいが、厚さ10cm単位のレベルごとに集計したところ、どのレベルにおいても殻高24～32mmに45%～55%が集中することが確認された。グリッド内での垂直方向の変化は特に認められない。

ハマグリについては、殻長を計測した。先述のようにハマグリは直接計測できる個体数が少ないので、各サイズのモデルを設定し推定復元して行った(巻末グラフ)。ハイガイについては、殻長を直接計測した。カットごとの殻長分布を調べてみたが、個体数が少ないため傾向がつかめない状態である。そのため、Jグリッドを便宜上J1～7とJ8～14に2分した中グリッドを設定した。J1～7の上半部(標高5.3～5.5m)において、殻長26mm前後の個体が集中していることが認められた。J8～14の同レベルでは、殻長36mm前後の個体が最も多く、地点によって少し変化することが認められた。アカニシについては殻径・殻高を計測した。最小値は、殻径13mm・殻高19mm、最大値は、殻径62mm・殻高80mmで、平均値は、殻径40mm・殻高55mmである。

小 結

これまでに整理用コンテナで約180箱分の貝層サンプルを水洗選別し、多くの貝類遺体を検出することができた。貝類の分析調査は主体種を中心に種類ごとに行われるのが一般化しているため、整理作業にかなりの時間が必要である。そして、これまでに経験のないため、一連の整理作業の流れを把握するまでにも多くの時間を費やし、十分に検討のないままの報告となつた。Jグリッドを分析対象に選んだのは、前期磯の森式を含む比較的古い堆積層が保存されているとの認識があつたためである。また、貝層サンプルを分析するにあたり、まず調査区全体にわたってその内容を広く分析することが求められるが、当初の水洗選別で魚類、獸類遺体の検出が非常に少なく、取りこぼしを防ぐには多くのサンプルを水洗処理する必要を感じたため、あえて分析対象地点を広げなかつた。今後は、調査区全体を把握するために作業の効率化を考えながら資料分析を継続していくことが必要である。

第5章 まとめにかえて

貝塚の形成過程

第3章でも少しふれたが、船倉貝塚の形成過程についてまとめてみたい。

貝層に伴う最も古い土器型式である磯の森式は、南調査区I・Lグリッドで多く出土しており、船倉貝塚の形成はこの付近から始まっていると考えられる。I・Lグリッドにおける旧地形は、南に開く小さな谷状で、それを埋めるかのように食物残滓の廃棄が開始されたと推察される。

次の型式とされる彦崎ZI式は、出土量が少なく、貝層に伴うものかどうか疑問である。今回の調査では、磯の森式との層位的関係が具体化することはなかったが、編年の位置を含めて当該期の動向については注意すべき点である。

里木I式の時期は、人々の活動域が広まったと考えられる。この時期の遺物は、南・北調査区全体に分布している。また、土壙墓などの遺構の存在は、生活の拠点としてこの場所が利用された証であろう。

中期の土器は、船元I・II式は少量で、船元III式は北調査区でまとまって出土しているが、個体数は多くない。中期の活動の中心は、調査区より離れたところであった可能性がある。船元III式に続く中期の土器で明確なものは確認されていない。

後期前半の遺物は一定量があり、縁帶文期でやや増加しはじめ、次の彦崎KII式(後期IV類)の時期で最盛期を迎える。後期IV類の時期は、検出された遺構こそ少ないが、南・北調査区全体にわたる活発な活動があったと推察される。北調査区貝層北端部では、貝層の下にこの時期の包含層(貝殻は全く含まない)が検出されており、北調査区貝層の北部分は全て後期IV類以降に形成されたものと考えざるを得ない。また、北調査区貝層の上位のかなりの部分が後期以降に形成されたものと考えている。後期IV類に続く土器型式は出土しておらず、この時期をもって貝塚は終結したのであろう。

狭い調査区の中で、しかも周辺の地形が全く失われている状況では、判断し難いことが多い。船倉貝塚の形成については、残された課題が多いことを明記しておく。

遺構について

船倉貝塚で検出された、3基の土壙墓には、それぞれに埋葬人骨が残存していた。人骨に関する分析は、付論1で詳述されており、さまざまな重要な事実が明記されている。

1号土壙墓では、人骨の下に埋土層があり、大小の角礫の混じる中からイノシシ・シカ・イヌの遺体が出土している。土壙墓を形成するにあたりあらかじめ計画されたものかどうかが問題となるであろう。

2号土壙墓では、埋葬の主体である2号人骨の上に、焼けた人骨片(2b号人骨)が覆いかぶさるようにして検出された。2b号人骨については、1人分に由来するものか複数人分に由来するものか不明である。何らかの方法(火葬など)で焼かれた人骨の一部分が集められて、主たる埋葬に付随して葬られたという1つの埋葬例を示している。また、2号人骨の頭上に2つの角礫がのせられていた

ことも、骨の分析で判明した彼の生活歴と照らし合わせてみれば興味深いものがある。

土壙1について考えてみると、埋土から人骨は検出されなかったが、前期里木I式に属するものであること、1号土壙墓の下層と同様に大小の角礫が検出されていることと、その形状から土壙墓である可能性は否定できない。

土壙墓以外の人骨の出土については、北調査区西崖面から、頭蓋骨が数片出土しており、3基の土壙墓以外にも埋葬遺構が存在した可能性が高い。

土壙墓出土の石器

1・2号土壙墓からは里木I式土器とともに石礫を含む石器が出土している。この地域の縄文の石器でその形態・組成が比較的はっきりしているのは、磯の森式土器に伴うものである。里木I式の二型式前と比較的近い時期に位置するので、比較してみることとする。

まず、磯の森式期の石器であるが、従来から言われているように特徴的な形態のものが含まれている。石匙は「整った三角形をした石匙」と梢円をつぶしてへこんだ部分につまみを受けたような石匙が特徴的である。石礫は基部の両側に抉りの入った「アメリカ式礫」を含む尖基礫、先端が宝珠の頂部状に突出した幅の広い形態の礫などとともに脚部の特徴的な礫と平基礫がある。

一方、1・2号土壙墓の石器をみると、石匙は左右対称の横型の石匙という点では磯の森式期の石匙と共通しているが、梢円の長辺中央につまみをつけたような単純な形態である。石礫のうち、尖基礫はやや幅広で加工も粗雑な感がある。凹基礫は脚部がすんなりと尖るものが多い。磯の森式期の石礫と比較してやや簡素化あるいは粗雑化した作りのように考えられる。

一般に縄文中期の石礫は前期のものと比較して粗雑化していると言われるが⁽²⁾、1・2号土壙墓の石礫は前期の石礫から粗雑化していく一過程を示すものかもしれない。今後の資料の増加を待って再度検討したい。

これまで瀬戸内の貝塚地帯では多数の石器が出土しているにも関わらず、時期のわかる一括資料は少ないのが現状である。今回の資料は必ずしも良好なものではないが、比較的時期を限定できるため、この地域の石器の変遷を考える上で多少の参考にはなるのではないだろうか。

貝層サンプルの整理について

今回、主な分析対象としたJグリッド貝層の貝類種別組成は、8割以上がマガキで占められ、水平・垂直的変化が乏しいというデータが得られた。魚類・獣類遺体の出土量は少ないが、当時食用にされた種類を特定することが可能となった。今後は、別地点でのデータを作成し、比較しながら



磯の森式期の石器⁽¹⁾

1・2号土壙墓出土石器

進めていくことが重要となる。

船倉貝塚の発掘調査がきっかけとなり、今回はじめて貝層サンプルを扱うこととなった。まず手始めに、JグリッドとCグリッドの一部を水洗選別し、報告する次第であるが、十分な問題意識や目的意識を持たないまま進めてきたことを反省している。現場でのサンプリング方法が次善の策であるため、貝塚から情報を得て生活を復元するのには制約が大きいであろうが、より有効なデータを提示していきたい。

註(1) 倉敷市内の磯の森貝塚と一尺谷上池遺跡の出土石器

(2) 鈴木道之助『図録 石器入門辞典 縄文』柏書房 1991年

付論1

船倉貝塚出土の縄文時代の人骨について

兵庫医科大学 解剖学第二教室

和田 洋

はじめに

船倉貝塚は平成3(1991)年7月、羽島・四十瀬線の都市計画道路建設工事の際に、発見された。考古学調査により9月には多量の縄文時代の考古学遺物と共に、3例の埋葬人骨と多分1人骨であろうが、火葬骨または焼骨が出土した。以下、1号人骨、2号人骨、2b号人骨、3号人骨とそれぞれに命名されたが、1号人骨は1号土壙墓より、2号人骨と2b号人骨は2号土壙墓より、3号人骨は3号土壙墓より出土した。

1号人骨

出自 人骨遺物は平成3年9月に、船倉縄文貝塚の1号土壙墓より出土した。1号土壙墓は不整円形で、埋葬位は背中を下にした、仰臥である。股関節は伸展しているが、膝関節と肘関節の状態は不明である。頸部は強い前屈位である(写真1a)。船倉貝塚調査区では旧耕作土層、搅乱土層、貝殻土層、混貝土層、褐色土層、基盤土層の6層が識別されているが、1号土壙墓は貝殻土層より掘り込まれ、また里木I式土器を伴うので、縄文時代前期の終わり頃(約3000B.C.)と推定されている。

残存状態 人骨遺物では四肢の前腕と下腿より先端の骨が紛失しているが、体幹骨は良好な状態で残る。脳頭蓋は前頭骨と頂頭骨の大部分を破損するので、後頭部のみを復元した。顔面頭蓋では上顎と下顎骨のみが残る。上顎には全16歯が残る。下顎には左右共に6歯づつが残る。下顎左側では第1小白歯は生前に離脱するが、第3大白歯の萌出はない。下顎右側では犬歯と側切歯は生前に離脱するが、第3大白歯は萌出する。椎骨では7個の全頸椎と第5腰椎が残る。仙骨では第1仙椎が残る。上肢骨格では右上腕骨が、また下肢骨格では寛骨と大腿骨が残る。右上腕骨では中間の約2/3が、左寛骨では腸骨の大部分と恥骨の一部が、右寛骨では腸骨、坐骨、恥骨の大部分が、大腿骨では近位側の約2/3が左右共に残る(写真1bと1c)。人骨遺物は兵庫医科大学の骨格標本箱H80に保管されている。

年齢 人骨遺物には良好な上顎と下顎歯が、また寛骨と大腿骨が残る。下顎左側には第3大白歯の萌出が認められないが、その他の第3大白歯は完全に萌出している。大腿骨では近位成長骨端線が完全に癒合する。寛骨腸骨稜には成長骨端線の癒合痕が残る。寛骨恥骨結合面には弱い平行隆線が残る。腹側傾斜面は既に完成しているが、骨星は上方の1/3で不連続である。同様に、背側骨縁堤は一部に形成されているが、腹側のそれはない。寛骨耳状面では縁堤が鋭く、また面もピロード状である。

上顎には全16歯が残る。大臼歯は左第1では近位にけずりを残すが、その他の咬合面では象牙質を露出し、プロテウルの5度の強い咬耗である。右側も全咬合面の象牙質を露出し、プロテウルの5+度の強い咬耗である。大臼歯は左第2では舌側半の象牙質を露出し、プロテウルの4度の咬耗である。右側

は舌側半と頬側遠位に象牙質を露出し、アーチカウルの4+度の咬耗である。第3大臼歯は左右共に小白歯様の歯であるが、全咬合面の象牙質を露出している。左第3では遠位面が蝕まれている。咬合面は前後歯共にほぼ水平であるが、前歯の咬耗は特に強い。

下顎には左右共に6歯づつが残る。下顎左側では第1小白歯が生前に離脱するが、第3大臼歯の萌出はない。右側では犬歯と側切歯が生前に離脱するが、第3大臼歯は萌出する。右中切歯、左中切歯、左側切歯、左犬歯は共に左遠位に移動し、右中切歯は正中面より左側に位置する。第1小白歯の生前離脱はかなり若い時期に生じたものと思われる。大臼歯は左第1では近位半に、また遠位側の舌側、中間、頬側に2-3mm大の象牙質を露出し、アーチカウルの5度の強い咬耗である。右側も全咬合面の象牙質を露出し、アーチカウルの5+度の強い咬耗である。第2大臼歯は左右共に頬側半を虫歯により侵食される。第3大臼歯は小白歯様の歯であるが、近位半を蝕まれる。咬合面は前後歯共にほぼ水平であるが、前歯の咬耗は歯頸までに及ぶ。歯並びは下顎では良好と言えないが、咬合は鉗子状である。人骨遺物は30歳代の後半の壮年期に相当するであろう。

性別 左寛骨では腸骨の大部分と恥骨の一部が、右寛骨では腸骨、坐骨、恥骨の大部分が、仙骨では第1仙椎が残る。骨盤は辛うじて復元された。骨盤は巾広く、腸骨翼はV字状に拡がる傾向にある。骨盤上口は巾広の楕円形である。寛骨では腸骨窩が広く低い。腸骨稜は不明瞭なS字を描く。腸骨結節は厚いが、腸骨結節稜は余り目立たない。大坐骨切痕はV字状に開き、耳状面の前線の上方の半分と大坐骨切痕の下方の半分を結ぶ弧描線は二重の弧を描く。前耳状面溝は左右共に巾広く深く、底は小陥凹の集積により形成される。大腿骨では近位側の約2/3が残るが、全体的に頑強である。

頭蓋は前頭骨と頭頂骨の大部分を破損するので、後頭部のみを復元した。眉弓と眉間は僅かな膨隆である。眼窓上縁は丸く薄い。頭頂結節の膨隆は弱い。項平面の膨隆は強い。外後頭隆起は結節状である。上項線は内側半では稜状である。下項線は左側の半分だけであるが、ほぼ全長にわたり溝状である。最上項線は存在しないが、外後頭隆起の上方には帽状腱膜の起始痕と思われる粗な陥凹が存在する。側頭骨では乳突上稜が明瞭であるが、乳突上溝は不明瞭である。乳様突起は外耳孔より先端の長さでは約27-29mmと、非常に長いが、細い。人骨遺物は女性であろう。

生前身長 上肢骨格では上腕骨が近位と遠位端を、また下肢骨格でも大腿骨が遠位端を破損するので、正確な身長は推定できない。身長推定は女性ではあるが、右上腕と左大腿骨体の長さと2号人骨男性のそれらとの比較法に基づいた。

2号人骨は左上腕骨では最大長(284)が、また左大腿骨では最大長(423)が計測されている。1号人骨の右上腕骨は大結節稜より鈎突窓までの長さでは2号人骨の左上腕骨のそれにはほぼ等しい。左大腿骨は骨頭より粗線の遠位端までの長さでは2号人骨のそれよりも約20mm程短い。推定最大長を女性のためのジイの回帰式に代入し得られる身長は右上腕骨では2号人骨のそれとほぼ等しいので、約149cmで、また左大腿骨では2号人骨のそれよりも約20mm程短いので、約152cmである。推定最大長を女性のためのピアソンの回帰式に代入し得られる身長は右上腕骨では2号人骨のそれとほぼ等しいので、約150cmで、また左大腿骨では2号人骨のそれよりも約20mm程短いので、約151cmである。推定

身長はフジイ式では約149-152cm、またピアソン式では約150-151cmである。生前身長は多分150cm前後であろう。

脳頭蓋 脳頭蓋は前頭骨と頭頂骨の大部分を破損するので、後頭部のみを復元した。上面観では後半分のみであるが、後頭鱗は尖る傾向にある。頭頂結節の膨隆も弱い。上面観輪郭はゼルジの五角形に似る。前頭鱗には前頭縫合の遺残も確認された。側面観でも後半分のみであるが、後頭鱗は尖る傾向にある。側頭窩の膨隆は強いが、頭頂結節は弱い。頭頂骨の後方への落ち込みは強いが、後頭鱗の前方への潜り込みは弱い。側面観輪郭は菱形に似る。

後面観では両耳幅(117)と下頸角幅(91)が計測された。両耳幅は西日本縄文女性のそれに比べ、-0.5SD小、また下頸角幅も-1.1SD小である。頭蓋底は西日本縄文女性のそれよりも狭い。側頭窩は膨隆する。頭頂結節の膨隆は弱い。頭蓋冠では正中部がほぼ平坦である。後面観輪郭はハーラーの家屋状に分類される。矢状縫合には縫合骨がラグ部に、また人字縫合にも縫合骨が左右のアストリウス部に形成される。後頭鱗には横後頭縫合が残り、また後頭平面はイカ骨により3分割されている。

四肢骨格 上肢では右上腕骨が、また下肢では大腿骨が左右共に残る。右上腕骨では中間の約2/3が、また大腿骨では近位側の約2/3が左右共に残る(写真1bと1c)。

上腕骨 右上腕骨は遠位では最小周(56)が計測された。外弯性は強い。近位の後屈性は不明であるが、遠位の前屈性は強い。三角筋粗面位では断面輪郭がほぼ三角形と特異である。最大径と最小径は同じ20mmで、それらは三角筋粗面の前稜と後外側稜の間に、また三角筋粗面と後内側線の間にある。三角筋粗面の隆起は強い。粗面では前凸稜、1条の中間稜、後外側凸稜の3本の縦稜が走り、粗面は巾広い極状である。後外側凸稜は上腕三頭筋外側頭の起始であるが、帯状の粗面である。前内側面では鳥口腕筋の停止痕が明瞭である。後外側面では後外側縁と橈骨神経溝が明瞭である。後面では上腕三頭筋内側頭の起始稜がほぼ中間稜を形成している。遠位では最小周が西日本縄文女性のそれに比べ、0.5SD大である。遠位は西日本縄文女性のそれよりも太い。断面輪郭は前後に高い三角形である。後面では後内側縁が鋭いが、後外側縁は丸い。上腕三頭筋内側頭の起始は強い凸面である。

大腿骨 大腿骨は骨頭では左側の周径(130)、垂直径(41)、横径(41)、断面示数(100.0)が、近位では左側の矢状径(21)、横径(32)、断面示数(65.63)と右側の矢状径(22)、横径(32)、断面示数(68.75)が、遠位では左側の周径(84)、矢状径(28)、横径(25)、断面示数(112.0)と右側の周径(87)、矢状径(29)、横径(26)、断面示数(111.54)が計測された。大腿骨はほぼ真っ直ぐに伸びるが、内捻軸性と前弯性は強い。骨頭周は西日本縄文女性のそれに比べ、0.7SD大、垂直径は0.7SD大、横径は1.0SD大、また断面示数も0.8SD大である。骨頭は西日本縄文女性のそれよりも大きいが、断面輪郭は円形である。骨頭は短いが、屈曲は普通である。近位側の1/3では矢状径が左側では-0.6SD小、また右側でも-0.1SD小である。横径は左側では2.1SD大、また右側でも3.8SD大である。断面示数は左側では-1.8SD小、また右側でも-1.6SD小である。断面輪郭は左右共に前後に扁平な橢円形で、西日本縄文女性のそれよりも過扁平型(X-75)である。外側面の張り出しあは左右共に非常に強く、また前面はほぼ平坦である。後面では大殿筋粗面がアンカリング溝で、また粗線外側唇も強い

稜である。粗線中間面は巾広い樋状の凹面である。遠位では周径が左側では1.6SD大、また右側でも2.6SD大、矢状径が左側では1.9SD大、また右側でも2.3SD大、横径が左側では0.4SD大、また右側でも1.4SD大、そして断面示数も左側では1.4SD大、また右側でも1.0SD大である。断面輪郭は前後に長い不整形の栗の実状で、西日本縄文女性のそれよりも厚型(100-X)である。後内側面はほぼ平坦であるが、後外側面は強い凹である。前面は左側では平坦であるが、右側では凸面である。粗線では内側唇と外側唇が共に強い稜で、また中間面も溝状である。

2号人骨

出自 人骨遺物は平成3年9月に、船倉縄文貝塚の2号土壙墓より出土した。2号土壙墓は不整方形で、埋葬位は体幹の左側を下にした、側臥屈位である。股関節と膝関節は強い屈曲であるが、右肘関節の屈曲は弱い。頸部は強い前屈である(写真2a)。船倉貝塚調査区では旧耕作土層、擾乱土層、貝殻土層、混貝土層、褐色土層、基盤土層の6層が識別されているが、2号土壙墓は混貝土層より掘り込まれ、また里木式土器を伴うので、縄文時代前期の終わり頃(約3000B.C.)よりも以前と推定されている。

残存状態 人骨遺物では良好な頭蓋と四肢骨が残る。脳頭蓋は頭蓋底の左側頭骨と後頭骨の一部を、また顔面頭蓋は右上顎骨を破損するが、ほぼ復元されている(写真2bと2c)。右上顎骨では上顎体が、また下顎骨では左頭が破損する。上顎と下顎には全32歯が残る。上肢骨格では上腕骨、橈骨、尺骨が、また下肢骨格でも寛骨、大腿骨、脛骨、腓骨が残る(写真2d-2i)。上腕骨は左右共に近位端の一部を破損するが、残存状態は良好である。左橈骨は橈骨頭の一部を破損するが、残存状態は良好である。右橈骨では橈骨体の中間位の約2/3が残る。左尺骨はほぼ完全に残る。右尺骨は肘頭の一部を破損するが、残存状態は良好である。寛骨では左右共に腸骨、坐骨、恥骨の一部が残る。大腿骨、脛骨と腓骨は左右共に近位と遠位端の一部を破損するが、残存状態は良好である。人骨遺物は兵庫医科大学の骨格標本箱H83に保管されている。

年齢 人骨遺物には良好な頭蓋と四肢骨が含まれるが、頭蓋では蝶後頭軟骨結合が完全に化骨し、また四肢骨でも近位と遠位の成長骨端線が完全に癒合する。上顎と下顎歯では第3大臼歯が既に崩出している。寛骨には耳状面の一部が残るが、耳状面縁は鋭い。頭蓋縫合では矢状縫合のペリキン部がほぼ癒着するが、ブレグマ、ペルテクス、ラム部は未だ癒着していない。冠状縫合では癒着が左右のアテリキンの一部に見られるが、ブレグマ部と複雑部は未癒着である。人字縫合はラム、中、アステリキン部共に未癒着で、また蝶前頭と蝶頭頂縫合も未癒着である。

上顎には全16歯が残る。大臼歯は左第1では頬側の近位と遠位に、また舌側の遠位に針棒大の象牙質を露出し、アロカリルの3度の咬耗である。右側は頬側の遠位に針先大の象牙質を露出し、アロカリルの2度の軽い咬耗である。大臼歯は左第2では頬側の近位に2-3mm大の象牙質を、また頬側の遠位に針棒大の象牙質を露出し、アロカリルの3度の咬耗である。右側は頬側と舌側の遠位に2-3mm大の象牙質を露出し、アロカリルの3度の咬耗である。大臼歯は左第3では咬合面のけん質を軽く咬耗し、また右側も咬合面のけん質を均等に咬耗し、アロカリルの2度である。第3大臼歯では左側の咬耗が右側のそれよりも強い。切歯では咬合面が下唇側より上舌側に僅かに傾斜するが、左犬歯では逆

になる。

下顎にも全16歯が残る。大臼歯は左第1では頬側の遠位、舌側の近位と遠位に2-3mm大の象牙質を露出し、アロカウルの3+度の強い咬耗であるが、右側は頬側の近位と舌側の遠位に針先大の象牙質を露出し、アロカウルの2-度の咬耗である。第2大臼歯は左右共に頬側の近位、舌側の近位と遠位に2-3mm大の象牙質を露出し、アロカウルの3+度の咬耗である。大臼歯は左第3では未だ咬耗を始めていないが、右側は舌側の近位より遠位に2-3mm巾の帯状の象牙質を、また頬側の近位に針棒大の象牙質を露出し、アロカウルの3+度の強い咬耗である。犬歯では咬合面が僅かであるが、下唇側より上舌側に傾斜する。歯並びは良好で、また咬合は僅かに鉄子状である。人骨遺物は30歳代の前半の壮年期に相当するであろう。

性別 頭蓋は頭蓋底の一部と右上顎骨を破損するが、ほぼ復元されている(写真2bと2c)。頭蓋は頑健である。前頭鱗の立ち上がりは強いが、女性に見られるほどの立ち上がりではない。前頭結節は明瞭である。眉弓と眉間の隆起は強い。眼窩上縁は薄く見えるが、厚く丸い。頭頂結節の膨隆は強い。項平面は狭いが、強い凹凸である。外後頭隆起は上項線と外後頭稜と共に強い結節稜状である。上項線は乳様突起まで明瞭であるが、内側半は特に強い。下項線もほぼ全長にわたり明瞭である。最上項線は存在しないが、外後頭隆起の上方には帽状腱膜の起始痕と思われる粗な陥凹が存在する。側頭骨では乳突上稜が鋭く強い稜結節状で、また乳突上溝も明瞭である。乳様突起は外耳孔より先端の長さでは約30mmと、非常に長く太い。

寛骨では腸骨、坐骨、恥骨の一部が残るので、寛骨白周辺が復元された。腸骨稜は明瞭なS字を描き、また腸骨結節と腸骨結節稜も共に強い。腸骨窩は深い。大坐骨切痕はV字状に開くが、耳状面の上前縁と大坐骨切痕の下後縁を結ぶアーコンボーズは一重の弧を描く。前耳状面溝は痕跡的な形成である。人骨遺物は男性であろう。

病歴 右上腕骨では近位側1/3が内後方に屈曲し、また右尺骨でも尺骨頭が変形する(写真2dと2g)。上腕骨では骨肥厚が近位側1/3の前内側面と外側縁に、また前後軸X線像でも前内側面に海綿質化が認められる(写真2e)。尺骨頭は正常であれば下方を向くが、圧平され、また外下方に向く。右上腕骨と尺骨は生前に同時骨折し、その後、骨折は上腕骨では内後屈状態で、また尺骨頭では圧平、外屈状態で癒合・治癒したものと思われる。2号人骨は生前に転倒し、右手首の内側で接地し、右尺骨頭と上腕骨の近位側1/3を同時に骨折したものと思われる。上腕骨は反対側の左側でも強い外弯性を示すが、上腕骨の外弯性の強さも巻き添え骨折に関係したかも知れない。

生前身長 身長は左上腕骨、左桡骨、左尺骨、左右大腿骨、左脛骨、左右腓骨の最大長に、また左脛骨の全長に基づいた。前腕示数は桡骨最大長の上腕骨自然長に対する比で、また下腿示数は脛骨自然長の大腿骨自然長に対する比である。左上腕骨では最大長(284)と自然長(282)が、左桡骨では最大長(241)が、左尺骨では最大長(255)が計測された。前腕示数は左上肢では85.46%である。左大腿骨では最大長(423)と自然長(415)が、右大腿骨では最大長(422)と自然長(416)が、左脛骨では最大長(358)と自然長(355)が、左腓骨では最大長(347)が、右腓骨では最大長(348)が計測された。下腿示数は左下肢では85.54%である。前腕示数は左側では長型(80-X)に、また下腿示数も

長型(80-X)に分類される。2号人骨は、上肢では前腕骨が上腕骨よりも長く、また下肢では下腿骨が大腿骨よりも長いタイプに属する。

左上腕骨では最大長が西日本縄文男性のそれに比べ、0.2SD大、また自然長も0.4SD大である。左桡骨では最大長が1.0SD大、また左尺骨でも1.0SD大である。前腕骨は西日本縄文男性のそれよりも長い。左大腿骨では最大長が0.6SD大、また自然長も0.3SD大である。右大腿骨では最大長が0.4SD大、また自然長も0.2SD大である。左脛骨では最大長が1.2SD大、また自然長も1.1SD大である。左腓骨では最大長が1.2SD大、また右腓骨でも0.6SD大である。下腿骨も西日本縄文男性のそれよりも長い。2号人骨は西日本縄文男性と比較しても、上肢では前腕骨が上腕骨よりも長く、また下肢でも下腿骨が大腿骨よりも長いタイプに属する。

最大長を男性のためのジイの回帰式に代入し得られる身長は左上腕骨では153cm、左桡骨では163cm、左尺骨では162cm、大腿骨では左右共に159cm、左脛骨では162cm、また腓骨では左右共に161cmである。最大長を男性のためのピアソンの回帰式に代入し得られる身長は左上腕骨では153cm、左桡骨では165cm、大腿骨では左右共に161cm、また左脛骨では164cmである。最大長を男性のためのトロッターケーライサーの回帰式に代入し得られる身長は左上腕骨では159cm、左桡骨では167cm、左尺骨では166cm、大腿骨では左右共に163cm、また腓骨では左右共に164cmである。自然長を男性のためのトロッターケーライサーの回帰式に代入し得られる身長は左脛骨では166cmである。2号人骨遺物は高い前腕と下腿示数を、また西日本縄文男性に比べても高い前腕と下腿示数をもつて、身長は上腕骨と大腿骨長に基づくと、ジイ式では153/159cm、ピアソン式では153/161cm、またトロッターケーライサー式では159/163cmである。生前身長は多分150cm台の後半であろう。

脳頭蓋 脳頭蓋は頭蓋底の一部を破損するが、ほぼ復元された(写真2bと2c)。上面観では最大長(185)、前頭弧(128)、頭頂弧(131)、前頭幅(106)、最大幅(146)、冠状弧(338)、水平周(531)、長幅示数(78.92)が計測された。最大長は西日本縄文男性のそれに比べ、-0.0SD小、最大幅は0.2SD大、また水平弧も0.1SD大である。長幅示数は0.1SD大で、カーリンの中型(75-80)に分類される。上面観輪郭は西日本縄文男性のそれに近い。前頭弧は1.0SD大であるが、頭頂弧は-0.1SD小である。頭頂骨は西日本縄文男性のそれに近いが、前頭鱗は長い。前頭幅は1.7SD大、また冠状弧も2.1SD大である。前頭鱗は西日本縄文男性のそれよりも巾広く、また外側への膨らみも強いが、後眼窓狭窄は弱い。前頭鱗は緩かな曲線の張り出しだあるが、後頭鱗は尖る傾向にある。頭頂結節の膨隆は強い。上面観輪郭はゼンジの五角形に分類される。

側面観では最大長(185)、グラベラ・ラムダ長(179)、前頭弧(128)、前頭弦(112)、頭頂弧(131)、頭頂弦(117)、底長(101)、バジン・フレグマ高(135)、長高示数(72.97)が計測された。最大長は西日本縄文男性のそれに比べ、-0.0SD小、グラベラ・ラムダ長は-0.3SD小、また底長も-0.4SD小であるが、バジン・フレグマ高は0.0SD大である。長高示数も0.2SD大で、中型(70-75)に分類される。側面観輪郭も西日本縄文男性のそれに近い。頭頂弧は-0.1SD小であるが、頭頂弦は0.0SD大である。前頭弧は1.0SD大で、また前頭弦も0.7SD大である。頭頂骨は長さ、弯曲共に西日本縄文男性のそれに近いが、前頭鱗は長く、弯曲も強い。側頭鱗は平坦であるが、側頭窓は僅かに膨隆する。頭頂結

筋の膨隆は強い。頭頂骨の後方への落ち込みは強く、また後頭鱗の前方への潜り込みも強い。側面観輪郭は梢円形に近い。左アステリンには 15×10 mm大の縫合骨が、また右アステリンには横後頭縫合の遺残も存在する。

後面観では最大幅(146)、両耳幅(119)、バシオン・フレクマ高(135)、冠状弧(338)、幅高示数(92.47)が計測された。最大幅は西日本縄文男性のそれに比べ、0.2SD大、またバシオン・フレクマ高も0.0SD大である。幅高示数は-0.0SD小であるが、中型(92.98)に分類される。後面観輪郭も西日本縄文男性のそれに近い。頭蓋底幅は-1.3SD小であるが、冠状弧は2.1SD大である。側頭窩は僅かに膨隆する。頭頂結節の膨隆は強い、頭蓋冠は弱いが、切り妻状である。後面観輪郭はハーネーの砲弾状に分類される。外後頭隆起は結節稜状で、僅かに下垂する。右アステリンには横後頭縫合の遺残が存在する。

顔面頭蓋 顔面頭蓋は右上顎骨を破損するが、ほぼ復元された(写真2b)。正面観では顎高(119)、上顎高(67)、前頭幅(106)、上顎幅(108)、頬骨弓幅(135)、下顎角幅(96)、コルマン全顔面示数(86.67)、コルマン上顔面示数(49.63)が計測された。顎高は西日本縄文男性のそれに比べ、0.6SD大であるが、上顎高は-0.5SD小である。全顔面は西日本縄文男性のそれよりも高いが、上顎面は低い。前頭幅は1.7SD大であるが、上顎幅は-0.2SD小、頬骨弓幅は-1.5SD小、また下顎角幅も-1.6SD小である。コルマン全顔面示数は1.4SD大であるが、中型(85-90)に分類される。上顎面示数は0.7SD大で、広型(45-50)に分類される。顎面は西日本縄文男性のそれよりも全体的に細面である。前頭鱗は巾広く、また後眼窓狭窄も弱い。頬骨弓の張り出しが弱い。頬骨弓より上顎骨への輪郭は深い『くの字』状の切痕で、犬歯窓は浅い。下顎角は狭いが、外翻は強い。歯並びは良好で、また咬合は僅かに鉄子状である。正面観輪郭は長方形に近い。

正面観では上顎高(67)、鼻高(50)、眼窓高(31)、上顎幅(108)、中顎幅(95)、鼻根幅(22)、鼻根弧(27)、鼻幅(31)、眼窓幅(43)、ケイルヒヨウ上顔面示数(70.53)、鼻根隆起示数(122.73)、鼻示数(62.0)、眼窓示数(72.09)が計測された。上顎高は西日本縄文男性のそれに比べ、-0.5SD小、また中顎幅も-1.5SD小である。ケイルヒヨウ上顔面示数は1.1SD大で、低型(65-75)に分類される。顎面は西日本縄文男性のそれよりも細面である。鼻高は0.7SD大であるが、眼窓高は-1.3SD小である。上顎幅は-0.2SD小、また眼窓幅も-0.3SD小であるが、鼻根幅は1.3SD大である。中顎幅は-1.5SD小であるが、鼻幅は2.0SD大である。鼻示数は1.5SD大であるが、眼窓示数は-1.2SD小である。鼻部は過低型(58-X)に、また眼窓は低型(X-76)に分類される。鼻腔の外側への拡がりは西日本縄文男性のそれよりも弱いが、鼻根と梨状口は広い。眼窓は西日本縄文男性のそれよりも低い。眼窓は外下がりの長方形である。

側面観では顎高(119)、上顎高(67)、底長(101)、顎長(103)、頭蓋底示数(101.98)が計測された。顎高は西日本縄文男性のそれに比べ、0.6SD大、また顎長も0.2SD大であるが、底長は-0.4SD小、また上顎高も-0.5SD小である。頭蓋底示数は0.5SD大で、中顎型(98-103)に分類される。突顎性は西日本縄文男性のそれよりも強い。上顎では眉間の隆起が、また鼻根と鼻骨の隆起が強い。ナガシテリ凹は深い。中顎では上顎の張り出しが、また歯槽の前突も強い。下顎では角前切痕が殆ど認め

られないが、朴^カ骨^ク結節の隆起は強い。歯並びは良好で、また咬合は僅かに鉗子状である。

四肢骨格 上肢では上腕骨、桡骨、尺骨が、また下肢でも大腿骨、脛骨、腓骨が良好な状態で残る(写真2d-2i)。左上腕骨は近位端の一部を破損するが、残存状態は良好である。右上腕骨には近位側1/3に骨折痕がある。左桡骨は桡骨頭の一部を破損し、また右桡骨では中間位の約2/3が残るが、残存状態は良好である。左尺骨はほぼ完全に残る。右尺骨頭は骨折により圧平、外屈する。大腿骨、脛骨、腓骨は左右共に近位と遠位端の一部を破損するが、残存状態は良好である。

上腕骨 上腕骨では左側の最大長(284)、自然長(282)、頭垂直径(46)、最小周(61)、頑健示数(21.48)が計測された。最大長は西日本縄文男性のそれに比べ、0.2SD大、また自然長も0.4SD大であるが、最小周は-1.2SD小で、また頑健示数も-1.5SD小である。上腕骨長は西日本縄文男性のそれに近いが、細い。自然位での内転性は弱いが、外弯性は強い。遠位の内捻転性は弱いが、近位のそれは強い。近位の後屈性と遠位の前屈性は普通である。上腕骨頭では垂直径が0.8SD大であるが、輪郭が継長である。近位側の1/4では断面輪郭が三角形に近い。前内側面では大結節稜、小結節稜、結節間溝が強い骨隆起を示すが、外側面と後内側面は弱い凸面である。後外側縁は明瞭であるが、後内側縁は不明瞭である。大胸筋の停止は強い粗な凸稜で、また大円筋の停止も強い骨隆起である。結節間溝は巾広く浅く、また広背筋の停止筋線も不明瞭であるが、大胸筋、大円筋、広背筋の停止による骨隆起は著しい。後面では上腕三頭筋外側頭の起始線が鋭い。

中間位では左側の周径(68)、最大径(22)、最小径(19)、断面示数(86.36)が計測された。中間位では周径が西日本縄文男性のそれに比べ、-0.4SD小、また最大径も-1.3SD小であるが、最小径は0.8SD大、また断面示数も2.0SD大である。中間位は通常と異なり、三角筋粗面の外れにあるので、小さい。断面輪郭は梢円形に近い。最大径は前縁と後内側縁の間で、また最小径は前内側面と後外側面の間で計測された。三角筋粗面の隆起は強い。三角筋粗面には前縁、2条の中間稜、後外側稜の4本の縦稜が走る。三角筋粗面は縦稜と縦稜の間では溝状である。後外側稜は上腕三頭筋外側頭の起始であるが、粗な帶状である。前内側面では鳥口腕筋の停止痕が明瞭であるが、後外側面では後外側縁と桡骨神經溝が不明瞭である。後面では上腕三頭筋内側頭の起始稜が弱い。

遠位では左右共に最小周(61)が計測された。遠位では最小周が西日本縄文男性のそれに比べ、左側では-1.2SD小、また右側でも-1.5SD小である。断面輪郭は円みを帯びた三角形である。前内側面には上腕筋の起始痕が後内側縁の近くに明瞭である。後面では後外側と内側縁が鋭く、上腕三頭筋内側頭の起始面は弱い凸である。

上腕骨類 上腕骨類では左側の幅径(54)、滑車前後径(24)、断面示数(44.4)と右側の幅径(55)、滑車前後径(23)、断面示数(41.82)が計測された。遠位端幅は西日本縄文男性のそれに比べ、左側では-1.1SD小、また右側でも-0.8SD小である。前後径も左側では-0.8SD小、また右側でも-1.2SD小である。上腕骨類は左右共に西日本縄文男性のそれよりも小さい。鈎突窓と肘頭窓の開口はない。

橈骨 楔骨では左側の最大長(241)、橈能長(228)、頭幅(21)、最小周(43)、頑健示数(18.86)が計測された。最大長は西日本縄文男性のそれに比べ、1.0SD大、また橈能長も1.2SD大であるが、最小周は-0.6SD小、また頑健示数も-1.1SD小である。橈骨は西日本縄文男性のそれよりも長いが、

細い。外弯性は明瞭である。橈骨頭はほぼ円形である。橈骨粗面の隆起は強く、上腕二頭筋の停止面はほぼ平坦である。回外筋の停止面は平滑である。前縁では浅指屈筋橈骨頭の起始縁が明瞭である。

近位では左側の矢状径(11)、横径(18)、断面示数(61.11)と右側の矢状径(12)、横径(18)、断面示数(66.67)が計測された。矢状径は西日本縄文男性のそれに比べ、左側では-1.2SD小、また右側でも-0.4SD小であるが、横径は左側では0.9SD大、また右側でも0.6SD大である。断面示数は左側では-1.6SD小、また右側でも-0.9SD小である。近位は西日本縄文男性のそれよりも薄く巾広く、扁平である。断面輪郭はほぼ円弧状であるが、前後面は共に凹である。長母指屈筋と長母指外転筋の起始は共に凹面である。骨間縁の張り出しが強いが、後縁は不明瞭である。

中間位では左側の周径(45)、矢状径(12)、横径(16)、断面示数(75.0)が、また遠位では左側の最小周(43)と右側の最小周(44)が計測された。中間位は最大長の二分により決定されたが、近位は中間位よりも約30mm近位に、また遠位は中間位よりも約26mm遠位にある。断面輪郭は中間位では円弧状であるが、前後面は共に軽い凹面である。長母指屈筋の起始面は狭まるが、中間位でも軽い凹面である。長母指外転筋の起始面は中間位では最も広いが、ほぼ平坦である。長母指外転筋と短母指伸筋の起始境界は不明瞭である。円回内筋粗面は狭い紡錘状である。骨間縁は鋭い。遠位では最小周が左側では-0.6SD小、また右側でも-0.5SD小である。断面輪郭はほぼ円弧状である。長母指外転筋と短母指伸筋の走行痕は不明瞭である。骨間縁の括れは強いが、骨間縁は鋭い。

遠位端では左側の幅径(31)が計測された。幅径は西日本縄文男性のそれに比べ、-0.5SD小である。遠位端は西日本縄文男性のそれよりも狭い。前面には方形回内筋の停止痕が、また後面では背側結節が明瞭である。背側結節内側では長母指伸筋腱溝が明瞭で、また総指伸筋と示指伸筋腱溝も広い。

尺骨 尺骨では左側の最大長(255)、機能長(229)、最小周(39)、頑健示数(17.03)が計測された。最大長は西日本縄文男性のそれに比べ、1.0SD大、機能長は1.0SD大、また最小周も0.0SD大であるが、頑健示数は-0.6SD小である。尺骨は西日本縄文男性のそれよりも長いが、細い。近位の外弯性は弱いが、遠位の内弯性は普通である。遠位の括れは強い。

肘頭では左側の高径(34)、幅径(30)、前後径(33)、矢状断示数(113.33)、横断示数(110.0)と右側の幅径(29)が計測された。肘頭は巾広いが、低い。鈎状突起の張り出しが普通である。滑車切痕では中間稜が明瞭である。上腕三頭筋の停止面は平滑であるが、尖端には粗な陥凹がある。尺骨粗面では外側稜と内側稜が上腕筋停止をほぼ囲み、紡錘状の陥凹である。回外筋稜は左右共に強く、鋭い稜である。左側では回外筋稜が橈骨切痕後稜に始まり、後中間稜と骨間縁の両方に続くが、右側では回外筋稜が橈骨切痕後稜に始まり、後中間稜に続く。左側では尺骨粗面外側稜より骨間縁への流れが非常に弱いが、右側では明瞭である。

中間位では左側の矢状径(14)、横径(16)、断面示数(87.5)と右側の矢状径(14)、横径(15)、断面示数(93.33)が、遠位では左側の最小周(39)と右側の最小周(36)が、遠位端では左側の最大径(16)が計測された。中間位は一般に骨間縁の最突部と定められているので、ここでは最大長の二分

による真の中間位と比較された。骨間縁の最突部は真の中間位の約16mm近位にある。矢状径は西日本縄文男性のそれに比べ、左右共に-0.1SD小、横径は左側では-0.5SD小、また右側でも-1.8SD小であるが、断面示数は左側では0.2SD大、また右側でも0.9SD大である。中間位は西日本縄文男性のそれよりも狭い。断面輪郭はほぼ三角形である。前面は深指屈筋の起始であるが、弱い凹である。後面には中間稜が左右共に目立つ。中間稜は近位側の1/4に始まり、遠位端まで明瞭である。後外側部では長母指外転筋、長母指伸筋、示指伸筋の起始境界が明瞭である。長母指外転筋の起始はほぼ中間位に終わる。長母指外転筋の起始面は狭い。長母指伸筋の起始面は近位側の約1/3に始まり、遠位側の約1/3に終わるが、細長い指圧痕状である。示指伸筋の起始面は細長い溝状である。骨間縁は左右共に肥厚し、鈍縁である。尺側手根伸筋面は平坦である。遠位では最小周が左側では0.0SD大であるが、右側では-1.3SD小である。遠位では断面輪郭が丸みを帯びた三角形である。括れと骨間縁は明瞭である。方形回内筋の起始稜は左右共に強い縦稜結節である。方形回内筋の起始面の陥凹は深い。尺骨頭では最大径が-0.8SD小である。尺骨頭はほぼ半円形で、茎状突起は太く短い。

大腿骨 大腿骨では左側の最大長(423)、自然長(415)、遠位周(84)、頑健示数(20.24)と右側の最大長(422)、自然長(416)、遠位周(86)、頑健示数(20.67)が計測された。最大長は西日本縄文男性のそれに比べ、左側では0.6SD大、また右側でも0.4SD大、また自然長も左側では0.3SD大、また右側でも0.2SD大であるが、遠位周は左側では-0.6SD小、また右側でも-0.3SD小である。頑健示数は左側では-1.2SD小、また右側でも-0.5SD小である。大腿骨は西日本縄文男性の長さに近いが、細い。大腿骨はほぼ真っ直ぐに伸び、また内転性、前弯性、内捻転性も普通である。

近位端では左側の幅径(78)と右側の幅径(75)が、また大腿骨頭では左側の横径(45)と右側の周径(141)、垂直径(44)、横径(44)、断面示数(100.0)が計測された。近位端幅は西日本縄文男性のそれに比べ、左側では-1.5SD小、また右側でも-2.1SD小である。近位端は西日本縄文男性のそれよりも狭い。頭周は右側では-0.6SD小、垂直径は-0.7SD小、また横径も-0.5SD小であるが、断面示数は0.6SD大である。大腿骨頭は西日本縄文男性のそれよりも小さいが、断面輪郭はほぼ円形である。骨頭は短いが、屈曲は普通である。頸断面輪郭は前後に薄い卵円形である。大転子は大きく、また小転子も太く長い。転子間線は途切れることなく、粗線の内側唇に続く。

近位側の1/3では左側の矢状径(25)、横径(28)、断面示数(89.29)と右側の矢状径(25)、横径(29)、断面示数(86.21)が計測された。矢状径は西日本縄文男性のそれに比べ、左側では0.2SD大、また右側でも0.5SD大であるが、横径は左側では-1.0SD小、また右側でも-0.5SD小である。断面示数は左側では1.3SD大、また右側でも1.0SD大である。断面輪郭は卵円形で、左右共に中型(85-100)に分類される。外側面の張り出しが明瞭である。大殿筋粗面は巾広く、底にはアンカリング小陥凹が形成される。粗線では内外側唇が稜状で、また中間面が弱い凹である。

中間位では左側の周径(82)、矢状径(28)、横径(24)、断面示数(116.67)と右側の周径(84)、矢状径(28)、横径(24)、断面示数(116.67)が、また遠位では左側の周径(84)、矢状径(27)、横径(23)、断面示数(117.39)と右側の周径(86)、矢状径(28)、横径(25)、断面示数(112.0)が計測された。中間位は最大長の二分により決定された。断面示数は左右共に厚型(100-X)に分類される。

断面輪郭は前後に長い栗の実状である。後内側面はほぼ平坦であるが、後外側面は凹面である。前面は凸面である。粗線では内側唇が外側唇よりも強く鋭く、また中間面が凹である。遠位は粗線の最突部により決定されたが、中間位よりも左側では約19mm遠位に、また右側では約32mm遠位にある。矢状径は西日本縄文男性のそれに比べ、左側では-1.3SD小、また右側でも-0.8SD小、横径は左側では-1.5SD小、また右側でも-0.4SD小である。断面示数は左側では0.4SD大であるが、右側では-0.4SD小である。断面輪郭は前後に長い栗の実状で、厚型(100-X)である。遠位でも後内側面が平坦で、後外側面が凹である。粗線では内側唇が外側唇よりも強く、また中間面も弱い凹である。

大腿骨頭では左側の幅径(81)、前後径(58)、断面示数(71.61)と右側の幅径(79)、前後径(60)、断面示数(75.95)が計測された。遠位端幅は西日本縄文男性のそれに比べ、左側では0.4SD大であるが、右側では-0.2SD小である。前後径は左側では-0.6SD小であるが、右側では0.1SD大である。断面示数は左側では-1.3SD小であるが、右側では0.0SDである。遠位端は西日本縄文男性のそれに近い。断面輪郭は内方に傾斜の台形である。膝窩面では大内転筋の停止が結節状である。

脛骨 脊骨では左側の最大長(358)、機能長(355)、最小周(78)、頑健示数(21.97)が、脛骨頭では右側の幅径(72)が、脛骨粗面位では左側の矢状径(41)、横径(39)、断面示数(95.12)と右側の矢状径(39)、横径(33)、断面示数(84.62)が計測された。最大長は西日本縄文男性のそれに比べ、1.1SD大、機能長は1.2SD大、また最小周も0.2SD大であるが、頑健示数は-0.8SD小である。脛骨は西日本縄文男性のそれよりも長いが、細い。脛骨はほぼ真っ直ぐに伸びるが、前弯性は強い。脛骨では前線の骨肥厚が左右共に見られる。近位端幅は-0.4SD小である。近位端は西日本縄文男性のそれよりも狭い。脛骨粗面位では矢状径が左側では-0.5SD小、また右側でも-0.8SD小である。横径は左側では0.3SD大であるが、右側では-0.9SD小である。脛骨頭には内捻轉性が僅かに認められる。断面輪郭は外方に傾斜の三角形である。脛骨粗面は双峰性の隆起である。

近位では左側の周径(93)、矢状径(35)、横径(23)、断面示数(65.71)と右側の周径(95)、矢状径(37)、横径(23)、断面示数(62.16)が計測された。近位は栄養孔の位置により決定されるが、左側では最大長の二分による中間位の約47mm近位にある。周径は西日本縄文男性のそれに比べ、左側では0.0SD大、また右側でも0.3SD大、横径は左側では0.5SD大、また右側でも0.3SD大である。矢状径は左側では-0.2SD小であるが、右側では0.4SD大である。断面示数は左側では0.6SD大であるが、右側では-0.1SD小である。近位は西日本縄文男性のそれの大きさに近い。断面輪郭は左右共に前後に長い扁平な菱形であるが、中型(63-70)に分類される。栄養孔は後外側部のほぼ中間にある。前外側面は弱い凹である。後面は強い山形である。垂直稜は左右共に鋭く、またヒラメ筋線は強い稜である。後外側部には中間線がさらに形成されるので、後脛骨筋の起始面は弱い山形である。長指屈筋の起始面は平坦である。前脛骨筋の起始面は浅い凹である。

中間位では左側の周径(88)、矢状径(33)、横径(21)、断面示数(63.64)が計測された。中間位は最大長の二分により決定された。周径は西日本縄文男性のそれに比べ、1.0SD大、矢状径は0.4SD大、横径は0.8SD大、また断面示数も0.4SD大である。中間位は西日本縄文男性のそれよりも大きい。断面輪郭は前後に長い扁平な菱形であるが、扁平型に近い中型(63-70)に分類される。前外側

面は弱い凹で、また後面も山形である。垂直稜は中間位にも存在するが、後外側部の中間線は既に消失する。後脛骨筋と長指伸筋の起始面はほぼ平坦である。前脛骨筋の起始面は浅い凹である。

遠位では左側の最小周(78)と右側の最小周(76)が、遠位端では左側の前後径(35)が計測された。前縁の骨肥厚は遠位には及んでいない。周径は西日本縄文男性のそれに比べ、左側では0.2SD大であるが、右側では-0.4SD小である。遠位は西日本縄文男性のそれらの大きさに近い。断面輪郭は丸みを帯びた三角形である。遠位端では前後径が-0.9SD小である。遠位端では距腿関節の外旋性が殆ど認められない。断面輪郭はほぼ五角形である。腓骨切痕は浅い。後面では後脛骨筋腱の内果溝が明瞭である。

腓骨 腓骨では左側の最大長(347)、頑健示数(9.51)と右側の最大長(348)、頑健示数(9.48)が、腓骨頭では右側の幅径(26)が、腓骨頸では左右共に最小周(33)が計測された。最大長は西日本縄文男性のそれに比べ、左側では1.2SD大、また右側でも0.6SD大であるが、最小周は左右共に-1.6SD小である。頑健示数も左側では-2.4SD小、また右側でも-1.9SD小である。腓骨は西日本縄文男性のそれよりも長いが、腓骨頸は細い。腓骨はほぼ真っ直ぐに伸びる。腓骨頸では断面輪郭がほぼ菱形である。内側面はない。後内側部は右側では既にあるが、左側ではない。後外側部は凸面で、ヒラメ筋の起始線も明瞭である。外側面は平坦である。

中間位では左側の周径(43)、最大径(15)、最小径(11)、断面示数(73.33)と右側の周径(44)、最大径(15)、最小径(11)、断面示数(73.33)が計測された。中間位は最大長の二分により決定された。周径は西日本縄文男性のそれに比べ、左側では-1.5SD小、また右側でも-1.9SD小、最大径は左側では-1.5SD小、また右側でも-2.0SD小、また最小径も左側では-0.5SD小、また右側でも-0.4SD小である。中間位は西日本縄文男性のそれよりも細い。最大径は前縁と後外側縁の間に、また最小径は外側面と後内側稜の間にある。断面輪郭は台形に近い四角形である。内側面は巾広く平坦であるが、前内側を向く。後内側部は中間位でも存在するが、後脛骨筋の起始面はほぼ平坦である。後内側部には近位側の1/4に斜走稜が左右共に見られるが、弱い。後脛骨筋の起始面は近位側1/4では斜走稜により凸凹である。後外側部には長母指屈筋が起始するが、弱い凸面である。外側面には短腓骨筋が起始するが、強い褶曲面である。

遠位側の1/4では左右共に最小周(34)が、遠位端では左側の前後径(25)と右側の幅径(18)、前後径(23)、断面示数(127.78)が計測された。遠位では周径が西日本縄文男性のそれに比べ、左側では-1.6SD小、また右側でも-1.5SD小である。遠位は西日本縄文男性のそれよりも細い。断面輪郭は扁平な歪な菱形である。内側面は狭いが、存在する。後内側部は既に消失している。後外側部と外側面も弱い凸である。遠位端では断面輪郭がほぼ三角形である。外果関節面は『くの字』状である。外果窩は深い。

2b号人骨

出自 人骨遺物は平成3年9月に、2号人骨と共に2号土壙墓より出土した。2号人骨は不整方形の土壙墓に側臥屈位で埋葬されていたが、2b号人骨は2号人骨のほぼ下半身の上に存在した。2号人骨は混貝土層より掘り込まれ、また里木I式土器を伴うので、縄文時代前期の終わり頃(約3000B.C.)よ

りも以前と推定されているが、2b号人骨は2号人骨の埋葬時に集骨されたらしい(写真2a)。人骨遺物は縄文時代前期の終わり頃よりも、また2号人骨の埋葬時よりも以前と推定されている。

残存状態 人骨遺物は約300個よりなる焼骨、または火葬骨である。焼骨の殆どは頭部、上肢、下肢の骨片である。頭蓋骨は300個中の約50個を、また四肢骨は残りの250個余りを占める。頭蓋骨では下顎骨、頬骨、前頭骨、側頭骨の一部が、上肢骨では鎖骨、肩甲骨、尺骨、手根骨の一部が、また下肢骨では大腿骨、脛骨、腓骨、足根骨が確認された。2号人骨に存在し、また2b号人骨にも存在する頭蓋骨は側頭骨では側頭鱗、左頬骨では前頭突起、右頬骨では前頭突起、下顎骨では下顎体の左側の半分、また四肢骨は左尺骨では肘頭、右尺骨では尺骨頭、右腓骨では外果である。同時に、側頭鱗、頬骨前頭突起、下顎体の左半分、尺骨肘頭、尺骨頭、腓骨外果は約300個よりなる2b号人骨ではそれら以外には確認されない。頬骨前頭突起、下顎体、尺骨肘頭、尺骨頭、腓骨外果などは2号人骨のそれらに比べると小さく、2b号人骨と2号人骨とが別個体であることに相違ないが、1個体に焼骨のすべてが由来するかは明らかでない。2b号人骨は2号人骨と共に兵庫医科大学の骨格標本箱H83に保管されている。

年齢 下顎歯槽には3本の大臼歯の釘植痕が残る。成長骨端線は橈骨頭、尺骨肘頭、尺骨頭には、また腓骨外果にも存在しない。2b号人骨は20歳以降の成人である。

3号人骨

出自 人骨遺物は平成3年9月に、船倉縄文貝塚の3号土壙墓より出土した。3号土壙墓は長楕円形で、埋葬位は背中を下にした、仰臥屈位である。股関節と膝関節は強い屈曲で、また左肘関節も強い屈曲であるが、右肘関節の屈曲は弱い。頸部の前屈は強い(写真3a)。船倉貝塚調査区では旧耕作土層、搅乱土層、貝殻土層、混貝土層、褐色土層、基盤土層の6層が識別されている。3号土壙墓は混貝土層により被われるが、貝殻の混入はない。3号土壙墓は伴出土器をもたないが、褐色土層より掘り込まれるので、縄文時代前期の終わり頃(約3000B.C.)よりも以前と推定されている。

残存状態 人骨遺物には良好な頭蓋と四肢骨が残る。脳頭蓋は眉間を、また左側の側頭窓と項平面の一部を破損するが、ほぼ復元された。顔面頭蓋も鼻根と左上顎骨の一部を破損するが、ほぼ復元された(写真3bと3c)。上顎には左側に7歯が、また右側には全8歯が残る。左上顎では第2と第3大臼歯のための歯槽が破損するが、第2と第3大臼歯は残る。第1大臼歯は歯槽も破損するが、存在もしない。下顎には左側に全8歯が、また右側には6歯が残る。下顎歯槽には右側の中切歯と側切歯のための歯根痕が残るが、中切歯と側切歯はない。中切歯と側切歯は生前に離脱したのではなく、紛失したものと思われる。椎骨では5個の頸椎が残る。上肢骨格では上腕骨、橈骨、尺骨、手根骨が、また下肢骨格では寛骨、大腿骨、脛骨、腓骨が残る(写真3d-3h)。手根骨では右側の有頭骨が確認された。上腕骨、橈骨、尺骨は左右共に近位と遠位端を破損するが、残存状態は良好である。寛骨には寛骨臼の一部が左右共に残る。大腿骨、脛骨、腓骨は左右共に近位と遠位端の一部を破損するが、残存状態は良好である。人骨遺物は兵庫医科大学の骨格標本箱H86に保管されている。

年齢 人骨遺物には良好な頭蓋と四肢骨が残る。頭蓋では蝶後頭軟骨結合が完全に化骨し、また上下顎でも第3大臼歯が完全に萌出・咬合する。上顎には左側に7歯が、また右側には全8歯が残

る。上顎には第1大臼歯がないが、第2と第3大臼歯が残る。大臼歯は右第1では全咬合面の象牙質を露出し、アーチカルの5+度の強い咬耗である。第2大臼歯も左右共に全咬合面の象牙質を露出し、アーチカルの5+度の強い咬耗である。大臼歯は左第3では咬合面の近位半の象牙質を露出し、アーチカルの5度の咬耗であるが、右側では頬側の近位の象牙質を露出し、3度の咬耗である。大臼歯はいずれも強い咬耗である。前歯の咬耗もそれ以上に強いが、咬耗面はほぼ水平である。

下顎には左側に全8歯が、また右側にも6歯が残る。下顎右側では中切歯と側切歯が紛失する。大臼歯は左第1では舌側の近位、頬側の近位と遠位、舌側の遠位に、馬蹄形の象牙質を露出し、アーチカルの4+度の強い咬耗である。右側では頬側と舌側の近位に棒状の象牙質を、また遠位側の頬側、中間、舌側に針棒大の象牙質を露出し、アーチカルの4度の咬耗である。大臼歯は左第2ではけん質が咬合面の中央に残るが、輪状の象牙質を露出し、アーチカルの5度の強い咬耗である。右側でもけん質が咬合面の中間位に線状に残るが、ほぼU字状の象牙質を露出し、アーチカルの5度の強い咬耗である。第3大臼歯は左右共に全咬合面のけん質を咬耗し、アーチカルの2度である。大臼歯は第3を除き、いずれも強い咬耗である。前歯はそれ以上に強い咬耗であるが、咬耗面はほぼ水平である。歯並びは良好で、また咬合は鉗子状である。人骨遺物は40歳代、あるいはそれ以降の熟年期に相当するであろう。

性別 頭蓋は眉間、鼻根と左上顎骨の一部を、また左側の側頭窩と項平面の一部を破損するが、ほぼ復元されている(写真3bと3c)。頭蓋では前頭鱗の立ち上がりが強いが、女性に見られるほどの立ち上がりではない。前頭結節は左右共に明瞭である。眉間は破損するが、眉弓の隆起は強い。眼窩上縁は厚く丸い。頭頂結節の膨隆は弱い。項平面は広く、膨隆するが、凹凸は強い。外後頭隆起は結節状である。上項線は乳様突起まで明瞭で、内側半は特に強い。下項線もほぼ全長にわたり明瞭である。最上項線は形成されないが、外後頭隆起の上方には帽状腱膜の起始痕と思われる粗面が存在する。側頭骨では乳突上稜が強い稜結節状で、乳突上溝も明瞭である。乳様突起は外耳孔より先端の長さでは約29mmと、非常に長く太い。人骨遺物は多分男性であろう。

生前身長 上肢では上腕骨、桡骨、尺骨が近位と遠位端を、また下肢でも大腿骨、脛骨、腓骨が近位と遠位端を破損するので、正確な身長は推定できない。身長推定は左側の全四肢骨体と2号人骨のそれらとの比較法に基づいた。

2号人骨は左上腕骨では最大長(284)、左桡骨では最大長(241)、左尺骨では最大長(255)、左大腿骨では最大長(423)、左脛骨では最大長(358)、左腓骨では最大長(347)が計測されている。左上腕骨は大結節稜より鈎突窓までの長さでは2号人骨のそれよりも僅かに大きい。左桡骨は桡骨粗面より体遠位までの長さでは2号人骨のそれよりも僅かに大きい。左尺骨は鈎状突起より体遠位までの長さでは2号人骨のそれにほぼ等しい。左大腿骨は小転子より膝窓面までの長さでは2号人骨のそれよりも、約20mm程大きい。左脛骨は脛骨粗面より体遠位までの長さでは2号人骨のそれよりも、約20mm程大きい。左腓骨も体近位より体遠位までの長さでは2号人骨のそれよりも、約20mm程大きい。

推定最大長を男性のための74イの回帰式に代入し得られる身長は左上腕骨、桡骨、尺骨が2号人骨のそれらとほぼ等しいので、約153-163cmで、また左大腿骨、脛骨、腓骨が2号人骨のそれらよりも

約20mm程長いので、約164-167cmである。推定最大長を男性のためのビ'アリンの回帰式に代入し得られる身長は左上腕骨と橈骨が2号人骨のそれらとほぼ等しいので、約153/165cmで、また左大腿骨と脛骨が2号人骨のそれらよりも約20mm程長いので、約165/168cmである。推定最大長を男性のためのトロッターケ'レイサ'の回帰式に代入し得られる身長は左上腕骨、橈骨、尺骨が2号人骨のそれらとほぼ等しいので、約159-167cmで、また左大腿骨と腓骨が2号人骨のそれらよりも約20mm程長いので、約168/169cmである。推定身長は不正確であるが、フジイ式では約153-167cm、ビ'アリン式では約153-168cm、またトロッターケ'レイサ'式では約159-169cmである。生前身長は多分160cm前後であろう。2号人骨は西日本縄文男性のそれよりも大きい前腕と下腿示数をもち、上肢では前腕骨が上腕骨よりも長く、また下肢でも下腿骨が大腿骨よりも長いケイ'であったが、同様に、3号人骨も前腕骨が上腕骨よりも長く、また下腿骨が大腿骨よりも長いケイ'に相当するものと思われる。

脳頭蓋 脳頭蓋は眉間を、また左側の側頭窩と頂平面の一部を破損するが、ほぼ復元されている(写真3bと3c)。上面観では頭頂弧(129)、後頭弧(124)、前頭幅(95)、最大幅(142)、冠状弧(336)が計測された。前頭幅は西日本縄文男性のそれに比べ、-0.4SD小、また最大幅も-0.9SD小である。頭頂弧は-0.4SD小であるが、後頭弧は0.6SD大、また冠状弧も1.8SD大である。前頭幅は西日本縄文男性のそれに近いが、最大幅は狭い。頭頂骨も西日本縄文男性のそれに近いが、後頭骨は長い。前頭鱗では強い後眼窓狭窄であるが、外側へは強く膨らむ。前頭鱗は緩かな曲線の張り出しがあるが、後頭鱗は尖る傾向にある。頭頂結節の膨隆は弱い。上面観輪郭はゼ'ゼ'の卵円形に分類される。

側面観では頭頂弧(129)、頭頂弦(116)、後頭弧(124)、後頭弦(106)、ハ'ジ'オ'ン・ア'レ'グ'マ高(145)が計測された。ハ'ジ'オ'ン・ア'レ'グ'マ高は西日本縄文男性のそれに比べ、2.1SD大である。頭頂弧は-0.4SD小、また頭頂弦も-0.2SD小であるが、後頭弧は0.6SD大、また後頭弦も1.3SD大である。頭高は西日本縄文男性のそれよりも大きい。頭頂骨は長さと弯曲では西日本縄文男性のそれに近いが、後頭鱗は長く高い。側頭鱗は平坦であるが、側頭窩は僅かに膨隆する。頭頂結節の膨隆は弱い。頭頂骨の後方への落ち込みは強く、また後頭鱗の前方への潜り込みも強い。側面観輪郭は楕円形に近い。右アヌリオンには15mm大の三角形の縫合骨が、また14mm長の横後頭縫合の遺残も存在する。

後面観では最大幅(142)、両耳幅(121)、ハ'ジ'オ'ン・ア'レ'グ'マ高(145)、冠状弧(336)、幅高示数(102.11)が計測された。最大幅は西日本縄文男性のそれに比べ、-0.9SD小であるが、ハ'ジ'オ'ン・ア'レ'グ'マ高は2.1SD大である。幅高示数は2.0SD大で、高型(98-X)に分類される。後面観輪郭は西日本縄文男性のそれよりも高く狭い。頭蓋底幅は-0.9SD小であるが、冠状弧は1.8SD大である。側頭窩は僅かに膨隆する。頭頂結節の膨隆も弱い。頭蓋冠は弓状で、後面観輪郭はハ'ラ'の家屋状に分類される。人字縫合には多くの縫合骨が形成され、また右アヌリオンには14mm長の横後頭縫合の遺残も見られる。

顔面頭蓋 顔面頭蓋は鼻根と左上頸骨の一部を破損するが、ほぼ復元された(写真3b)。正面観では前頭幅(95)、上顎幅(103)、頬骨弓幅(136)、中顎幅(101)、鼻幅(24)、下顎角幅(99)が、また側面観では顎長(95)が計測された。前頭幅は西日本縄文男性のそれに比べ、-0.4SD小、上顎幅は-2.0SD小、頬骨弓幅は-1.3SD小、また下顎角幅も-1.1SD小である。顎面は西日本縄文男性のそれ

よりも狭い。前頭鱗では後眼窓狭窄が強い。頬骨弓の張り出しが強い。正面観輪郭はほぼ卵円形である。眼窓は外下がりであるが、方形である。中顎幅は-0.5SD小、また鼻幅も-1.6SD小である。鼻腔の外側への拡がりは弱く、また梨状口も狭い。頬骨弓より上顎骨への輪郭は深い『くの字』状の切痕で、犬歯窓は浅い。下顎角は狭いが、外翻は左右で異なり、右側が左側よりも強い。歯並びは良好で、また咬合は鉗子状である。顎長は-1.8SD小である。中顎では上顎の張り出しが、また歯槽の突顎性も弱い。下顎では角前切痕は殆ど認められない。

四肢骨格 上肢では上腕骨、桡骨、尺骨が、また下肢では大腿骨、脛骨、腓骨が左右共に近位と遠位端を破損するが、良好な状態で残る(写真3d-3h)。

上腕骨 上腕骨では左側の最小周(62)と右側の最小周(63)が計測された。外弯性は僅かに認められる。近位の後屈性と遠位の前屈性はほぼ普通である。近位側の1/4では断面輪郭が三角形に近い。前内側面では大結節稜、小結節稜、結節間溝が骨隆起を示すが、外側と後内側面は弱い凸面である。後外側と後内側線は共に明瞭である。大胸筋停止は強い粗な凸稜である。大円筋の停止はアーチング凹である。結節間溝は巾広く浅く、また広背筋の停止筋線も不明瞭であるが、大胸筋、大円筋、広背筋の停止による骨隆起は明瞭である。後面では上腕三頭筋外側頭の起始線が不明瞭である。三角筋粗面位では断面輪郭が不整形な台形である。三角筋粗面は弱い隆起である。三角筋粗面では前稜と後外側稜が明瞭である。後外側稜は粗な帯状である。前内側面では鳥口腕筋の停止痕が明瞭である。後外側面では後外側線と桡骨神経溝が不明瞭である。後面では上腕三頭筋内側頭の起始稜が弱い。遠位では最小周が西日本縄文男性のそれに比べ、左右共に-0.9SD小である。遠位は西日本縄文男性のそれよりも細い。断面輪郭は円みを帯びた三角形である。後面では後外側線が鋭いが、後内側線は丸い。上腕三頭筋内側頭の起始は弱い凸面である。

桡骨 桡骨は近位では左側の矢状径(11)、横径(16)、断面示数(75.0)が、また遠位では左側の最小周(43)が計測された。外弯性は明瞭である。桡骨粗面の隆起は強い。上腕二頭筋の停止面はほぼ平坦である。回外筋の停止面は巾広く、また中間線も明瞭である。前縁では浅指屈筋桡骨頭の起始線が明瞭である。近位では矢状径が西日本縄文男性のそれと等しい0.0SDであるが、横径は-0.7SD小である。断面示数は0.6SD大である。近位は狭い。断面輪郭は左右共にほぼ円弧状であるが、前後面が共に凹面である。長母指屈筋と長母指外転筋の起始面は共に凹面である。骨間縁の張り出しが弱い。前縁と後縁は共に丸い。外側面では円回内筋の停止筋線が斜走する。円回内筋粗面位では断面輪郭が円弧状であるが、前後面は未だに軽い凹面である。長母指屈筋の起始面は狭まるが、長母指外転筋の起始面は最も巾広く、褶曲し、また後縁を不明瞭にしている。長母指外転筋と短母指伸筋の起始境界は明瞭である。円回内筋粗面は狭い紡錘状である。骨間縁は鋭い。遠位では最小周が-0.6SD小である。遠位は細い。断面輪郭はほぼ円弧状である。骨間縁の括れは弱いが、鋭い。後面では長母指外転筋と短母指伸筋の走行痕が明瞭である。

尺骨 尺骨は中間位では左側の矢状径(14)、横径(15)、断面示数(93.33)と右側の矢状径(14)、横径(12)、断面示数(116.67)が、また遠位では左側の最小周(34)と右側の最小周(35)が計測された。近位の後弯性と遠位の内弯性はほぼ普通である。尺骨粗面では外側稜と内側稜が上腕筋の停止

面をほぼ囲み、縦長の三角形の陥凹である。回外筋稜は左右共に強く、鋭い稜である。回外筋稜は橈骨切痕後稜に始まり、後中間稜と骨間縁の両方に続く。尺骨粗面外側稜より骨間縁への流れは左右共に弱いが、明瞭である。中間位は骨間縁の張り出しにより決定されたが、矢状径は西日本縄文男性のそれに比べ、左右共に-0.1SD小であるが、横径は左側では-1.2SD小、右側では-4.8SD小である。断面示数は左側では0.8SD大であるが、右側では3.3SD大である。中間位は左右共に細いが、右横径は極端である。断面輪郭は左側ではほぼ三角形であるが、右側では特異な栗の実状である。後面では中間稜が左右共に明瞭である。中間稜は近位側の1/4に始まり、遠位端まで明瞭である。深指屈筋の起始面は左側ではほぼ平坦であるが、右側は狭い凸面である。後外側部では長母指外転筋と長母指伸筋の起始境界が明瞭であるが、長母指伸筋と示指伸筋の起始境界は不明瞭である。長母指外転筋の起始面は広い指状圧痕である。長母指伸筋の起始面はほぼ中間位に始まり、深い指状圧痕である。示指伸筋の起始面は左右共に溝状である。骨間縁は左右共に鈍縁である。遠位では最小周が左側では-2.4SD小、また右側でも-1.7SD小である。遠位も細い。断面輪郭は円形に近い。括れは強く、また骨間縁も明瞭である。方形回内筋の起始稜は左右共に弱い。方形回内筋の起始面は粗である。

大腿骨 大腿骨は近位では左側の矢状径(23)、横径(31)、断面示数(74.19)と右側の矢状径(26)、横径(29)、断面示数(89.66)が、また遠位では左側の周径(83)、矢状径(29)、横径(24)、断面示数(120.83)と右側の周径(88)、矢状径(30)、横径(24)、断面示数(125.0)が計測された。大腿骨はほぼ真っ直ぐに伸びるが、内捻軸性と前弯性は強い。近位では矢状径が西日本縄文男性のそれに比べ、左側では-0.8SD小であるが、右側は1.4SD大である。横径は左側では0.6SD大であるが、右側は-0.5SD小である。断面示数は左側では-1.5SD小であるが、右側は1.5SD大である。断面示数は左側では過扁平型(X-75)に分類されるが、右側は中型(85-100)に分類される。断面輪郭は左右共に梢円形であるが、右側では粗線外側唇が強い稜状である。外側面の張り出しあは左右共に強いが、左側では前面が軽く陥凹する。大殿筋粗面は左右共に溝状ではないが、粗線外側唇は強い稜で、また内側唇も明瞭である。粗線中間面は左右共に巾広く、平坦である。遠位は粗線の最凸部により決定されたが、最大長の二分による中間位に近い。周径は左側では-0.8SD小であるが、右側は0.5SD大である。矢状径は左側では0.0SD大、また右側も0.5SD大であるが、横径は左側では-0.9SD小、また右側でも-1.2SD小である。断面示数は左側では0.9SD大、また右側も1.5SD大である。断面示数は左右共に西日本縄文男性のそれよりも厚型(100-X)に分類される。断面輪郭は前後に長い栗の実状である。後内側面は左側では平坦であるが、右側は凹面である。後外側面は左右共に凹面である。前面は弱い凸面である。粗線は左側では狭く、また中間面も凸であるが、右側では内側唇と外側唇が強い稜で、また中間面も凹である。

脛骨 脛骨は粗面位では左側の矢状径(41)、横径(38)、断面示数(92.68)と右側の矢状径(42)が、近位では左側の周径(87)、矢状径(35)、横径(23)、断面示数(65.71)と右側の周径(90)、矢状径(34)、横径(23)、断面示数(67.65)が、遠位では左側の最小周(70)と右側の最小周(72)が計測された。脛骨はほぼ真っ直ぐに伸び、また前弯性も普通である。粗面位では矢状径が西日本縄文男性

のそれに比べ、左側では-0.5SD小であるが、横径は0.1SD大、また断面示数も0.6SD大である。断面輪郭は内外に扁平な三角形である。脛骨粗面は単峰性の隆起である。近位では周径が左側では-1.1SD小、また右側でも-0.5SD小、矢状径は左側では-0.2SD小、また右側でも-0.7SD小である。横径は左側では0.5SD大、また右側でも0.3SD大、断面示数は左側では0.6SD大、また右側でも1.2SD大である。近位は小さいが、僅かに広い。断面輪郭は左右共に前後に長く、内外に扁平な三角形であるが、中型(63-70)に分類される。栄養孔は左右共に後外側部の中間稜の近くにある。前内側面は弱い凸であるが、前外側面は強い褶曲である。後面は凸面である。ヒラメ筋線は左側では強い凸稜状であるが、右側では粗線状である。垂直稜は左側では線状であるが、右側は強い稜である。後脛骨筋の起始面は弱い凸であるが、長指伸筋の起始面はほぼ平坦である。前脛骨筋の起始は深い凹面である。遠位では周径が左側では-1.9SD小、また右側でも-1.2SD小である。遠位は左右共に細い。断面輪郭は左右共に内外に扁平な三角形である。

腓骨 腓骨は近位では左側の最小周(37)と右側の最小周(35)が、また遠位では左右共に最小周(39)が計測された。腓骨は左右共に僅かに外弯する。腓骨頸では最小周が西日本縄文男性のそれに比べ、左側では-0.5SD小、また右側でも-1.0SD小である。腓骨頸は左右共に細い。断面輪郭は左側では卵円形であるが、右側はほぼ菱形である。内側面は左右共にない。後内側部は左側にはないが、右側には存在する。後外側部は左側では強い凸面であるが、右側では弱い。ヒラメ筋の起始線は左側ではアンカリング陥凹である。外側面は左右共にあり、弱い凸面である。中間位は最大長の二分により決定されるので、正確ではないが、断面輪郭は左右共にほぼレール状である。最大径は前縁と後外側縁の間に、また最小径は外側面と後内側稜の間にある。内側面は左右共に非常に狭く、しかも内側を向く。後内側部は深い凹面である。後内側部には通常、近位側の1/4に斜走稜があるが、斜走稜は左側のみに認められる。後外側部は左右共にほぼ平坦である。外側面は強い褶曲である。遠位では最小周が左側では-0.3SD小、また右側でも-0.4SD小である。遠位も細い。断面輪郭は内外に扁平な半楕円形である。後内側部は既に存在しない。後外側部と外側面は弱い凸面である。

おわりに

船倉貝塚は平成3年7月、羽島・四十瀬線の都市計画道路建設工事の際に発見された。考古学調査により多量の縄文時代の考古学遺物と共に、9月には4例の人骨が出土した。以下、1号人骨、2号人骨、2b号人骨、3号人骨とそれぞれに命名されたが、1号人骨は1号土壙墓より、2号と2b号人骨は2号土壙墓より、3号人骨は3号土壙墓より出土した。考古学調査では旧耕作土層、搅乱土層、貝殻土層、混貝土層、褐色土層、基盤土層の6層が識別されたが、1号土壙墓は貝殻土層より、2号土壙墓は混貝土層よりの、3号土壙墓は褐色土層よりの掘り込みであった。1号土壙墓は3基中では最も新しいが、里木I式土器を伴うので、縄文時代前期の終わり頃(約3000B.C.)と推定されている。3号土壙墓は最も古い褐色土層よりの掘り込みで、また貝殻の混入と伴出土器もない。混貝土層と褐色土層の堆積形成にどのくらいの期間を要するかであるが、3号土壙墓は、あるいは3号人骨は縄文時代前期の何処まで遡れるかが次の課題である⁽¹⁾。

1号土壙墓は不整円形で、1号女性は仰臥位の埋葬姿勢である。股関節は伸展しているが、膝関節

と肘関節の状態は不明。頸部の前屈は強い。2号土壙墓は不整方形で、2号男性は左側臥屈位の埋葬姿勢である。股関節と膝関節は強く屈するが、右肘関節の屈曲は弱い。頸部の前屈は強い。3号土壙墓は長楕円形で、3号男性は仰臥屈位の埋葬姿勢である。股関節と膝関節の屈曲は強い。左肘関節は強く屈するが、右側は弱い。頸部の前屈は強い。2b号人骨は2号男性の埋葬の際に集骨されたようであるが、火を浴びたのか、あるいは火葬されたのかは定かでない。1号女性は最新の埋葬で、3号男性は最古の埋葬であるが、埋葬時期、埋葬姿勢共に異なる。これらの相異が埋葬儀礼の時代的変遷なのか、あるいは埋葬儀礼の確立過程にあるのかは次に残されるべき問題である。

1号女性には上顎に全16歯が、下顎には左右に6歯づつが残る。下顎左側では第3大臼歯は萌出していないが、第1小白歯は生前離脱である。下顎右側では犬歯と側切歯が生前離脱である。2号と3号男性には生前離脱の形跡は存在しない。1号女性は下顎左側の第1小白歯と右側の犬歯と側切歯を生前離脱すると共に、右中切歯より左犬歯までの4歯が共に遠位移動している。右中切歯は正中矢状面よりも左側にある。1号女性は30歳代の後半に死亡したと推測されている。右中切歯より左犬歯までの4歯の遠位移動にどのくらいの期間を要するかは明らかでないが、左第1小白歯の生前離脱はかなり以前と推測される。1号女性の埋葬は船倉貝塚では最も新しいが、縄文時代前期の終わり頃と推定されている。第1小白歯の抜歯例は過去に殆ど見られないが、1号女性の下顎左第1小白歯の生前離脱が抜歯儀礼の始まりに相当するのかは次に残されるべき問題である。

1号女性には上顎に全16歯が、また下顎には左右に6歯づつが残る。2号男性には上下顎に全32歯が残る。3号男性には上顎に15歯が、また下顎には14歯が残る。1号女性は下顎では良好な歯並びであるとは言えないが、2号と3号男性は上下顎共に良好な歯並びである。1号女性では下顎左側の第3大臼歯が未萌出であると共に、他の3本の第3大臼歯も小白歯様の萎縮歯である。2号と3号男性には大臼歯の萎縮は見られない。1号女性の埋葬は船倉貝塚では最も新しいが、縄文時代前期の終わり頃と推定されている。船倉貝塚縄文前期人骨には女性ではあるが、顎骨の退縮傾向が既に現われているようである。

1号女性には上顎に全16歯が、また下顎には左右に6歯づつが残る。2号男性には上下顎に全32歯が残る。3号男性には上顎に15歯が、また下顎に14歯が残る。1号女性は下顎では良好な歯並びであるとは言えないが、鉗子状の咬合である。2号男性は上下顎共に良好な歯並びであるが、僅かに鉗子状である。3号男性も上下顎共に良好な歯並びであると共に、鉗子状である。咬合面は男女性の、また前後歯の区別もなくほぼ水平である。後歯の咬耗も強いが、前歯はそれ以上に強い。狩猟採集を生業とする縄文時代にはある特定の前歯を特殊な目的に多用する場合があるが、前歯はいずれの個体もほぼ均等に咬耗している。船倉貝塚縄文前期人骨では特定の前歯でなく、前歯全体をある目的に多用する慣習があったようである。

2号男性は30歳代の前半の年齢であるが、右上肢に骨折痕が残る。上腕骨では近位側の1/3が内後方に屈し、また前腕でも尺骨頭が変形する。2号男性は生前に、多分10-20歳代であろうが、上腕骨と尺骨を同時骨折し、その後、骨折は上腕骨では内後屈状態で、また尺骨頭でも圧平、外屈状態で自然治癒したものと思われる。骨折の自然治癒と機能回復には通常2-3ヶ月が必要である。骨折の自

然治癒と機能回復期をどのように暮らしたかであるが、誰かの介添えのもとに、生活したことは確かであろう。

船倉貝塚縄文人骨は西日本縄文人骨の中で、特長把握を試みられた。ヒトには例外なく、身体形質に大きな変異が存在する。身長などはその典型であるが、身体形質には変異があり、左右差、個人差、性差、地域差、集団差、時代差などが必ずある。船倉貝塚縄文人骨は1例の女性と2例の男性よりなるが、少數である。船倉貝塚縄文人骨の特長把握は西日本縄文人骨の大きい変異の中で試みられたが、単に個人差の検出に、また単なる個人識別に過ぎない。それ故に、ここでは船倉貝塚縄文人骨の特記事項を個人毎に記載するに留める。

西日本縄文人骨には岡山県津雲貝塚出土人骨が主に含まれるが、その他に、福岡県永犬丸Einomaru貝塚、上八Kojo貝塚、木月Kitsuki貝塚、山鹿Yamaga貝塚出土人骨も含まれる。福岡県の全貝塚は縄文時代の後期と、また岡山県津雲貝塚は後晩期と推定されている。従って、船倉貝塚縄文人骨は縄文時代の前期と推定されているので、西日本縄文人骨と言う比較資料は船倉貝塚縄文人骨の後の時代のものである。西日本縄文後期人骨には27例の男性と26例の女性頭蓋が、25例の男性と22例の女性上腕骨が、22例の男性と21例の女性桡骨が、25例の男性と17例の女性尺骨が、22例の男性と27例の女性大腿骨が、16例の男性と18例の女性脛骨が、14例の男性と11例の女性腓骨が含まれている。

SD得点は船倉貝塚縄文前期人骨の特長把握に用いられた。SD得点は船倉貝塚縄文前期人骨計測値より西日本縄文後期人骨平均値を減算し、その後、西日本縄文後期人骨標準偏差により除算したものである。人骨計測値はどの身体形質に於いても正規分布なので、-1.0SD得点以上で、また+1.0SD得点以下には西日本縄文後期人骨計測値の68%が含まれる。残りの16%づつは-1.0SD得点以下に、または+1.0SD得点以上に入る。従って、-1.0SD得点以下または+1.0SD得点以上を得た船倉貝塚縄文前期人骨計測値は西日本縄文後期人骨の16%に相当するほどに特異であることを示唆する。

1号女性は30歳代の後半の年齢である。生前身長は上腕骨、大腿骨の一部と2号男性のそれらとの比較法に基づいたが、150cm前後と推定された。生前身長は西日本縄文後期女性のそれに近い。脳頭蓋は後頭部のみであるが、上面観輪郭はゼンジの五角形に、また側面観輪郭は菱形に似る。後頭鱗は尖る傾向にある。後面観輪郭はハーネーの家屋状である。側頭窓は膨隆する。脳頭蓋は頭蓋底では西日本縄文後期女性のそれよりも狭い。その他に、前頭鱗には前頭縫合が、また後頭鱗には横後頭縫合が残り、同時に、後頭平面はインカ骨により3分割される。

1号女性には右上腕骨が良好な状態で残る。上腕骨では外弯性が強く、また遠位の前屈性も強い。上腕骨では三角筋粗面の隆起が特異である。三角筋粗面では前凸稜、1条の中間稜、後外側凸稜の3本の縦稜が走り、巾広い樋状である。後外側面には後外側縁と桡骨神経溝が明瞭である。上腕骨は西日本縄文後期女性のそれよりも太い。上腕は筋骨逞しく、またしばしば外転させる必要のある状況にあったようである。

1号女性には左右の大腿骨が良好な状態で残る。大腿骨はほぼ真っ直ぐに伸びるが、内捻軸性と前弯性は非常に強い。近位では断面輪郭が前後に扁平な梢円形で、過扁平型(X-75)であるが、遠位で

は断面輪郭が前後に長い『団栗の実』状で、厚型(100-X)である。近位では外側面が強く張り出し、大殿筋粗面がアンカリングし、また粗線外側唇も強い稜である。遠位では前面と後内側面がほぼ平坦で、後外側面が強い凹で、また粗線も強い凸稜である。粗線は内外側唇共に強く、また中間面も溝状である。大腿骨は近位では西日本縄文後期女性のそれよりも扁平で、また遠位では太く厚い。大腿は筋骨逞しく、下肢を酷使する必要のある状況にあったようである。同時に、大腿骨近位の扁平性と遠位の『団栗の実』状構造は津雲貝塚縄文後期人骨の大きな特長の一つである。

2号男性は30歳代の前半の年齢である。2号男性は生前に右上肢の上腕骨と尺骨を同時骨折したと言う病歴をもつ。上腕骨は内後屈状態で、また尺骨頭も圧平、外屈状態で、感染症にも罹患せずに、自然治癒したが、右上肢には運動性に不自由さが残ったであろう。生前身長は四肢骨の最大長に基づいたが、150cm台の後半と推定された。生前身長は西日本縄文後期男性のそれに近い。2号男性では左前腕示数と左下腿示数が得られた。前腕示数は桡骨最大長の上腕骨自然長に対する比で、また下腿示数は脛骨自然長の大腿骨自然長に対する比であるが、前腕示数は85.46%で、また下腿示数は85.54%である。前腕示数と下腿示数は共に長型(80-X)で、前腕は上腕よりも長く、また下腿は大腿よりも長い。生前身長は西日本縄文後期男性のそれに近いが、上肢と下肢のアーチボーグは西日本縄文後期男性のそれよりも、前腕と下腿が上腕と大腿よりも長いタイプに属する。

2号男性は後頭鱗の一部を破損するが、脳頭蓋は復元された。上面観輪郭はゼンジの五角形である。前頭鱗は緩かな曲線の張り出しで、また外側への膨らみも強い。後頭鱗は尖る傾向にある。長幅示数はカールソンの中型(75-80)である。側面観輪郭は梢円形である。前頭鱗は長く、弯曲も強い。頭頂骨は長さ、弯曲共に普通であるが、後方への落ち込みは強い。後頭鱗の潜り込みも強い。長高示数は中型(70-75)である。後面観輪郭は砲弾状で、また頭蓋冠は弱い切り妻状である。幅高示数は中型(92-98)である。脳頭蓋は西日本縄文後期男性のそれに酷似する。その他に、右アステリオンには横後頭縫合の遺残がある。

2号男性は右上顎骨を破損するが、顎面頭蓋はほぼ復元された。正面観輪郭は長方形に近い。前頭鱗は巾広いが、頬骨弓の張り出しが弱い。頬骨弓より上顎骨への輪郭は深い『くの字』状の切痕で、また下顎角も狭い。ヨルマン全顎面示数は中型(85-90)で、また上顎面示数は広型(45-50)である。眼窩は外下がりの長方形であるが、鼻根と梨状口は広い。鼻腔の外側への拡がりは弱い。眼窩示数は低型(X-76)で、鼻部は過低型(58-X)である。顎面頭蓋は西日本縄文後期男性のそれよりも細面で、眼窓は低く、鼻根と梨状口は広い。

2号男性は上肢では左上腕骨が良好な状態で残る。上腕骨は自然位の内転性では弱いが、外弯性は強い。内捻転性は遠位では弱いが、近位は強い。近位では断面輪郭が特異で、前内側面には大結節稜、小結節稜、結節間溝が共に強く骨隆起する。中間位では三角筋粗面の隆起も強い。三角筋粗面には前稜、2条の中間稜、後外側稜の4本の縦稜も走る。上腕骨は西日本縄文後期男性の長さに近いが、細い。上腕骨は筋骨逞しいが、上腕は細く華奢である。

2号男性は前腕では桡骨と尺骨が良好な状態で残る。桡骨では外弯性が明瞭である。尺骨では近位の後弯性と遠位の内弯性がほぼ普通である。桡骨粗面は強い隆起で、また近位でも長母指屈筋と長

母指外転筋の起始面が共に凹である。尺骨粗面は紡錘状の陥凹で、回外筋稜も強く鋭い。後面では中間稜が近位側の1/4より遠位端まで明瞭である。後外側部では長母指外転筋、長母指伸筋、示指伸筋の起始境界が明瞭で、長母指外転筋の起始は狭く、長母指伸筋の起始は細長い指状圧痕で、また示指伸筋の起始も溝状である。方形回内筋の起始稜は強く、起始陥凹も深い。橈骨と尺骨は西日本縄文後期男性のそれらよりも長いが、細い。前腕骨は筋骨逞しいが、前腕は長く細く華奢である。

2号男性は下肢では大腿骨が良好な状態で残る。大腿骨はほぼ真っ直ぐに伸び、また内転性、前弯性、内捻転性も普通である。近位では断面輪郭が卵円形で、中型(85-100)であるが、外側面の張り出しは明瞭で、また大殿筋粗面も巾広いアンカリングである。粗線内外側唇も稜状で、また中間面も凹である。中間位と遠位では断面輪郭が前後に長い『団栗の実』状で、共に厚型(100-X)である。後内側面はほぼ平坦で、後外側面は凹である。粗線では内側唇が外側唇よりも強いが、中間面は溝状である。大腿骨は西日本縄文後期男性の長さに近いが、細い。大腿骨は筋骨逞しいが、大腿は細く華奢である。大腿骨中間位と遠位の『団栗の実』状構造は津雲貝塚縄文後期人骨の大きな特長の一つである。

2号男性は下腿では脛骨と腓骨が良好な状態で残る。脛骨はほぼ真っ直ぐに伸びるが、前弯性は強い。前縁には骨肥厚が左右共にある。前縁の骨肥厚の原因は不明であるが、打ち身などの機械的なストレインも成因になり得る。近位では断面輪郭が内外に扁平な菱形である。後面では垂直稜が鋭く、またヒラメ筋線も強い。後外側部には中間線も形成される。腓骨は中間位では断面輪郭が台形に近い。内側面は巾広く平坦で、後内側部はほぼ平坦で、後外側部は弱い凸面で、外側面は強い褶曲である。脛骨と腓骨は西日本縄文後期男性のそれらよりも長いが、細い。下腿骨は筋骨逞しいが、下腿は長く細く華奢である。脛骨近位の内外に扁平な菱形構造は津雲貝塚縄文後期人骨の大きな特長の一つである。

3号男性は40歳代、あるいはそれ以降の年齢と推定された。生前身長は左側の四肢骨の一部と2号男性のそれらとの比較法に基づいたが、160cm前後と推定された。生前身長は西日本縄文後期男性のそれに近い。

3号男性は眉間を破損するが、脳頭蓋はほぼ復元された。上面観輪郭はセ'ルジ'の卵円形である。前頭鱗は緩かな曲線の張り出で、また外側への膨らみも強い。後頭鱗は尖る傾向にある。側面観輪郭は楕円形に近い。頭頂骨は長さ、弯曲共に普通であるが、後方への落ち込みは強い。後頭鱗は長く、後頭鱗の前方への潜り込みも強い。後面観輪郭はハ'ラ'の家屋状である。頭蓋冠は弓状で、側頭窓は僅かに膨隆する。幅高示数は高型(98-X)である。脳頭蓋は西日本縄文男性のそれよりも狭く高い。その他に、右アヌリウスには横後頭縫合の遺残がある。船倉貝塚縄文前期頭蓋は僅か3例に過ぎないが、3例中のすべてに横後頭縫合の遺残があり、非常に奇異な現象も見られる。

3号男性は鼻根と左上頸骨の一部を破損するが、顎面頭蓋はほぼ復元された。正面観輪郭はほぼ卵円形に近い。前頭鱗は狭いが、頬骨弓の張り出しが強い。頬骨弓より上顎骨への輪郭は深い『くの字』状の切痕で、また下顎角も狭い。鼻腔の外側への拡がりは弱く、また梨状口も狭い。眼窓は外下がりの方形である。顎面頭蓋は西日本縄文後期男性よりも細面である。

3号男性は上肢では上腕骨が良好な状態で残る。近位の後屈性と遠位の前屈性はほぼ普通である。近位では断面輪郭が特異で、前内側面には大結節稜、小結節稜、結節間溝が共に骨隆起する。大胸筋の停止は強い粗な凸稜であるが、大円筋の停止はアーチングしている。三角筋粗面は明瞭な前稜と後外側稜であるが、隆起は弱い。上腕骨は西日本縄文後期男性のそれよりも細い。上腕骨は筋骨逞しいが、上腕は細く華奢である。船倉貝塚縄文前期男性上腕骨は僅か2例に過ぎないが、2例中のすべてに大結節稜、小結節稜、結節間溝に股がる骨隆起が形成されている。大結節稜、小結節稜、結節間溝に股がる骨隆起を船倉貝塚縄文前期男性上腕骨の特長であると言うことは出来ないが、船倉貝塚縄文前期男性は上腕をしばしば内転・内外旋させる必要のある状況にあったことは確かである。

3号男性は前腕では桡骨と尺骨が良好な状態で残る。桡骨では外弯性が明瞭である。尺骨では近位の後弯性と遠位の内弯性がほぼ普通である。桡骨粗面は強い隆起で、また近位でも断面輪郭が特異で、長母指屈筋と長母指外転筋の起始が共に凹面である。後面では長母指外転筋と短母指伸筋の起始境界が、また走行痕が明瞭である。尺骨粗面は綫長の三角形の陥凹で、回外筋稜も強く鋭い。中間位では断面輪郭が左右で異なり、左側では通常の三角形であるが、右側は特異な『栗の実』状である。深指屈筋の起始は左側ではほぼ平坦であるが、右側は狭い凸である。後面では中間稜が近位側の1/4に始まり、遠位端まで明瞭である。後外側部では長母指外転筋、長母指伸筋、示指伸筋の起始境界が明瞭である。長母指外転筋の起始は広い指状圧痕で、長母指伸筋の起始は深い指状圧痕で、また示指伸筋の起始も溝状である。桡骨と尺骨は西日本縄文後期男性のそれよりも細い。前腕骨は筋骨逞しく、また前腕は華奢であるが、右尺骨には極端な機械的なストレスが掛けられていたようである。

3号男性は下肢では大腿骨が良好な状態で残る。大腿骨はほぼ真っ直ぐに伸びるが、内捻転性と前弯性は共に強い。近位では断面輪郭が左右共に梢円形であるが、左側では過扁平型(X-75)に、また右側は中型(85-100)に分類された。外側面の張り出しは左右共に強いが、左側では前面が軽く陥凹し、右側では粗線外側唇が強い稜である。大殿筋粗面は溝状ではないが、粗線外側唇が強い稜があるので、巾広い。粗線中間面は巾広く、平坦である。遠位では断面輪郭が前後に長い『团栗の実』状で、また左右共に厚型(100-X)である。後内側面は左側では平坦であるが、右側は凹である。後外側面は左右共に凹である。粗線は左側では狭く、また中間面も凸であるが、右側では内側唇と外側唇が強い稜で、また中間面は凹である。大腿骨は西日本縄文後期男性の太さに近いが、左右で異なる。大腿骨は筋骨逞しく見えるが、右側にはより強い機械的なストレスが掛けられていたようである。船倉貝塚縄文前期大腿骨は僅か3例に過ぎないが、3例中のすべてに大腿骨近位の扁平性と中間位または遠位の『团栗の実』状構造が形成されている。大腿骨近位の扁平性と中間位または遠位の『团栗の実』状構造は津雲貝塚縄文後期人骨の大きな特長の一つであるので、縄文時代の前期にそれらの構造は既に確立されていたと思われる。

3号男性は下腿では脛骨と腓骨が良好な状態で残る。脛骨はほぼ真っ直ぐに伸び、また前弯性も普通である。近位では断面輪郭が内外に扁平な三角形であるが、左右共に中型(63-70)に分類された。前外側面は強い褶曲であるが、後面は凸である。ヒラメ筋線は左側では強い凸稜であるが、右側で

は線状である。垂直稜は左側では線状であるが、右側は銳稜である。腓骨は中間位では断面輪郭が特異で、左右共にはほぼL字状である。内側面は非常に狭く内側に傾斜し、後内側部は深い凹面で、外側面は強い褶曲である。後外側部はほぼ平坦である。近位ではヒラメ筋の起始線が左側のみであるが、アンカリングしている。脛骨と腓骨は西日本縄文後期男性のそれらよりも細い。下腿骨は筋骨逞しいが、下腿は細く華奢である。船倉貝塚縄文前期下腿骨は僅か2例に過ぎないが、2例中のすべてに脛骨近位の内外に扁平な菱形構造が見られている。脛骨近位の内外に扁平な菱形構造は津雲貝塚縄文後期人骨の大きな特長の一つであるので、縄文時代の前期にその構造は既に確立されていたと思われる。同時に、船倉貝塚縄文前期人骨は上肢と下肢を酷使する必要のある状況にあったことは確かである。

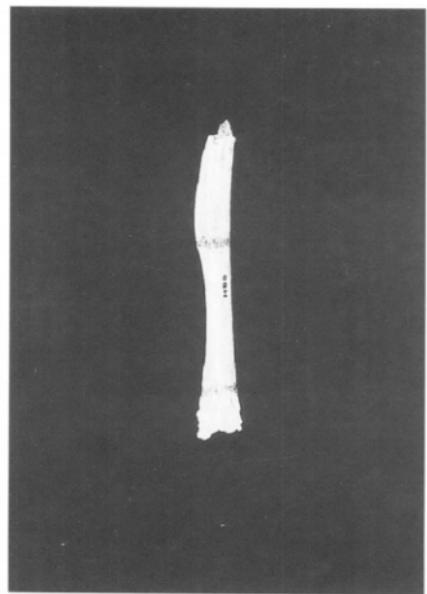
最後に、本資料を観察調査する機会を与えて頂いた倉敷市教育委員会埋蔵文化財センターの福本明、小野雅明先生に感謝の意を表したい。なお、この報告書を記載する際し、参照した参考文献は形質人類学関係の諸本にはどこでも多用されているので、割愛した。

註(1) 3基の土壙墓の新旧関係については、発掘調査の時点で3号・2号・1号の順に構築されたという認識があったが、1号土壙墓と2号土壙墓に関しては、土層断面の再検討の結果、順序を明確にすることは困難であるという結論に達した。3号土壙墓については、1号・2号土壙墓に先行するとの見解に変更はない。

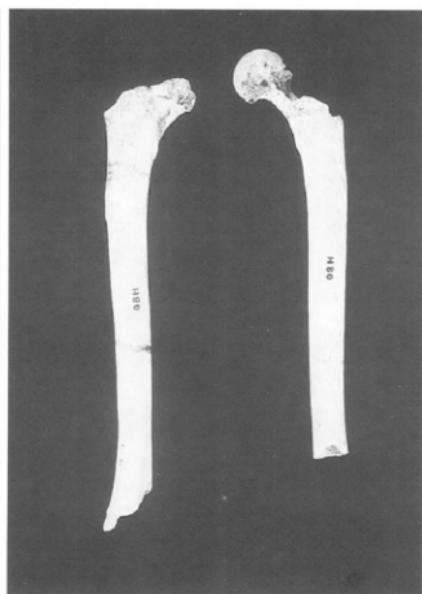
(小野)



1 a



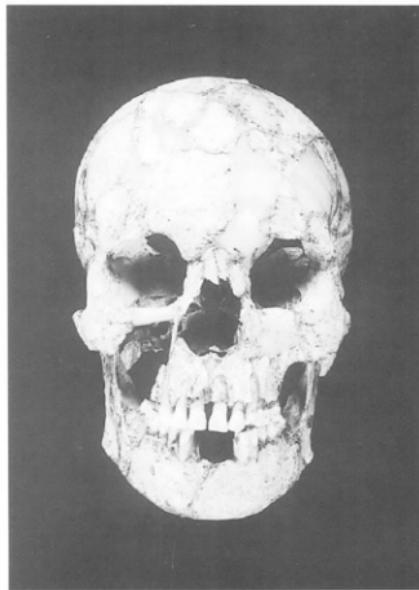
1 b



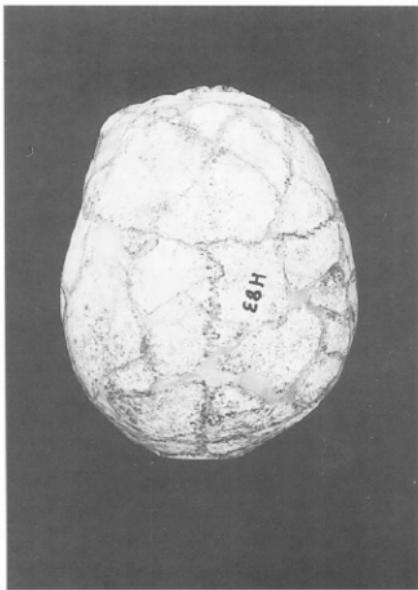
1 c



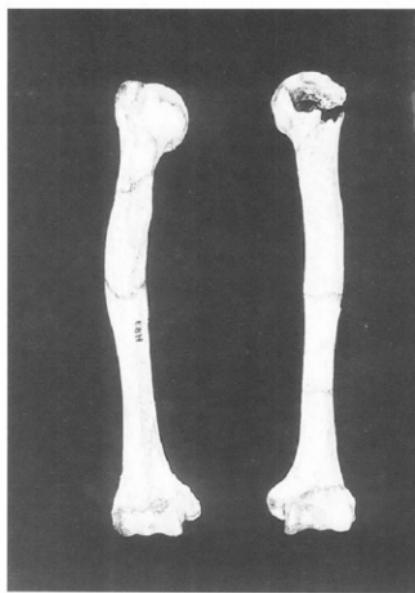
2 a



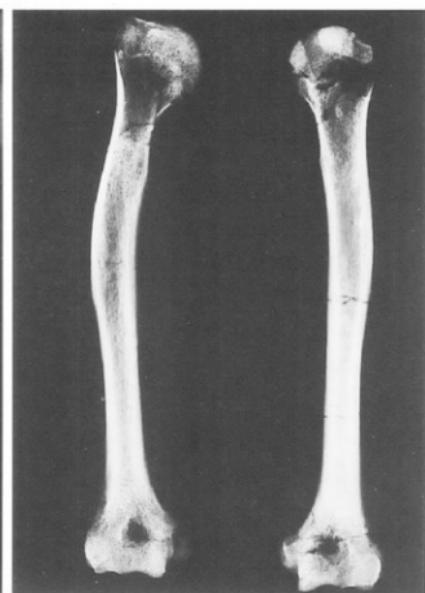
2 b



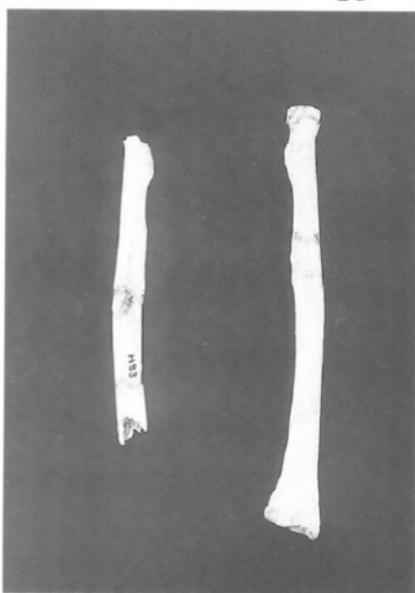
2 c



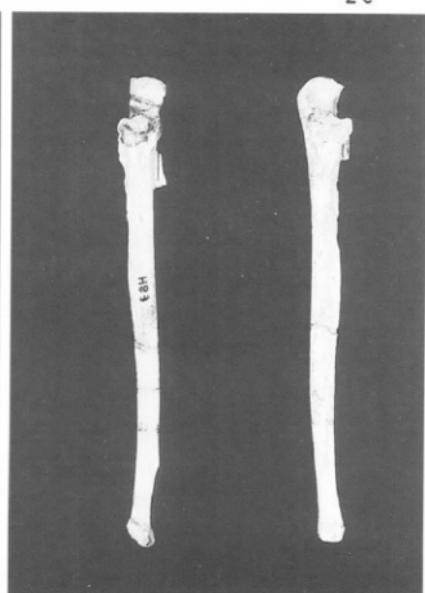
2 d



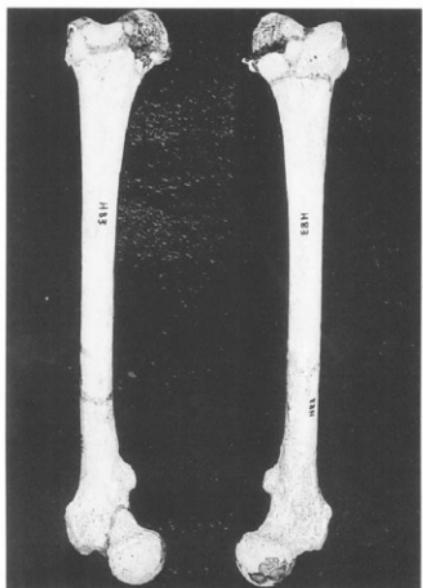
2 e



2 f



2 g



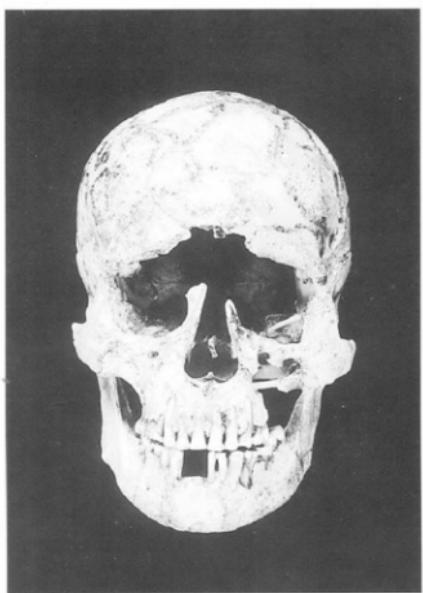
2 h



2 i



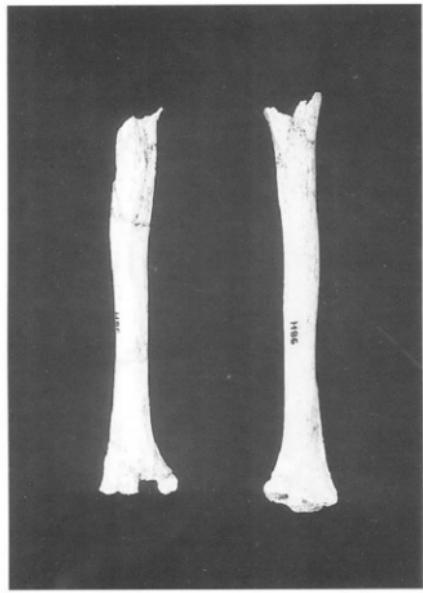
3 a



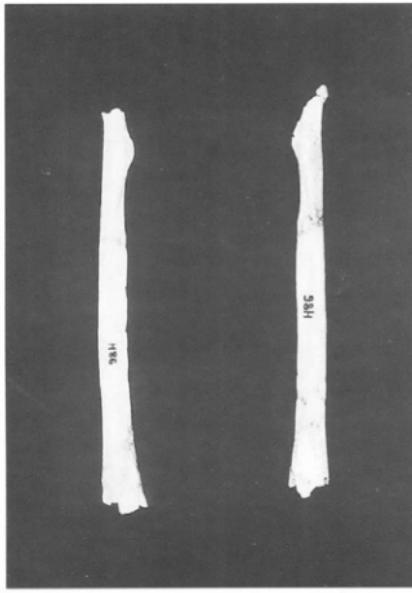
3 b



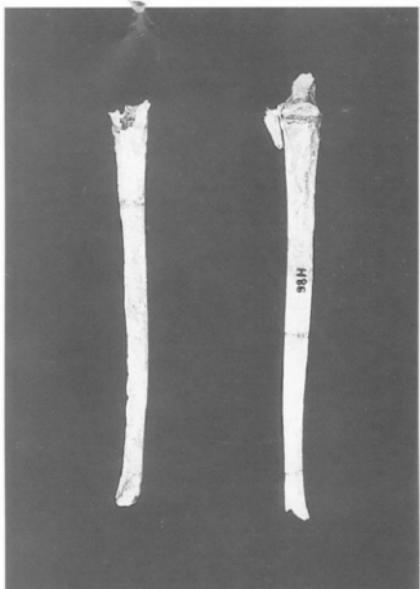
3 c



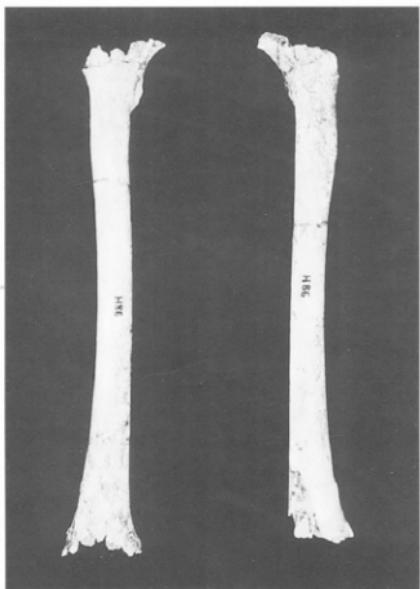
3 d



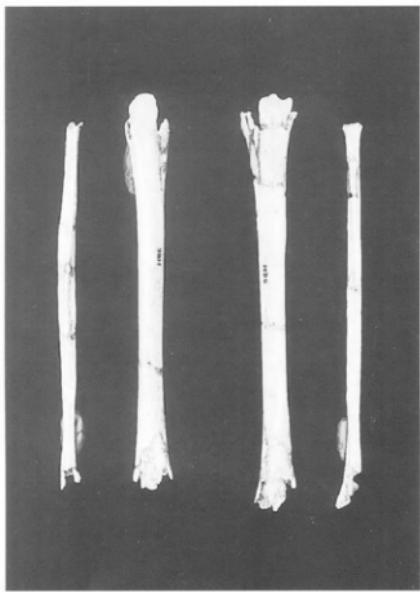
3 e



3 f



3 g



3 h

付論2

倉敷市船倉貝塚出土の節足、脊椎動物遺体

早稲田大学考古学資料室

金子 浩昌

はじめに

船倉貝塚は、平成3(1991)年、倉敷市街幹線道路の整備工事の際に新たに発見された縄文時代の貝塚である。同工事に伴い発掘調査が行われ、併せて動物遺体についても採集、検出が試みられ、多くの資料が得られた。岡山県下の遺跡出土の動物遺体の調査をおこなっていた筆者は、この資料を調査する機会をもち、報告することとなった。この間にあって倉敷埋蔵文化財センターの福本明氏、小野雅明氏には大変お世話になり、報告書作成にも協力いただいた。厚く御礼申し上げる次第である。

今回報告する資料は、①貝層発掘中に取り上げられた縄文時代前期から後期の大型獣を中心とした資料。②前期の土壌墓から出土した資料。③主に前期の遺物を出土した貝層(Jグリッド)を水洗選別し、検出された資料である。

I. 動物遺体種名表

節足動物門 Phylum ARTHROPODA		
甲殻綱 Class CRUSTACEA		
十脚目短尾類(カニ類) Decapoda Brachyura		
属・種不明 <i>Gen. et sp. indet.</i>		
脊椎動物門 Phylum VERTEBRATE		
軟骨魚綱 Class CHONDRICHTHYES		
サメ目 Order Lamniformes		
メジロザメ科 Family Charcharhinidae		
科不明 Family indet.		
エイ目 Order Rajiformes		
トビエイ科 Family Myliobatidae		
トビエイ Myliobatis tobjiei		
マグラトビエイ <i>Aetobatus narinari</i>		
属・種不明 <i>Gen. et sp. indet.</i>		
硬骨魚綱 Class OSTEICHTHYES		
ニシン目 Order Clupeiformes		
ニシン科 Family Clupeidae		
ヒラ <i>Hilsha elongata</i>		
スズキ目 Order Perciformes		
ボラ科 Family Mugilidae		
ボラ <i>Mugil cephalus</i>		
カマス科 Family Sphyraenidae		
属・種不明 <i>Gen. et sp. indet.</i>		
スズキ科 Family Percichthyidae		
スズキ <i>Lateolabrax japonicus</i>		
ダイ科 Family Sparidae		
マダイ <i>Pagrus major</i>		
クロダイ <i>Acanthopagrus schlegeli</i>		
属・種不明 <i>Gen. et sp. indet.</i>		
ハタ科 Family Serranidae		
属・種不明 <i>Gen. et sp. indet.</i>		
二ペ科 Family Sciaenidae		
二ペ <i>Nibea mitsukurii</i>		
カレイ目 Order Pleuronectiformes		
ヒラメ科 Family Bothidae		
ヒラメ <i>Paralichthys olivaceus</i>		
フグ目 Order Tetraodontiformes		
フグ科 Family Tetraodontidae		
属・種不明 <i>Gen. et sp. indet.</i>		
カワハギ科 Family Monacanthidae		
属・種不明 <i>Gen. et sp. indet.</i>		
両生綱 Class AMPHIBIA		
無尾目 Order Anura		
科不明 Family indet.		
爬虫綱 Class REPTILIA		
カメ目 Order Testudines		
科不明 Family indet.		
鳥 綱 Class AVES		
目不明 Order indet.		
哺乳綱 Class MAMMALIA		
齧歯目 Order Rodentia		
ネズミ科 Family Muridae		
属・種不明 <i>Gen. et sp. indet.</i>		
食肉目 Order Carnivora		
イヌ科 Family Canidae		
イヌ <i>Canis familiaris</i>		
タヌキ <i>Nyctereutes procyonoides</i>		
イタチ科 Family Mustelidae		
アナグマ <i>Meles meles</i>		
偶蹄目 Order Artiodactyla		
イノシシ科 Family Suidae		
イノシシ <i>Sus scrofa</i>		
シカ科 Family Cervidae		
二ホンジカ <i>Cervus nippon</i>		
真猿亜目 Suborder Anthropoidea		
オナガザル科 Family Cercopithecidae		
ニホンザル <i>Macaca fuscata</i>		

II. 動物遺体について

1. 節足動物

カニ類

鉗脚の破片のみが出土。

2. 脊椎動物

a. 魚類

サメ類

メジロザメ科の椎体

C4/6.4～6.5で椎体1点が出土。椎体径34.8、椎体長15.3。これには特別の加工はみられなかつた。

トビエイ

長い六角形の歯板が出土している。長径が16.5、13.0、11.0である。大きさが異なるので、別個体であろう。トビエイの歯板は、多数が並んで一つの頸になるが、原形を保って出土することはほとんどない。さほど硬くないので食べられてしまうのかもしれない。出土は多くないのが普通である。

マダラトビエイ

上下の歯板が出土している。検出された数は5点程度で少なかった。トビエイ類の歯板は長方形の板が多数板状に連なって上下の頸骨内に作られているので、魚一個体でも多数があったはずである。ただ、個々の歯板は、脆い骨質のために破損し易く、発掘時に採集することが難しくなることが予想される。出土した歯板には完存する標本はなかったが、一個の歯板の幅は40.0位と推定される。J9/5.4～5.5出土の上下の歯板は、ほぼ同程度の大きさに復元されるので、同一個体のものであった可能性もある。この歯板の大きさから推定される魚体の大きさは、幅60～70cmになるのではないかと思われる。

その他のエイ椎体

エイ類の椎体は多数検出されているが、そのうち椎体径12.0～14.2、椎体長7.0前後の大きさになる標本がある。上記したエイ類歯板をもつ個体よりもはるかに大きい個体の椎体である。この中には、トビエイ類の大型個体(体幅1.2mになるような)の椎体も考えられるが、そうした歯板は検出されていないので、イトマキエイ属が考えられるかもしれない。

硬骨魚類

スズキ

歯骨1点。

ハタ類

前上頸骨1点。

クロダイ

出土した標本の数は特に多くないが、別の魚と比べれば頸骨が多く残されていた。しかし、ほと

んどの頸骨は破損し、原形を残す標本はなかった。一般に、タイ類の頸骨は骨質が厚く、完存した形で出土することが多い。本遺跡ではなぜこれほど破損しているのか、疑問になる点の一つである。そのために頸骨の大きさを確認するのが難しいが、全長20.0前後が多かったのではないかと思われる。遊離したタイ類の歯が多数あったが、これもクロダイのものであつただろう。

マダイ

1号土壙墓の上層から歯骨を1点得ているのみである。歯骨全長50.0位になる。

ニベ

耳石が3点ある。周囲が破損して原形を止めないが、長径10数mmになるのであろう。

ボラ

椎体3点。

カマス類

歯2点：やや扁平で、湾曲した細く短い歯。

ヒラメ

歯1点：ヒラメ特有の細長い歯である。

フグ類

前上頸骨3点、歯骨1点。大型の前上頸骨全長40.0、小型のは10.0。丈夫な骨質をもつ頸骨故に保存されたことも考えられるが、フグ類を食用にする機会が多かったこと也有る。

カワハギ類

背鰭第1棘：尖端を欠損する。全長30.0前後。

b. 両生類

カエル類

四肢骨1点、寛骨1点を検出したのみである。小型の種類である。

c. 爬虫類

カメ類

肋骨板片を僅かに検出しているのみである。

d. 鳥類

骨片があつたのみである。

e. 哺乳類

イヌ

前期の1号土壙墓から上腕骨1点があり、この地域の前期のイヌの確かな証拠として注目される。ただ、不完全な上腕骨遠位骨端の小片であるので、大きさなどを知ることはできないが、おそらく小型犬の大きさと思われる。

タヌキ

中型獣ではタヌキが多かった。C1、C2のほぼ同じ深さのところで歯牙、四肢骨片、J4、J6で歯牙と四肢骨片があり、1号土壙墓中にもあった。J4/5.1～5.2出土の左M1の歯冠長12.4。他のM1は

破片であった。

イノシシ

大型獣としてはイノシシの遺骸が最も多く出土している。遺骸のなかで、歯牙、頸骨類は、1号土壙墓からの出土が主体であった。歯牙の大きさは次のとおりである。

B4/6.4～6.5出土

右側頭頂骨片：縫合未骨化の若い個体。

1号土壙墓下層出土

右上頸骨： M^2 歯冠長×歯冠幅 21.1×18.5 、 $M^3?$ $\times 21.2$

右下頸骨 (dm_4 ～ M_2)

歯冠長×歯冠幅

dm_4 19.4×9.3

M_1 18.0×11.4

M_2 22.9×14.8

右下頸犬歯：縦に割っている。幅22.0

Dグリッド貝層出土

右側下頸骨 (P_4 ～ M_3)

歯冠長×歯冠幅

P_4 15.8×10.2

M_1 17.4×11.0

M_2 21.1×14.1

M_3 35.4×16.4

右側頬骨片1：幅38.0、厚さ15.0、大きな頭蓋であったことを思わせる。

左側第3中手骨：近位骨端のみを残す。近位骨端幅23.0

末節骨：足底面長32.0

L6/5.2～5.3出土

右側上腕骨：遠位骨端幅48.0±

C1/6.6～6.7出土

左側大腿骨：近位骨端幅60.0

ニホンジカ

C7/6.8～6.9出土

鹿角：切断面をもつ角幹片がある。叩き切りである。

北調査区貝層出土

鹿角：角座部分、落角、枝、幹部折れる。

C8/6.6～6.7出土

左側M:

D5/6.4～6.5出土

右側M³：未咬耗歯

四肢骨

A7/6.6～6.7出土

左側大腿骨：骨体、両端に打ち割りと横位の切痕。骨体幅21.0

C14グリッド貝層

右側大腿骨：骨体のみ。骨体幅23.0

C17/6.7～6.8出土

右側脛骨：近位部、骨端外側に横位に付く短い切痕。骨体部端は打ち割り。近位骨端幅58.3

Cグリッド貝層出土

右側距骨：38.8×24.2、被熱で焦げ痕。

D1/6.5～6.6出土

右側中足骨：近位部、縦に割る。

1号土壌墓下層出土

右側中足骨：骨体～遠位骨端を残す。縦に割る。遠位骨端に横位の切痕。

J12/5.2～5.3出土

右側踵骨：遠位骨端を残すのみの破片であるが、距骨との関節面横径36.7、この踵骨の全長100.0を少し越える大きさであろう。

まとめにかえて

1. 船倉貝塚の哺乳類

本遺跡の哺乳類遺骸は、ネズミ類、タヌキ、イヌ、アナグマ、イノシシ、ニホンジカに限られ、しかも量的には中小獣ではタヌキが、大型獣ではイノシシが多かった。この地域の縄文前期～後期の貝塚の獣類相を知る貴重な資料であったと思われる。イノシシでは、若・成獣の個体があり、成獣では大型の個体が捕獲されていた。その大きさは、東日本の石器時代遺跡から出土する個体とも変わらないもので、この時代には、本州全域にこの程度の大きさの個体が生息していたのである。イノシシに比べると、シカの遺骸の検出はごく少なく、捕獲の少なかったことを推測させる。旧児島湾岸にある前期～中期の大橋貝塚、後期の矢部貝塚でも同じ傾向をみた。

ただ、本遺跡でのイノシシ、シカの全体的な量は少ないものであった。例えば、貝塚がはじまつたのがほぼ同時期と考えられている磯の森貝塚の出土資料などと比べると、その少ないことが目立つ。これが遺跡による違いとすれば、その理由が問題となってくるであろう。この地域での動物遺体の在り方の調査例が少ないので、今は筆者の気づいた点を述べるに止めたい。なお、中小獣ではタヌキ、アナグマなどの遺骸は、イノシシ、シカとの比率からみるとむしろ多いかもしれない。これも本遺跡での特徴といえよう。

2. 船倉貝塚の魚類

魚類遺体については、上記③の資料に限られているためか中型魚類の遺体の検出は多くなかったと思う。しかし、クロダイを主体としたと考えられる。マダイはさらに少なく、内湾的な性格の強い漁労であった。この傾向は、広くこの地域一帯の石器時代漁労についていえることである。また、エイ類の多かったことも湾奥での漁労を推測させる。特に大型のエイ類のあることは特徴的であった。さらに、イワシ類の遺骸も検出され、こうした資源の多かったことが推測されたのである。

さらに、この地域の縄文遺跡での動物遺体の在り方を比較論考する事が今後の課題となろう。

付論2 倉敷市鶴倉日塚出土の節足、脊椎動物遺体

魚類の出土量(1)

魚類の出土量(2)

出土地点	サメ類	エイ類	メジロサメ科	カマス類	ボラ類	マラトリビエイ	ヒラヒメウツボ	スズキ	ハタ類	ニベ	タケ	タ	ク	ロ	ダイ	ダイ	ク	ロ	タ	メ	ラ	ハ	ギ	類	カ	ラ	メ	不	明	その他、備考	
J 5 / 5.1~5.2																															2.59
5.0~5.1																															0.58
J 6 / 5.5~5.6																															0.18
5.4~5.5																															0.34
5.3~5.4																															2.14
5.2~5.3																															0.86
5.1~5.2																															0.08
5.0~5.1																															0.61
J 7 / 5.5~5.55																															0.09
5.4~5.5																															0.09
5.3~5.4																															0.08
5.2~5.3																															0.22
5.1~5.2																															0.12
5.0~5.1																															0.09
J 8 / 5.6~5.75																															0.04
5.5~5.6																															0.04
5.4~5.5																															0.04
5.3~5.4																															0.33
J 9 / 5.6~5.7																															0.12
5.5~5.6																															0.09
5.4~5.5																															0.04
5.3~5.4																															0.04
J 10 / 5.6~5.66																															0.04
5.5~5.6																															0.30
5.4~5.5																															0.46
5.3~5.4																															0.03
5.2~5.3																															0.13

魚類の出土量(3)

出土地点	サメ類 メジロザメ科	エイ類 ヒラエイ科	ヒラマス類 ヒラエイ科	スズキ ヒラエイ科	ハタ類 ヒラエイ科	ニベ ヒラエイ科	タケノコ ヒラエイ科	マダイ ヒラエイ科	クロダイ ヒラエイ科	ヒラメ ヒラエイ科		フグ ヒラエイ科		不明 ヒラエイ科		その他・備考			
										前 頭 骨	上 顎 骨	前 頭 骨	上 顎 骨	前 頭 骨	上 顎 骨	前 頭 骨	上 顎 骨	前 頭 骨	上 顎 骨
J10 / 5.1~5.2										1									0.05
J11 / 5.6~5.63																			
5.4~5.5																			
5.3~5.4										12									0.31
5.2~5.3										22									0.41
5.1~5.2											1/								
5.0~5.1										3									
J12 / 5.5~5.6																			
5.4~5.5											3								
5.3~5.4											12								
5.2~5.3											7								0.22
5.1~5.2											11								0.09
5.0~5.1											1								エイ椎体の発育1
J13 / 5.5~5.8												14							0.07
5.4~5.5											1								
5.3~5.4											1								
5.2~5.3											19								0.20
5.1~5.2											1								0.39
5.0~5.1											17								0.24
4.95~5.0											1								1/1
J14 / 5.4~5.5											19								0.10
5.3~5.4											29								0.01
5.2~5.3											1								0.04
5.1~5.2											17								0.02
5.0~5.1											1								0.43
C1 / 6.9~6.96											16								0.30
6.8~6.9											2								2.50
6.7~6.8											1								9.66
											1								1/1
											27								

付論2 倉敷市船倉貝塚出土の節足、脊椎動物遺体

魚類の出土量(4)

動物遺体の出土量(1)

出土地点	カニ類	カエル類	カメ類	トリ類	ネズミ類	タヌキ	アグマ	イヌ	イノシシ	シカ	サル	断骨片(6)	その他・備考
J 1 / 5.6～5.66 5.5～5.6													
5.4～5.5													
5.3～5.4													
5.2～5.3													
5.1～5.2													
5.0～5.1													
J 2 / 5.5～5.59 5.4～5.5 5.3～5.4 5.2～5.3 5.1～5.2 5.0～5.1												0.60 0.78	
J 3 / 5.5～5.64 5.4～5.5 5.3～5.4 5.2～5.3 5.12～5.12 J 4 / 5.5～5.64 5.5～5.6 5.4～5.5 5.3～5.4 5.2～5.3 5.1～5.2												0.66 0.31 0.25 0.12 3.74	5.33
J 5 / 5.5～5.62 5.4～5.5 5.3～5.4 5.2～5.3 5.1～5.2 5.0～5.1												6.38 0.54	
J 6 / 5.5～5.6 5.4～5.5 5.3～5.4 5.2～5.3 5.1～5.2 5.0～5.1												20.64 2.19	タヌキ LP ₁ ・椎骨 1 前臼齒

付論2 倉敷市船倉貝塚出土の節足、脊椎動物遺体

動物遺体の出土量(2)

出土地点	カニ類	カエル類	カメ類	トリ類	ネズミ類	タヌキ	アダマ	イヌ	イノシシ	シカ	サル	鰐骨片(2)	その他・備考
J7 / 5.5~5.55													
5.4~5.5													
5.3~5.4													
5.2~5.3													
5.1~5.2													
5.0~5.1													
J8 / 5.6~5.75				椎体1									
5.5~5.6													
5.4~5.5													
5.3~5.4													
J9 / 5.6~5.7				不明5									
6.5~5.6													
6.4~5.5													
5.3~5.4													
5.23~5.3													
J10 / 5.6~5.66													
5.5~5.6													
5.4~5.5													
5.3~5.4													
5.2~5.3													
5.1~5.2													
J11 / 5.6~5.63													
5.4~5.5													
5.3~5.4													
5.2~5.3													
5.1~5.2													
J12 / 5.5~5.6													
5.4~5.5													
5.3~5.4													
5.2~5.3													
5.1~5.2													
J13 / 5.5~5.58													
5.4~5.5													
5.3~5.4													

動物遺体の出土量(3)

出土地點	カニ類	カエル類	カメ類	トリ類	ネズミ類	タヌキ	アグマ	イヌ	イノシシ	シカ	サル	鹿骨片(6)	その他・備考
J 13 / 5.2~5.3													
5.1~5.2	巣卵 2												
5.0~5.1							L 1:						
4.95~5.0													
J 14 / 5.4~5.5													
5.3~5.4													
5.2~5.3													
5.1~5.2													
5.0~5.1	肢骨 1												
C 1 / 6.9~6.96													
6.8~6.9													
6.7~6.8													
6.6~6.7													
6.5~6.6	肢骨 5												
6.4~6.5													
6.3~6.4													
6.19~6.3													
C 2 / 6.9~6.96													
6.8~6.9													
6.7~6.8	切歛 2												
6.6~6.7													
6.5~6.6							L 1:						
6.4~6.5							L M ₁						
6.3~6.4													
6.16~6.3													
C 3 / 6.9~6.96													
6.8~6.9													
6.7~6.8													
6.6~6.7													
6.5~6.6													
6.4~6.5													
6.3~6.4													
6.2~6.3													
6.1~6.2													
6.0~6.1													

付論 2 倉敷市船倉貝塚出土の節足・脊椎動物遺体

動物遺体の出土量(4)

出土地点	カニ類	カエル類	カムツ類	トリ類	ネズミ類	タヌキ	アグモ	イヌ	イノシシ	シカ	サル	鰐骨片(?)	その他・備考
A 7 / 6.6~6.7									人頭骨				发掘調査中に取り上げ ^a
A 7 / 6.5~6.6									L.大頭骨				"
B 3 / 6.4~6.5									R.大頭骨				"
B 4 / 6.4~6.5									R.頭頂骨				"
C 7 / 6.7~6.8									角片(切断片) 1				"
C 8 / 6.6~6.7									M.1				"
C 11 / 6.6~6.7									下頸骨(下顎態)				"
C 13 / 6.8~6.92									R.大頭骨				"
C 14 / 6.7~6.8									R.頭骨				"
C 17 / 6.7~6.8									尾骨				"
CK骨													"
D 1 / 6.5~6.6									R.側頭骨				"
D 2 / 6.5~6.6									R. P ₄ ・M ₁ ・M ₂ ・M ₃				"
D 5 / 6.4~6.5									R. M ^b				"
DK尾十具骨									R. P ₄ ・M ₁ ・M ₂ ・M ₃				"
E 2 / 6.6~6.7									角片 1				"
北礪者区貝塚									R. 齒角 1 (角座部)				"
I 39 / 5.4~5.5									角枝 1				"
L 6 / 5.2~5.3									R. 上腕骨				"
L 8 / 5.2~5.3													シカ? 上腕骨
土壙塗 1 上層	鮑脚 13								I R. P ^c R. M ₁ 基節骨 末節骨	齒片・枝室・肋骨片	角片(加工痕あり)	43.22	
土壙塗 1 下層													上顎骨: R. N ^d 2~3 下顎骨: L. P ^e ~(M ₁) 逆離輪: L. M ₁ ・R. d m ₄ R. M ₁ ・R. M ₂ R. (M ₃)
土壙塗 2	鮑脚 16								R. 上腕骨	上顎臼齒・R. F. 頭大歯 L. 頭頂骨・R. 頭骨 L. 齒骨・R. 齒骨 L. 第3中手骨・L. 末節骨			管状垂物(大型トリ頭部 骨製) 2

イノシシ計測表

イノシシ計測表	
	(Bd: 遠位端幅 Bo: 近位端幅)
出土地点	上腕骨
L6/5.2~5.3	Bd 48.00 ± (R)

イノシシ歯牙計測表

イノシシ歯牙計測表 (上段: 齒冠長 下段: 齒冠幅)									
出土地点	資料名	齒列長	M ²	M ³	d m ₄	P ₄	M ₁	M ₂	M ₃
C3/6.1~6.2	左下顎齒							?	12.68
Dグリッド 混貝土層	右下顎齒 (同一個体か?)				15.81 10.15	17.42 11.03	21.12 14.06	35.41 16.36	
	右上顎骨片		21.14 18.51	?					
	左下顎骨片	P ₄ ~(M ₃) : 84.79			21.15				
1号土塙墓下層	右下顎齒 (同一個体か?)	M ₁ ~(M ₃) : 71.68 d m ₄ ~M ₂ : 58.26				14.62 9.82	16.92 12.26	21.90 15.43	35.09 35.09
	左下顎齒				19.39 9.31	18.04 11.44	22.87 14.83	22.87 13.48	
						?	14.91		

シカ計測表

二ホンシカ計測表 (Bd: 遠位端幅 Bo: 近位端幅)				
出土地点	上腕骨	橈骨	脛骨	距骨
J12/5.2~5.3				Bd 36.72(L)
C17/6.7~6.8			Bp 58.30(R)	
Cグリッド貝層				B 24.24

出土遺物観察(一覧)表

1. 土器観察表

番号	出土地点 区 遺構・層位	時期	部位	文様などの特徴	胎土中の砂粒	色調 (外面/内面)
1	C-D 1号土壤墓・下層	前期IV	口縁部	外表面の肥厚帯に繩文L R、口縁部に竹管文	1mm以下	にぶい橙
2	C-D 1号土壤墓・下層	前期IV	口縁部	外表面の肥厚帯に繩文L R、口縁部に竹管文	1mm以下	にぶい橙
3	C-D 1号土壤墓・下層	前期IV	口縁部	外表面の肥厚帯に繩文L R、口縁部に竹管文	1mm以下	にぶい橙
4	C-D 1号土壤墓・下層	前期IV	口縁部	外表面の肥厚帯に繩文L R、口縁部に竹管文	1mm以下	にぶい橙
5	C-D 1号土壤墓・下層	前期IV	口縁部	繩文RL	1mm以下	にぶい橙
6	C-D 1号土壤墓・下層	前期IV	口縁部	繩文RL	1mm以下	にぶい橙
7	C-D 1号土壤墓・下層	前期IV	胴 部	繩文RL、貼り付け突带上に押引き竹管文	1mm以下	橙～にぶい褐
8	C-D 1号土壤墓・下層	前期IV	胴 部	繩文LR、貼り付け突带上に押引き竹管文	1mm以下	黒褐色～にぶい橙
9	C-D 1号土壤墓・下層	前期IV	胴 部	繩文LR、貼り付け突带上に押引き竹管文	1mm以下	にぶい褐
10	C-D 1号土壤墓・下層	前期IV	胴 部	繩文LR、貼り付け突带上に押引き竹管文	1mm以下	にぶい褐
11	C-D 1号土壤墓・下層	前期IV	2/3残存	繩文RL	1mm以下	にぶい橙～黒褐色
12	C-D 1号土壤墓・下層	前期IV	胴 部	繩文LR	1~2 mm	灰黄褐色
13	C-D 1号土壤墓・下層	前期IV	胴部下半	繩文RL	1mm以下	にぶい黄褐色～褐灰色
14	C-D 1号土壤墓・下層	前期IV	胴部下半	繩文RL	1mm以下	にぶい黄褐色～黒褐色
15	C-D 1号土壤墓・下層	前期IV	口縁部	無文、内面は平滑	1mm以下	にぶい黄褐色
16	C-D 1号土壤墓・下層	前期IV	口縁部	無文、器表に指頭様の押圧	1mm以下	灰黄褐色
17	C-D 1号土壤墓・上層	前期IV	口縁部	内面の肥厚帯に繩文L R、突带上に竹管文	1mm以下	にぶい橙～黒褐色
18	C-D 1号土壤墓・上層	前期IV	口縁部	内面の肥厚帯に繩文L R、突带上に竹管文	1mm以下	にぶい橙
19	C-D 1号土壤墓・上層	前期IV	口縁部	外表面の肥厚帯に繩文RL	1mm以下	にぶい橙
20	C-D 1号土壤墓・上層	前期IV	口縁部	繩文RL、内面に繩文帯	1mm以下	橙
21	C-D 1号土壤墓・上層	前期IV	口縁部	繩文RL、内面に繩文帯	1mm以下	にぶい橙
22	C-D 1号土壤墓・上層	前期IV	口縁部	繩文RL、内面に繩文帯	1mm以下	にぶい橙～褐灰色
23	C-D 1号土壤墓・上層	前期IV	口縁部	繩文RL、内面に繩文帯	1mm以下	灰黄褐色～褐灰色
24	C-D 1号土壤墓・上層	前期IV	胴 部	繩文RL、貼り付け突带上に押引き竹管文	1mm以下	灰黄褐色
25	C-D 1号土壤墓・上層	前期IV	胴 部	貼り付け突带上に押引き竹管文	1mm以下	にぶい橙
26	C-D 1号土壤墓・上層	前期IV	胴 部	貼り付け突带上に押引き竹管文	1mm以下	にぶい橙
27	C-D 1号土壤墓・上層	前期IV	胴 部	貼り付け突带上に押引き竹管文	1mm以下	にぶい橙～褐灰色
28	C-D 1号土壤墓・上層	前期IV	胴 部	貼り付け突带上に押引き竹管文	1mm以下	にぶい橙～褐灰色
29	C-D 1号土壤墓・上層	前期IV	胴 部	繩文RL	1mm以下	橙
30	C-D 1号土壤墓・上層	前期IV	口縁部	繩文RL、口縁は小さい波状となる	1mm以下	灰黄褐色
31	C-D 1号土壤墓・上層	前期IV	口縁部	口縁は小さい波状となる	1mm以下	にぶい黄褐色
32	C-D 1号土壤墓・上層	前期IV	口縁部	口縁端に割目	1mm以下	灰黄褐色
33	C-D 1号土壤墓・上層	前期IV	口縁部	竹管状工具による押引き刺突文	1mm以下	にぶい黄褐色
34	C-D 1号土壤墓・上層	前期IV	口縁部	器表に指頭様の押圧	1mm以下	橙
35	C-D 1号土壤墓・上層	前期IV	口縁部	無文	1mm以下	にぶい黄褐色～褐灰色
36	A-B 2号土壤墓	前期IV	胴 部	貼り付け突带上に押引き竹管文	1mm以下	にぶい橙～浅黃
37	A-B 2号土壤墓	前期IV	胴 部	繩文RL	1mm以下	明赤褐色～黒褐色
38	A-B 2号土壤墓	前期IV	胴 部	繩文RL	1mm以下	明赤褐色～黒褐色
39	A-B 2号土壤墓	前期IV	胴 部	繩文RL	1mm以下	明赤褐色～黒褐色
40	F 土壙1	前期IV	口縁部	外表面の肥厚帯に繩文RL、突带上に竹管文	1mm以下	にぶい赤褐色
41	F 土壙1	前期IV	胴 部	繩文RL	1mm以下	灰褐色～黒褐色
42	F 土壙1	前期IV	胴 部	繩文RL	1mm以下	にぶい橙
43	F 土壙1	前期IV	胴 部	繩文RL	1mm以下	にぶい黄褐色
44	K 淡褐色混磧土	早期?	口縁部	内外に二枚貝条痕、口縁端に貝殻压痕	1~2 mm	明黄褐色～暗灰褐色
45	D 茶褐色土	前期I	口縁部	内外に二枚貝条痕、口縁外表面を肥厚し刺突文	1~2 mm	にぶい橙
46	E 貝層	前期I	口縁部	内外に二枚貝条痕、口縁外表面を段状に肥厚	1~2 mm	灰黄褐色～褐灰色
47	C 貝層	前期I	口縁部	内外に二枚貝条痕、口縁外表面を段状に肥厚	1~2 mm	灰黄褐色
48	L 黄褐色土	前期I	胴 部	内外に二枚貝条痕	1~2 mm	にぶい黄褐色
49	I 黄褐色土	前期III	胴 部	竹管状工具による押引き刺突文	1mm以下	褐灰色
50	E-F 黄褐色土	前期IV	口縁部	内面の肥厚帯に繩文RL	1~2 mm	灰褐色
51	F 黄灰褐色土	前期IV	口縁部	内面の肥厚帯に繩文RL	1~2 mm	にぶい橙～褐灰色
52	F 黄灰褐色土	前期IV	胴 部	繩文RL	1~2 mm	にぶい黄褐色
53	E 黄灰褐色土	前期IV	胴 部	繩文RL	1~2 mm	灰黄褐色
54	F 黄灰褐色土	前期IV	底 部	繩文RL	1mm以下	にぶい橙

番号	出土地点 区 遺構・層位	時期	部位	文様などの特徴	胎土中の砂粒	色調 (内面/外面)
55 E	黄灰褐色土	前期IV	底部	縄文RL	1mm以下	にぶい橙
56 I	黄褐色土	中期I	口縁部	縄文RL、内面、口端に縄文	1mm以下	灰黄褐
57 E	暗褐色土	中期I	口縁部	縄文RL、内面に縄文	1mm以下	灰黄
58 E-F	黄灰褐色土	中期II	口縁部	突帯による施文	1~2mm	橙~灰
59 E	暗褐色土	後期I	口縁部	縄文RL、磨消縄文	1~2mm	にぶい褐~褐灰
60 E-F	暗褐色土	後期II	口縁部	縄文RL、3本沈線による磨消縄文	1~2mm	にぶい橙
61 F	黄茶褐色土	後期III	口縁部	垂下条線	1~2mm	灰黄
62 C	暗茶褐色土	後期IV	口縁部	縄文RL、口縁に沿って1条の沈線	1~2mm	灰黄褐
63 F	黄茶褐色土	後期IV	口縁部	口端に沈線、外面に縄文帯RL	2~3mm	にぶい黄褐
64 E	黄茶褐色土	後期IV	口縁部	外面をわずかに肥厚させ、縄文帯LR	1mm以下	にぶい黄褐
65 E	暗褐色土	後期IV	口縁部	外面をわずかに肥厚させるが、縄文を有しない	1mm以下	にぶい黄褐
66 F	黄茶褐色土	後期IV	口縁部~胴部	胴部と口縁内面に結合縄文RL	1mm以下	明褐~褐灰
67 E	黄茶褐色土	後期	縁部	内面ミガキ、外面は巻貝による調整のちナデ	1~2mm	にぶい黄褐~灰黄褐
68 F	黄茶褐色土	後期IV	底部	内外ともナデ	1mm以下	明褐~褐灰
69 L10	5.5~5.6	前期II	口縁部	区画線を伴う爪形文	1~2mm	にぶい橙~褐灰
70 J11	5.1~5.2	前期II	口縁部~胴部	区画線を伴う爪形文	1~2mm	にぶい橙~褐灰
71 L21	5.5~5.6	前期II	口縁部	区画線を伴う爪形文	1~2mm	にぶい橙~褐灰
72 J13	5.2~5.3	前期II	口縁部	区画線を伴う爪形文	1~2mm	にぶい橙~褐灰
73 北	貝層	前期IV	口縁部	連續爪形文	1mm以下	にぶい黄褐
74 L17	5.5~5.6	前期II	脚部	縄文LR	1~2mm	灰黄褐
75 L18	5.6~5.7	前期II	脚部	羽状縄文	1~2mm	灰黄褐
76 C18	6.3~6.4	前期III	口縁部	押引き刺突文	1~2mm	にぶい黄褐
77 I	貝層	前期III	口縁部	押引き刺突文	1mm以下	褐灰~灰黄褐
78 B3	6.3~6.4	前期IV	口縁部	縄文RL、貼り付け突帯上に押引き刺突文	1~2mm	橙
79 D18	6.3~6.4	前期IV	口縁部	縄文RL、貼り付け突帯上に押引き刺突文	1~2mm	橙
80 J6	5.3~5.4	前期IV	口縁部	縄文RL、低い貼り付け突帯上に刺目	1mm以下	褐灰
81 C24	6.5~6.6	前期IV	口縁部	縄文RL、内外面を肥厚し縄文帯	1~2mm	にぶい黄褐
82 B3	6.4~6.5	前期IV	口縁部	縄文RL、内面を肥厚し縄文帯	1~2mm	橙
83 B3	6.3~6.4	前期IV	口縁部	縄文RL、内面に縄文帯	1~2mm	橙~褐灰
84 B1	6.5~6.6	前期IV	口縁部	縄文RL、内面を肥厚し押圧	1mm以下	にぶい黄褐
85 B1	6.3~6.4	前期IV	脚部	縄文不明、貼り付け突帯上に押引き刺突文	1mm以下	にぶい黄褐
86 J12	5.3~5.4	前期IV	脚部	縄文RL、貼り付け突帯上に押引き刺突文	1mm以下	灰黄
87 I	貝層	前期IV	脚部	縄文不明、貼り付け突帯上に押引き刺突文	1mm以下	橙~黒褐
88 A6	6.7~6.8	中期I	口縁部	縄文RL、内面に縄文帯、外面に爪形文	1~2mm	明黄褐~橙
89 I17	5.6~5.7	中期I	口縁部	縄文RL、口端に割目、内面を肥厚させ縄文帯とし、外面に平行竹管文	1~2mm	にぶい黄褐
90 B2	6.3~6.4	中期I	口縁部	縄文RL、内面に縄文帯、外面に二枚貝压痕	1~2mm	にぶい黄褐
91 J12	5.5~5.6	中期I	脚部	内外面に縄文RL	1~2mm	にぶい褐~橙
92 J11	5.4~5.5	中期I	脚部	内外面に縄文RL、外面に爪形文を施文	1~2mm	にぶい褐~橙
93 C4	6.5~6.6	中期II	口縁部	突帯と平行竹管文	2~3mm	にぶい黄褐
94 D3	6.3~6.4	中期II	脚部	突帯と平行竹管文	1~2mm	にぶい黄褐
95 D3	6.3~6.4	中期II	脚部	突帯と平行竹管文	1~2mm	にぶい黄褐
96 D2	6.35~6.5	中期II	脚部	突帯と平行竹管文	1~2mm	にぶい黄褐
97 C	貝層	中期II	脚部	縄文LR、平行竹管文	2~3mm	にぶい黄褐
98 C1	6.19~6.3	中期II	脚部	縄文不明、平行竹管文	2~3mm	にぶい黄褐
99 C1	6.5~6.6	中期II	脚部	縄文LR、平行竹管文	2~3mm	にぶい黄褐
100 C5	6.4~6.5	中期II	脚部	縄文LR	2~3mm	にぶい黄褐
101 C9	6.3~6.4	中期III	口縁部	口縁に刺突文と縦位の沈線	2~3mm	灰黄
102 D20	6.3~6.4	中期III	脚部	太く浅い沈線文	2~3mm	にぶい黄褐~橙
103 D13	6.4~6.5	中期III	脚部	太く浅い沈線文	2~3mm	にぶい黄褐~橙
104 C16	6.4~6.5	中期III	脚~底部	縄文LR、太く浅い沈線文	2~3mm	にぶい黄褐~橙
105 F12	6.32	中期III	脚部	棒状工具による刺突文	2~3mm	にぶい黄褐~橙
106 J12	6.3~6.4	中期	底	縄文RL	2~3mm	灰黄褐
107 J11	5.4~5.5	中期	底	縄文LR、底面に縄の压痕	2~3mm	灰黄褐~橙
108 I6	5.4~5.5	後期I	口縁部	縄文RL、磨消縄文	1~2mm	橙
109 I18	5.6~5.7	後期I	口縁部	縄文RL、磨消縄文	1~2mm	橙
110 I27	5.6~5.7	後期I	口縁部	縄文RL、磨消縄文	1~2mm	黄褐
111 C20	6.6~6.7	後期I	口縁部	縄文RL、磨消縄文	1~2mm	暗灰黄~黒
112 C22	6.7~6.8	後期I	口縁部	縄文RL、磨消縄文	1~2mm	にぶい黄褐~黄灰

番号	出土地点 区	遺構・層位	時期	部位	文様などの特徴	胎土中の砂粒	色調 (外面/内面)
113	I9	5.4~5.5	後期I	口縁部	縄文Rし、磨消縄文	1mm以下	暗灰黄~黒
114	F	貝層	後期II	胴 部	縄文RL、2本沈線による磨消縄文	1~2mm	橙
115	F	貝層	後期II	胴 部	縄文Rし、3本沈線による磨消縄文	1~2mm	黄褐
116	C	貝層	後期II	胴 部	縄文Rし、3本沈線による磨消縄文	1~2mm	灰黄褐
117	D19	6.5~6.6	後期II	橋状把手	縄文RL	1~2mm	にぶい黄橙
118	C6	6.4~6.5	後期III	口縁部	縄文Rし、口縁外側を肥厚させ弧状文を描く	1~2mm	にぶい黄橙~黄灰
119	D4	6.5~6.6	後期III	口縁部	縄文RL、口縁外側を肥厚させ渦文を描く	2~3mm	にぶい黄褐
120	D2	6.4~6.5	後期III	口縁部	縄文Rし、口縁外側を肥厚させ縁帶文とする	1~2mm	暗灰黄
121	E3	6.7~6.8	後期III	口縁部	口縁内側を肥厚させ短沈線による文様を描く	2~3mm	灰黄褐~黄褐
122	A7	6.5~6.5	後期III	口縁部	口縁内側を肥厚させ縁帶文RLを施す	1~2mm	にぶい黄橙~橙
123	C8	6.5~6.5	後期III	口縁部	口縁内側を肥厚させ沈線文、縄文RLを施す	1~2mm	灰黄褐
124	C4	6.4~6.5	後期III	口縁部	口縁内側を肥厚させ沈線文、縄文RLを施す	1~2mm	灰黄褐
125	D1	6.4~6.5	後期III	口縫~胴部	口縫上端を拡張させ沈線文、胴部に垂下条線	1~2mm	黄褐
126	C13	6.6~6.7	後期III	胴 部	頸部と胴部の境に段、側面には垂下条線	1~2mm	灰黄褐
127	D17	6.4~6.5	後期III	橋状把手	内面は2本の平行沈線と短沈線で描かれる	1~2mm	橙~褐
128	D9	6.6~6.7	後期IV	口縁部	口縫に平行して2本の沈線、その間に縄文RL	1~2mm	にぶい黄橙~灰黄褐
129	D2	6.5~6.5	後期IV	1/3残存	口縁部と胴部に無節縄文LR、頸部は無文	1~2mm	にぶい黄橙~灰黄褐
130	A7	6.8~6.9	後期IV	口縁部	縄文RL、波状口縫	1~2mm	黑褐
131	A3	6.7~6.8	後期IV	口縁部	縄文LRの疑似羽状縄文、口縫に平行して沈線	1~2mm	にぶい橙~灰黄褐
132	C8	6.8~6.94	後期IV	口縁部	側面にループの付いた縄文RL、横位の平行沈線	1mm以下	にぶい橙~灰黄褐
133	C9	6.7~6.8	後期IV	胴 部	縄文RL、縄文との境に列点をめぐらす	1~2mm	灰黄褐
134	C8	6.5~6.5	後期IV	胴 部	縄文RL	1mm以下	にぶい黄橙
135	B4	6.7~6.8	後期IV	胴 部	縄文RL、頸部無文、胴部縄文	1~2mm	浅黄~灰灰
136	D9	6.5~6.5	後期IV	口縁部	縄文RL、内側に沈線をめぐらし内外に縄文帯	1~2mm	暗黄灰
137	D9	6.6~6.7	後期IV	口縁部	縄文LR、外面に縄文帯	1~2mm	橙~褐
138	C18	6.7~6.8	後期IV	口縁部	縄文RL、内側に沈線をめぐらし縄文帯	1mm以下	黄灰
139	C23	6.7~6.8	後期IV	口縁部	口縫部には縄文をもたない	2~3mm	にぶい黄橙
140	C	貝層	後期IV	口縫部	口縫部には縄文をもたない	2~3mm	にぶい黄橙~橙
141	A6	6.6~6.7	後期IV	口縫部	縄文RL、外面上に縄文帯	1mm以下	灰褐~灰
142	D	貝層	後期IV	口縫部	縄文LR、外面に縄文帯	1~2mm	褐灰~黒
143	C8	6.8~6.94	後期IV	口縫部	口縫内側に円形刺突孔、口端に浅い刻目	1mm以下	橙~黄褐
144	C6	6.7~6.8	後期IV	口縫部	口縫に2本の沈線を引き、刺突を加える	1mm以下	にぶい黄橙~褐灰
145	F8	6.4~6.5	後 期	口縫部	波頂部に線刺状の刻目	1~2mm	にぶい褐
146	C	貝層	後 期	口縫部	波頂部が水平	1mm以下	橙~にぶい黄橙
147	J4	5.5~5.6	後 期	口縫部	口端に棒状工具による刻目	1~2mm	暗灰黄
148	I15	5.4~5.5	後 期	口縫部	波状口縫、巻貝調整痕を残す	1~2mm	黄灰
149	I9	5.4~5.5	後 期	口縫部	口端に竹管状工具による刺突、内面ナデ、外面巻貝調整	2~3mm	橙~灰黄褐
150	I9	5.4~5.5	後 期	口縫~胴部	口端に棒状工具による刻目、穿孔あり、内面ナデ、外表面巻貝調整のちナデ	1~2mm	灰黄褐
151	C8	6.8~6.94	後 期	口縫部	内外面とも巻貝調整痕	1mm以下	暗灰黄
152	C5	6.8~6.93	後 期	口縫部	内外面とも巻貝調整痕	1~2mm	にぶい黄橙~灰黄褐
153	C14	6.7~6.8	後 期	口縫部	内外面巻貝調整のち粗いナデ、外面には粘土帶の離ぎ目が残る	2~3mm	にぶい黄橙
154	A5	6.8~6.9	後 期	口縫部	巻貝調整のち内面ミガキ、外面ナデ	1~2mm	褐灰
155	B1	6.6~6.7	後 期	口縫部	内面横位ヘラミガキ、外面横位ヘラミガキ	1mm以下	明黄褐
156	D2	6.4~6.5	後 期	口縫部	内面ミガキ、外面ナデ	1~2mm	橙~黑褐
157	I11	5.4~5.5	後 期	2/3残存	内外面ナデ	1~2mm	にぶい橙
158	C24	6.7~6.8	後 期	1/2残存	内面ミガキ、外面口縫部ミガキ、胸部以下ナデ	2~3mm	灰黄褐/黒

1. 石器計測表

番号	区	グリッド	レベル・退房	器種	石材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	整理番号
1	北		1号土壌層	石鏃	サヌカイト	(1.25)	1.05	0.29	(0.3)	107
2	北		1号土壌層	石鏃	サヌカイト	1.42	1.07	0.32	0.3	101
3	北		1号土壌層	石鏃	サヌカイト	(1.32)	1.23	0.25	(0.4)	111
4	北		1号土壌層	石鏃	サヌカイト	(1.48)	1.20	0.33	(0.4)	105
5	北		1号土壌層	石鏃	サヌカイト	1.52	0.98	0.33	(0.3)	102
6	北		1号土壌層	石鏃	サヌカイト	(1.33)	1.30	0.27	(0.4)	116
7	北		1号土壌層	石鏃	サヌカイト	1.36	(1.23)	0.24	(0.49)	104
8	北		1号土壌層	石鏃	サヌカイト	1.89	1.27	0.33	0.6	103
9	北		1号土壌層	石鏃	サヌカイト	(1.98)	1.55	0.26	(0.6)	106
10	北		1号土壌層	石鏃	サヌカイト	1.73	(0.88)	0.24	(0.3)	110
11	北		1号土壌層	石鏃	サヌカイト	(1.69)	(1.56)	0.29	(0.7)	112
12	北		1号土壌層	石鏃	サヌカイト	1.34	1.06	0.25	0.3	108
13	北		1号土壌層	石鏃	サヌカイト	1.23	0.89	0.21	0.2	113
14	北		1号土壌層	石鏃	サヌカイト	1.67	1.02	0.55	0.8	115
15	北		1号土壌層	石鏃	サヌカイト	2.44	1.05	0.27	0.4	114
16	北		1号土壌層	石匙	サヌカイト	3.31	4.39	0.45	6.1	120
17	北		1号土壌層	異形石器	サヌカイト	5.16	(4.52)	0.60	(11.6)	119
18	北		1号土壌層	スクレイパー	サヌカイト	2.43	3.15	0.29	2.6	121
19	北		1号土壌層	スクレイパー	サヌカイト	4.54	6.56	1.60	49.3	122
20	北		1号土壌層	明石	安山岩	(7.02)	4.10	3.60	(159.2)	42
21	北		1号土壌層	石錐	玄武岩	6.11	5.85	2.25	99.8	124
22	北		1号土壌層	石錐	流紋岩	6.11	3.96	1.00	33.2	123
23	北		2号土壌層	石鏃	サヌカイト	1.26	1.45	0.31	0.3	125
24	北		2号土壌層	石鏃	サヌカイト	1.70	1.01	0.25	0.3	126
25	北		2号土壌層	石錐	粘板岩	5.68	4.00	1.53	52.9	128
26	北		2号土壌層	石錐	流紋岩	5.62	4.08	1.40	45.9	129
27	北		2号土壌層	石錐	流紋岩	5.21	3.42	1.46	(31.2)	127
28	北		2号土壌層	石錐	砂岩	4.03	3.55	1.39	25.1	130
29	北	F	土壤1	石鏃	サヌカイト	2.77	1.89	0.49	(2.3)	51
30	北	F	土壤1	石鏃	サヌカイト	1.72	1.32	0.40	0.7	117
31	北	F	土壤1	石鏃	サヌカイト	(1.33)	(1.20)	0.31	(0.3)	52
32	北	F	土壤1	石鏃	サヌカイト	1.79	1.23	0.29	0.15	53
33	北	C		石鏃	サヌカイト	(0.84)	(1.10)	0.30	(0.3)	19
34	北	A		石鏃	サヌカイト	1.48	(1.04)	0.24	(0.3)	1
35	北	D		石鏃	サヌカイト	(1.57)	1.35	0.23	(0.3)	27
36	北	F	6.1~6.25	石鏃	サヌカイト	1.71	1.34	0.33	0.4	54
37	北	E		石鏃	サヌカイト	2.18	1.49	0.41	0.8	33
38	北	E		石鏃	サヌカイト	(1.84)	(1.31)	0.24	(0.7)	37
39	北	E		石鏃	サヌカイト	2.15	1.98	0.54	1.5	35
40	北	F	6.2~6.25	石匙	サヌカイト	3.53	(7.06)	0.78	(16.7)	68
41	北	F		石匙	サヌカイト	(4.69)	6.65	0.73	(20.6)	69
42	北	F		石匙	サヌカイト	2.91	3.66	0.60	3.2	65
43	北	F		スクレイパー	サヌカイト	3.26	8.36	0.68	20.8	73
44	南	J		スクレイパー	サヌカイト	3.32	4.23	0.84	13.7	92
45	南	K	5.2	石核	サヌカイト	5.72	8.81	3.05	169.4	97
46	南	J5	5.0~5.1	石鏃	サヌカイト	1.01	(1.33)	0.20	(0.2)	86
47	北	D4	6.4~6.5	石鏃	サヌカイト	1.69	1.72	0.39	0.7	28
48	北	C3	6.2~6.3	石鏃	サヌカイト	(1.45)	1.03	0.25	(0.3)	11
49	北	C1	6.5~6.6	石鏃	サヌカイト	1.69	0.98	0.17	0.2	10
50	北	A1	6.23~6.3	石鏃	サヌカイト	1.87	1.37	0.25	0.4	2
51	北	C2	6.5~6.6	石鏃	サヌカイト	2.10	1.54	0.27	0.6	14
52	南	J10	5.3~5.4	石鏃	サヌカイト	2.60	(1.73)	0.28	(0.7)	90
53	北	D8	6.4~6.5	石鏃	サヌカイト	2.70	(1.80)	0.31	(0.9)	29
54	北	C2	6.16~6.3	石鏃	サヌカイト	2.52	1.60	0.37	1.1	15
55	北	A7	6.3~6.4	石鏃	サヌカイト	2.79	1.73	0.59	1.4	3
56	南	I10	5.6~5.71	石鏃	サヌカイト	1.83	1.43	0.29	0.6	80
57	北	C5	6.4~6.5	石鏃	サヌカイト	(1.75)	1.45	0.33	(0.9)	18
58	北	C3	6.2~6.3	石鏃	サヌカイト	2.07	(1.96)	0.49	(1.6)	17

() 内は現存値

番号	区	グリッド	レベル・遺構	器種	石材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	整理番号
59	北	C24	6.54~6.6	石鏃	サヌカイト	1.66	1.28	0.35	0.7	16
60	南	I12	5.6~5.74	石鏃	サヌカイト	2.35	1.70	0.43	1.3	81
61	南	J2	5.1~5.2	石鏃	サヌカイト	(2.11)	(1.57)	0.36	(0.7)	88
62	北	C24	6.54~6.6	石鏃	サヌカイト	2.14	(0.76)	0.30	(0.5)	20
63	南	J13	5.1~5.2	石鏃	サヌカイト	3.55	0.72	0.45	1.2	89
64	北	D16	6.4~6.5	石鏃	サヌカイト	4.31	1.33	0.43	2.8	30
65	南	L2	5.72	石鏃	サヌカイト	4.59	1.70	0.73	6.6	98
66	南	L16	5.3~5.4	石槍	サヌカイト	13.83	3.52	1.22	56.7	99
67	南	L14	5.5~5.6	スクレイバー	サヌカイト	4.90	5.79	1.51	44.4	100
68	北	B4	6.4~6.5	スクレイバー	サヌカイト	8.67	2.92	1.43	47.3	7
69	南	J2	5.1~5.2	スクレイバー	サヌカイト	4.99	8.94	0.92	50.4	93
70	南	I	5.14	ノッチ	黒曜石	5.49	2.98	1.25	22.0	83
71	北	C6	6.36~6.4	石核	サヌカイト	7.23	6.21	2.68	141.6	22
72	北	A3	6.4~6.5	石鏃	デイサイト	7.57	6.21	2.16	153.1	5
73	南	L3	5.4~5.5	石鏃	アブライト	5.09	4.61	1.86	64.6	25
74	南	J2	5.4~5.5	装身具	滑石	4.66	3.04	0.67	10.7	
75	北	C3	6.4~6.5	装身具	蛇紋岩	1.79	1.00	0.69	1.6	

() 内は現存値

3. 遺構出土石器組成表

番号	区	グリッド	レベル・遺構	器種	石材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	整理番号
59	北	C24	6.54~6.6	石鏃	サヌカイト	1.66	1.28	0.35	0.7	16
60	南	I12	5.6~5.74	石鏃	サヌカイト	2.35	1.70	0.43	1.3	81
61	南	J2	5.1~5.2	石鏃	サヌカイト	(2.11)	(1.57)	0.36	(0.7)	88
62	北	C24	6.54~6.6	石鏃	サヌカイト	2.14	(0.76)	0.30	(0.5)	20
63	南	J13	5.1~5.2	石鏃	サヌカイト	3.55	0.72	0.45	1.2	89
64	北	D16	6.4~6.5	石鏃	サヌカイト	4.31	1.33	0.43	2.8	30
65	南	L2	5.72	石鏃	サヌカイト	4.59	1.70	0.73	6.6	98
66	南	L16	5.3~5.4	石槍	サヌカイト	13.83	3.52	1.22	56.7	99
67	南	L14	5.5~5.6	スクレイバー	サヌカイト	4.90	5.79	1.51	44.4	100
68	北	B4	6.4~6.5	スクレイバー	サヌカイト	8.67	2.92	1.43	47.3	7
69	南	J2	5.1~5.2	スクレイバー	サヌカイト	4.99	8.94	0.92	50.4	93
70	南	I	5.14	ノッチ	黒曜石	5.49	2.98	1.25	22.0	83
71	北	C6	6.36~6.4	石核	サヌカイト	7.23	6.21	2.68	141.6	22
72	北	A3	6.4~6.5	石鏃	デイサイト	7.57	6.21	2.16	153.1	5
73	南	L3	5.4~5.5	石鏃	アブライト	5.09	4.61	1.86	64.6	25
74	南	J2	5.4~5.5	装身具	滑石	4.66	3.04	0.67	10.7	
75	北	C3	6.4~6.5	装身具	蛇紋岩	1.79	1.00	0.69	1.6	

4. 骨角貝製品観察表

番号	出土地点 区	地層 遺構・層位	時 期	器 種	長さ (cm)	幅(cm)	厚さ (cm)	重量(g)	素 材	残存状況
1	C-D	1号土塙墓・下層	前期IV	管状垂飾	7.1	1.5	1.5	0.8	大型鳥類脛骨	完形
2	C-D	1号土塙墓・下層	前期IV	管状重飾	4.2	1.7	1.3	5.1	大型鳥類脛骨	完形
3	J5	5.4~5.5		骨製垂飾	1.2	1.2	0.5	0.4	大型エイ類椎骨	ほぼ完形
4	J5	5.4~5.5		骨製重飾	1.2	1.3	0.6	0.4	大型エイ類椎骨	周縁を欠く
5	J5	5.4~5.5		骨製重飾	(1.5)	(1.5)	0.7	0.5	大型エイ類椎骨	周縁を欠く
6	J5	5.4~5.5		骨製重飾	(1.4)	1.4	0.7	0.5	大型エイ類椎骨	周縁を欠く
7	J5	5.3~5.4		骨製重飾	1.4	1.4	0.7	0.6	大型エイ類椎骨	ほぼ完形
8	J2	5.3~5.4		骨製重飾	(1.4)	1.4	0.7	0.5	大型エイ類椎骨	周縁を欠く
9	J5	5.5~5.62		貝輪			0.4	0.8	サルボウガイまたはアカガイ	小片
10	J12	5.3~5.4		貝輪			0.4	3.5	サルボウガイまたはアカガイ	1/3残存
11	J12	5.2~5.3		貝輪			0.4	5.1	サルボウガイまたはアカガイ	小片

() 内は推定値

5. 貝層内容物表

グリッド	堆積 (cc)	総重量 (g)	混土率 (%)	混磯率 (%)	貝殻(g)	獸骨(g)	魚骨(g)	土器(g)	石器類 (g)	その他 (g)
J 1 / 5.6~5.66	900	2,140	82.6	6.5	224.5	0.0	0.0	8.9	0.0	
5.5~5.6	9,900	21,400	88.3	9.5	4,457.9	0.0	0.0	16.1	0.4	
5.4~5.5	16,500	36,840	62.7	24.3	4,705.6	0.0	0.0	63.5	1.1	
5.3~5.4	20,380	45,010	57.4	25.6	7,614.5	0.0	0.1	2.4	3.8	
5.2~5.3	17,340	36,550	58.0	25.6	5,981.4	0.0	0.2	3.1	14.9	
5.1~5.2	12,900	27,570	60.4	27.5	3,346.2	0.0	0.3	0.0	0.0	
5.0~5.1	2,400	4,720	76.0	14.0	4,743.4	0.0	0.3	0.0	0.0	
J 2 / 5.5~5.59	6,800	13,800	83.4	6.5	1,366.4	0.6	0.2	22.1	0.0	
5.4~5.5	16,100	35,520	60.2	16.7	8,168.3	0.8	0.3	35.2	0.0	
5.3~5.4	7,100	16,280	56.9	18.2	4,058.9	0.0	0.1	3.7	0.0	骨製垂飾0.5
5.2~5.3	5,000	11,260	58.4	16.0	2,879.8	0.0	1.5	2.6	0.0	
5.1~5.2	7,400	18,740	42.7	39.5	3,248.1	0.7	1.7	34.2	56.9	
5.0~5.1	5,400	13,080	53.2	35.5	1,476.5	0.0	0.4	6.5	1.9	
J 3 / 5.5~5.68	19,600	42,210	59.5	20.5	8,460.8	0.0	0.4	6.7	0.5	
5.4~5.5	21,700	46,760	54.1	27.9	8,420.8	0.1	0.7	13.3	0.0	
5.3~5.4	16,900	38,900	46.7	36.9	5,994.5	0.0	0.8	4.0	0.0	
5.2~5.3	11,300	24,800	60.4	26.0	3,330.5	0.7	0.0	14.8	1.1	
5.12~5.2	4,900	11,920	73.2	20.3	771.7	5.3	0.0	4.8	2.4	
J 4 / 5.6~5.64	2,000	4,940	73.1	7.3	959.5	0.2	0.0	7.1	0.0	
5.5~5.6	13,100	33,760	59.3	17.2	7,684.8	0.0	0.1	86.4	0.0	
5.4~5.5	11,800	29,720	51.4	20.1	8,466.7	0.1	0.3	19.6	0.3	
5.3~5.4	18,200	44,440	53.0	23.4	10,508.9	0.3	0.6	2.7	0.0	
5.2~5.3	12,700	31,360	47.3	36.9	4,911.7	0.3	1.5	17.9	2.4	
5.1~5.2	6,800	15,960	64.3	20.4	2,417.3	3.7	0.4	8.9	5.4	
J 5 / 5.5~5.62	17,400	44,480	68.5	13.5	7,932.3	3.7	0.4	52.4	5.5	貝輪0.8
5.4~5.5	15,100	37,580	57.3	17.8	9,328.7	0.1	0.9	23.5	0.0	骨製垂飾1.7
5.3~5.4	12,300	28,050	59.2	15.3	7,125.9	0.0	1.1	7.3	0.5	骨製垂飾0.6
5.2~5.3	14,900	34,200	63.1	13.1	8,115.5	0.0	0.6	9.7	0.1	
5.1~5.2	19,400	47,320	49.0	31.3	9,201.6	10.5	3.6	89.7	19.4	
5.0~5.1	7,800	18,460	70.8	16.4	2,360.8	0.5	1.0	14.5	0.3	
J 6 / 5.5~5.6	7,900	19,160	82.7	1.5	3,004.0	0.0	0.2	39.5	0.4	
5.4~5.5	9,200	22,480	55.0	21.8	5,183.8	0.0	0.5	20.5	0.0	
5.3~5.4	13,200	31,060	47.9	29.4	6,947.3	21.8	2.2	65.1	2.0	
5.2~5.3	10,500	25,220	55.2	22.4	5,652.6	2.2	1.0	0.0	0.0	
5.1~5.2	2,500	6,920	54.1	19.4	1,826.1	0.0	0.1	8.4	0.0	
5.0~5.1	8,000	20,300	53.1	34.3	2,538.0	0.0	0.7	67.5	2.9	
J 7 / 5.5~5.55	1,300	3,340	72.2	10.2	585.2	0.0	0.0	3.1	2.0	
5.4~5.5	4,300	11,060	50.1	34.9	1,653.0	0.0	0.1	1.4	8.4	
5.3~5.4	3,700	9,960	50.1	29.5	2,023.0	0.8	0.0	11.0	0.0	
5.2~5.3	3,700	9,800	47.3	32.7	1,961.3	0.0	0.1	7.0	0.0	
5.1~5.2	5,000	13,020	57.3	22.0	2,689.1	0.3	0.3	6.1	0.7	
5.0~5.1	3,700	9,680	55.0	29.1	1,527.4	0.0	0.0	8.4	0.0	
J 8 / 5.6~5.75	14,500	33,180	67.0	13.6	6,418.7	0.3	0.6	27.8	0.0	
5.5~5.6	18,800	43,240	52.3	25.5	9,570.9	4.8	0.9	49.2	0.0	
5.4~5.5	12,700	32,640	61.5	17.4	6,299.5	0.0	0.2	580.8	6.2	
5.3~5.4	10,200	24,680	65.9	15.8	4,456.1	0.6	0.8	45.7	0.6	
J 9 / 5.6~5.7	8,700	21,260	60.2	13.6	5,542.3	0.1	0.3	14.9	0.0	
5.5~5.6	15,100	37,720	59.3	15.5	9,460.8	5.9	6.2	13.5	0.0	
5.4~5.5	15,200	37,500	55.8	19.6	9,225.9	0.0	2.5	24.2	0.0	
5.3~5.4	14,400	35,540	67.7	18.5	4,859.8	0.0	0.3	19.5	3.5	
5.2~5.3	1,300	3,140	85.2	3.8	3,436.3	0.0	0.0	0.0	0.0	
J 10 / 5.6~5.66	3,700	8,240	82.1	1.2	1,364.4	0.0	0.0	12.6	0.0	
5.5~5.6	17,300	41,740	55.3	18.2	11,014.2	11.1	0.4	54.3	0.0	
5.4~5.5	13,600	32,880	56.9	13.9	9,593.0	0.9	0.5	4.4	0.0	
5.3~5.4	16,800	41,220	54.2	22.2	9,646.0	8.3	0.2	64.4	0.7	

グリッド	堆積 (cc)	総重量 (g)	混土率 (%)	混雑率 (%)	貝殻(g)	黒骨(g)	魚骨(g)	土器(g)	石器類 (g)	その他 (g)
J 10 / 5.2~5.3	15,400	38,000	58.2	26.6	5,688.3	0.0	0.3	60.3	1.4	
5.1~5.2	7,600	18,920	69.3	19.0	2,201.0	0.0	0.1	14.0	0.4	
J 11 / 5.5~5.63	15,000	37,320	53.6	20.7	9,411.1	0.0	0.0	191.9	1.3	
5.4~5.5	15,500	39,700	35.3	39.0	10,044.3	3.7	0.0	180.8	0.0	
5.3~5.4	13,600	33,520	45.6	31.2	7,653.5	2.9	0.4	96.2	0.0	
5.2~5.3	16,600	40,780	46.9	32.2	8,466.6	6.5	0.5	64.2	0.0	
5.1~5.2	15,400	37,220	53.0	31.6	5,636.5	2.0	0.2	75.7	16.4	
5.0~5.1	2,300	5,720	71.3	16.4	653.7	0.2	0.0	77.2	0.0	
J 12 / 5.5~5.6	—	—	—	—	4,104.1	2.7	0.0	36.9	0.0	
5.4~5.5	—	—	—	—	8,812.3	0.0	0.1	190.6	12.8	
5.3~5.4	—	—	—	—	11,382.1	0.0	0.1	66.0	9.2	貝輪5.3
5.2~5.3	—	—	—	—	9,840.2	6.7	0.2	53.7	23.2	貝輪5.1
5.1~5.2	—	—	—	—	5,235.0	0.0	0.1	54.8	1.2	
5.0~5.1	—	—	—	—	3,492.4	0.7	0.5	42.6	0.9	
J 13 / 5.5~5.58	3,900	9,860	38.1	38.9	2,258.4	0.0	0.2	0.0	0.0	
5.4~5.5	10,100	24,740	43.6	28.8	6,755.3	1.4	0.1	78.8	0.1	
5.3~5.4	13,500	33,000	58.5	19.9	7,020.0	2.5	0.5	77.4	0.2	
5.2~5.3	12,800	31,740	59.4	15.5	7,901.5	0.0	0.7	43.7	15.7	
5.1~5.2	12,600	31,200	61.0	19.9	5,922.5	4.2	3.0	24.1	2.8	
5.0~5.1	15,600	38,700	58.5	26.0	5,963.9	0.1	0.3	34.5	0.0	
4.95~5.0	2,200	5,320	76.0	9.4	767.3	0.0	0.0	10.5	0.0	
J 14 / 5.4~5.5	7,400	17,160	63.1	12.9	4,102.1	0.0	0.1	10.6	0.0	
5.3~5.4	7,300	17,560	53.4	23.1	4,117.0	0.1	0.1	0.0	0.0	
5.2~5.3	8,200	19,760	53.3	19.0	5,472.5	0.0	0.2	0.0	0.0	
5.1~5.2	7,700	20,180	46.3	29.9	4,753.9	0.0	1.5	34.2	3.8	
5.0~5.1	6,300	15,640	53.9	26.7	3,014.5	0.1	0.3	16.2	2.0	
C 1 / 6.9~6.96	7,480	15,060	46.2	30.0	3,550.6	0.7	0.3	26.6	0.8	
6.8~6.9	13,980	28,780	44.0	31.5	6,993.3	1.7	3.5	58.6	0.0	
6.7~6.8	23,200	46,080	51.7	21.6	12,182.3	7.3	11.7	117.1	4.9	
6.6~6.7	17,560	34,820	55.1	11.1	11,614.0	30.8	1.2	124.7	0.7	
6.5~6.6	23,340	44,960	69.9	16.1	6,170.2	0.9	3.2	75.9	2.0	
6.4~6.5	18,820	36,440	67.9	24.3	2,765.9	0.0	0.1	62.5	10.8	
6.3~6.4	10,620	20,160	98.5	1.1	78.6	0.0	0.0	4.4	1.3	
6.19~6.3	32,680	61,780	91.1	6.6	1,411.6	0.0	0.2	49.5	5.7	
C 2 / 6.9~6.96	6,300	12,720	47.9	29.9	2,793.4	0.0	0.2	28.1	0.0	
6.8~6.9	6,660	14,320	39.5	29.9	4,207.6	1.6	0.2	169.7	0.0	
6.7~6.8	14,380	29,820	40.4	35.4	7,116.8	3.7	0.5	77.2	0.0	
6.6~6.7	19,740	40,160	46.5	25.0	11,336.9	11.4	4.5	74.6	0.0	
6.5~6.6	16,660	32,300	59.1	12.5	8,980.1	6.1	2.1	183.3	2.7	
6.4~6.5	8,920	17,480	60.7	11.9	4,678.7	0.3	0.3	105.4	3.7	
6.3~6.4	12,862	24,540	78.0	13.4	2,069.2	0.7	0.1	55.3	3.7	
6.16~6.3	21,600	39,160	89.0	8.7	767.0	0.0	0.1	87.5	35.7	
C 3 / 6.9~6.96	8,240	16,520	49.5	34.4	2,590.0	3.2	0.3	77.1	0.0	
6.8~6.9	7,160	14,400	45.5	30.1	3,445.5	4.3	0.6	80.9	1.0	
6.7~6.8	18,320	37,900	42.5	32.1	9,462.9	0.3	0.8	147.8	4.2	
6.6~6.7	9,920	20,620	42.9	27.8	5,976.9	0.5	0.8	56.0	0.0	鳥類0.4
6.5~6.6	27,260	54,580	51.2	23.1	13,673.0	4.8	1.3	336.2	2.4	
6.4~6.5	14,220	27,300	62.0	14.6	6,253.8	2.3	0.6	145.5	4.2	
6.3~6.4	12,060	23,140	67.7	13.2	4,358.7	0.3	0.4	49.2	2.6	
6.2~6.3	2,980	5,900	74.5	20.7	275.4	0.0	0.0	6.4	1.9	
6.1~6.2	18,300	34,940	73.9	18.1	2,773.7	2.0	0.1	0.0	8.3	
6.0~6.1	14,300	27,540	74.2	20.4	1,397.3	0.6	0.2	90.8	9.4	

貝類の出土量(1)

貝類の出土量(2)

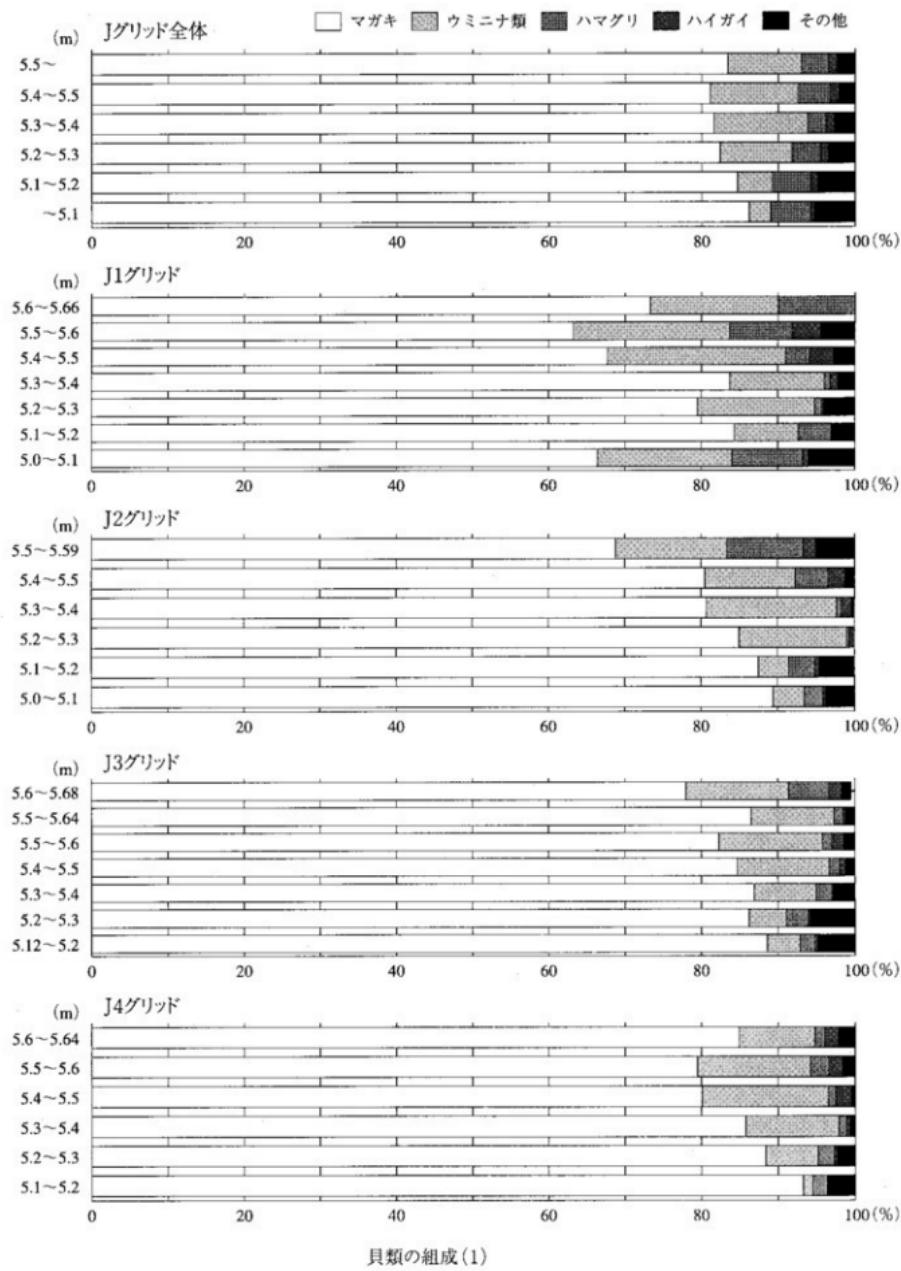
グリッド	貝類の出土量(2)										レガリガイ	エカリガイ	マガキ	シャミトガミ	オシガミ	ハマグリ	シオガイ	ムラサガイ		
	イシダタミ	スガイ	ウミナナ	ホソウミニナ	イボウミニナ	カワフタリ	トベナタリ	アカニシ	ミナ	計										
J5 / 5.5~5.62	2	31	1	68	1	15	1	139	2	1	7	16/11	1119/984	3/4	2/3	41/45				
5.4~5.5	1	85	11	145	3	22	14	307	6	3	4	0/1	23/34	1643/1604	1/0	25/22	0/2	ナリニナ		
5.3~5.4	3	54	7	148	2	18	11	254	2		2	2/7	23/25	1258/1239	1/0	25/16				
5.2~5.3	1	4	30	2	103	3	2	165	7	1	3	2/1	7/7	1627/1284	1/0	41/39	1/1			
5.1~5.2	22	6	18		2	31	34	12	6	30	3/2	6/5	1450/1482	0/1	97/75	1/2				
5.0~5.1	3		1		1	1	2	13	3	3	13	0/1	0/2	397/386		21/24				
J6 / 5.5~5.6	1	12		35	3	1	66	1	1	3	4/7	424/322	1/0	1/0	25/17					
5.4~5.5	3	14		58	1	4	3	85	8	1	2	4	2/0	6/6	782/591	0/1	45/40			
5.3~5.4	1	1	75	6	124	2	7	12	245	8	2	2	7	1/1	37/40	860/929	1/0	39/40	0/1	
5.2~5.3	5	1	43	1	82	2	4	12	152	5		2/0	11/18	875/678		44/43	0/1			
5.1~5.2	3			5			5	3	2	2			273/258		6/4					
5.0~5.1	2			3			3	12	4	2	12	3/2	2/1	419/345	31/39			ナリニシ		
J7 / 5.5~5.55	3	6	13			20					1/0	1/2	61/70		4/6					
5.4~5.5		3	1	19	2		29	6	3	7	0/2	1/2	233/192	1/0		9/15	1/0			
5.3~5.4	3	8	17			33	4	2	1	4	1/0	3/2	189/172		1/1	7/17				
5.2~5.3	24	1	30	2	6	10	78	3	1	1	1/0	12/11	355/319	1/0	0/1	9/18				
5.1~5.2	1	1	21	3	22	1	5	4	62	4	6	10	2/17	430/396	1/0	10/17		アリ L1		
5.0~5.1	7	2		5			8	11	2	2	4	3/2	2/3	235/161		21/15				
J8 / 5.6~5.75	3	2	101	1	1	119	2		3	16/14	4/5	1370/1302	2/3	1/1	25/19	0/1	2/1			
5.5~5.6	11	6	102	1	1	117	15	5	6	32	5/5	2/7	1367/1541		98/109	0/1	77/71			
5.4~5.5	14	2	21	11	1	17	19	23	31	2/2	3/2	722/1035	0/1	120/73	0/1	1/1	77/71			
5.3~5.4	2	13	1	70	4	2	94	5	3	9	3/3	3/4	685/890		1/0	24/25	0/1			
J9 / 5.5~5.6	1	1	8	1	192	8	5	3	234	1	1	25/19	4/2	2132/1932	1/0	1/1	8/10	1/2		
5.4~5.5	6	5	7	75	1	1	113	4	3	11	1/2	4/2	1730/1807	0/1	72/73	2/1	1/1	ナリニナ		
5.3~5.4	10	1		5			8	5	13	13	0/2	2/2	798/1011	2/0	25/26	1/0	1/0			
5.23~5.3		1											64/69		3/4					

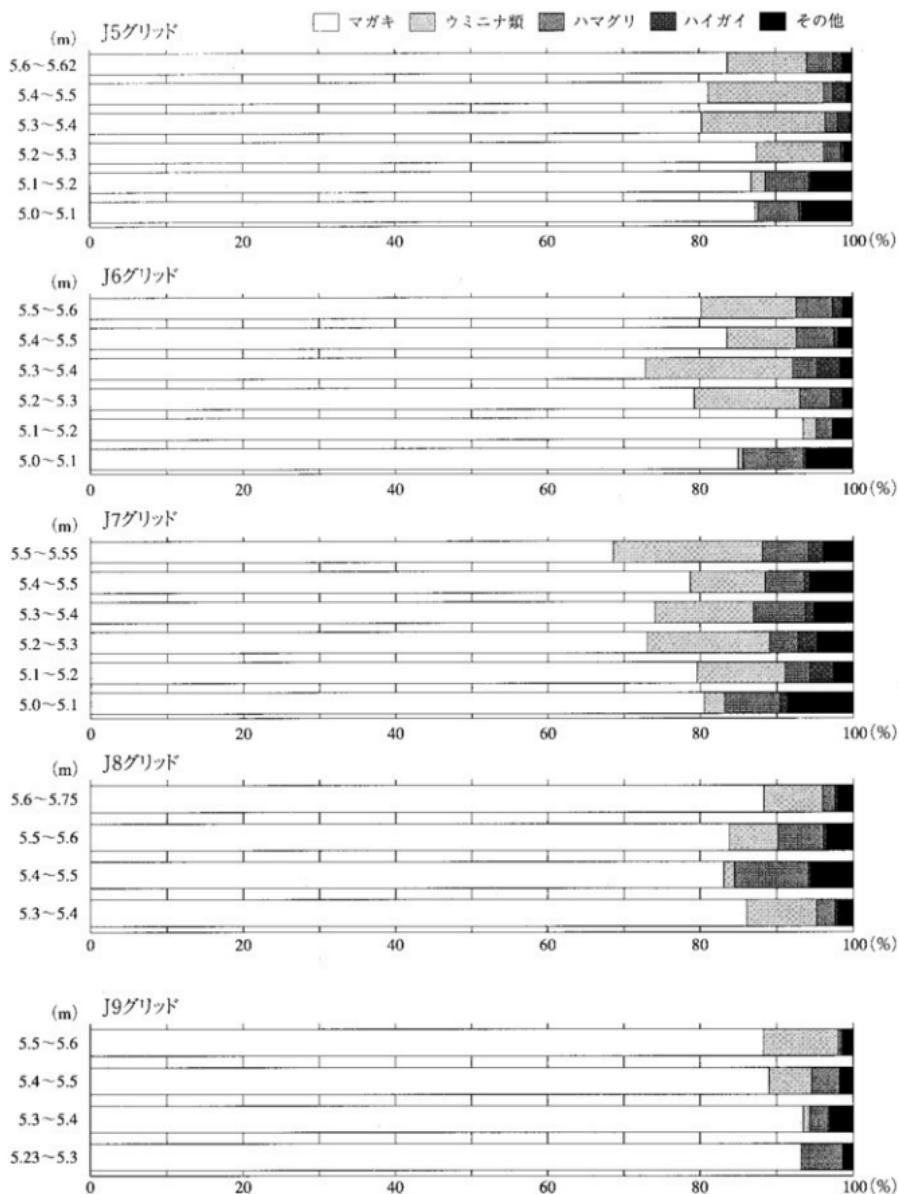
貝類の出土量(3)

グリッド	貝類の種類合計										その他									
	イヌガイ	シダタミ	ウミニア	ウミニア	カワウミニア	カワウミニア	アカニナ	アカニナ	イボニナ	イボニナ	マガキ	マガキ	シマガキ	シマガキ	ハマグリ	ハマグリ	オガキ	オガキ	ラガイ	ラガイ
J10/5.6~5.66	4	1	11	1	19						6/4	164/158	1/0	1/0	19/9	1/0				
5.5~5.6	1	37	80	24	166	3	2	2/0	11/160	2036/1803	2/0	27/38								
5.4~5.5	7	1	31	141	2	9	3	207	1	3	3/4	12/18	1494/1524	2/1	55/71	4/2				
5.3~5.4	37	9	8	1	55	2	1	2	89	13	8	1	20	16/17	1239/1134		28/28	6/6		
5.2~5.3	20	9	6	26	3	3	4	50	11	4	4	15	1/2	5/2	1159/1094	79/72	1/2			
5.1~5.2	5	5	5	1	14	8	2	6	0/2	4/1	357/341	1/1	22/20							
J11/5.5~5.63	5	13	1	30	4	60	6	8	2	11	1/0	16/22	996/805	1/4	1/2	93/79				
5.4~5.5	1	1	28	1	57	1	4	5	99	10	3	3	8	3/0	17/26	1243/1048	83/70	1/1		
5.3~5.4	12	1	92	8	68	1	16	12	206	9	5	1	9	1/2	33/26	993/999	2/1	51/59	1/2	
5.2~5.3	20	7	58	7	47	1	4	4	128	20	4	4	18	3/4	16/23	999/919	1/0	83/101	3/1	1/0 77/11
5.1~5.2	8	10	16	1	6	1	3	27	20	7	3	21	23/20	10/9	506/540	0/1	86/75		1/0	
5.0~5.1	1	1					1	1	1		5	9/8	103/117		10/13					
J12/5.5~5.6	5	6	22	5	2	39	6	7	8	20	1/2	14/19	379/317	0/1	0/1	80/70		カリニナ		
5.4~5.5	3	32	2	65	1	10	1	118	14	8	18	32	6/9	28/28	877/783	0/2	127/100	0/1	タマカキ・イ科1	
5.3~5.4	6	14	169	83	4	10	4	274	18	7	9	41	13/9	24/22	1198/1374	2/2	82/84	1/2	2/1 タマカキ・イ科1	
5.2~5.3	2	15	110	6	62	5	7	12	210	20	15	8	33	5/5	30/17	1276/1220	2/1	77/77	2/2	0/1 サトウカキ・イ科1
5.1~5.2	3	49	2	28	2	4	5	97	10	10	4	24	6/5	10/11	653/669	0/1	52/59	1/1	1/0	
5.0~5.1	4	9	3					14	9	3	2	13	4/8	3/5	520/379	30/40	0/1			
J13/5.5~5.58	1	1	12	2	19	5	1	42	2	3	6	3/3	8/9	238/248	1/0					
5.4~5.5	1	4	99	1	65	3	2	175	6	4	8	22	6/6	11/13	540/553	63/64	0/2			
5.3~5.4	22	159	4	68	1	5	3	243	15	8	2	30	2/3	10/11	974/890	1/0	41/47	0/1	2/0 タマカキ・イ科1	
5.2~5.3	11	107	3	16	4	5	3	140	7	3	3	28	1/1	11/11	1027/1081	48/43	0/1	77/77		
5.1~5.2	1	6	30	9	1	1	3	44	13	3	6	15	1/1	2/11	800/773		34/36	1/1	0/1 77/77	
5.0~5.1	2	16	26	2				2	40	10	2	6	17	4/3	793/816	0/1	35/37	1/0	1/1 77/77	
4.95~5.0	1														79/127	4/4				

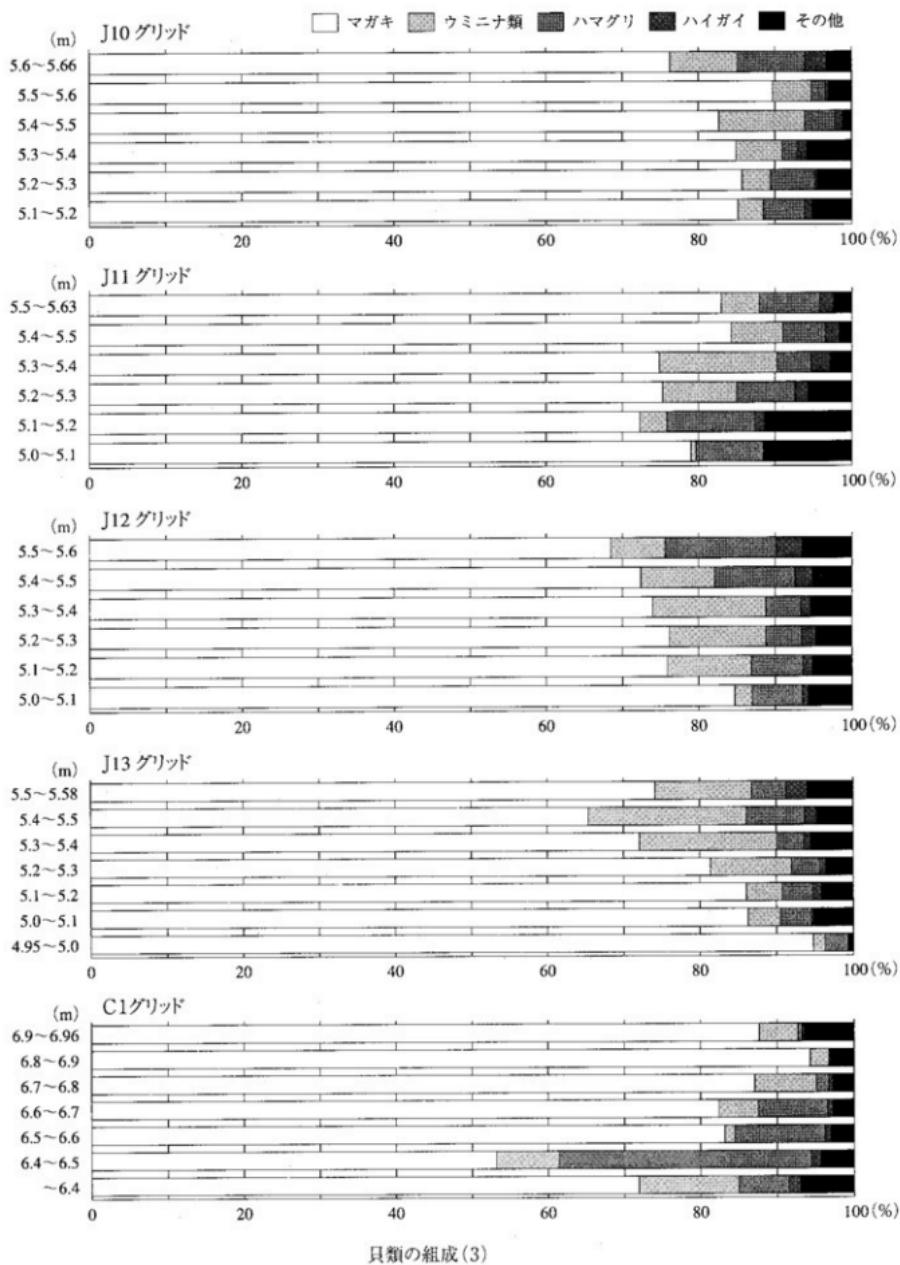
貝類の出土量(4)

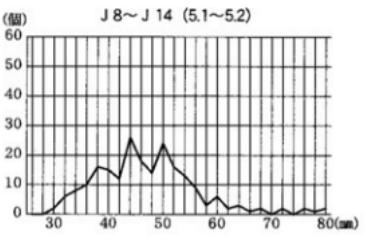
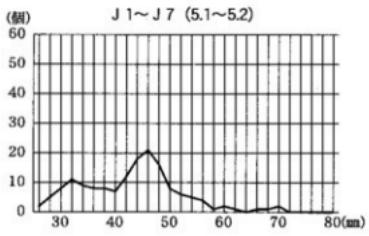
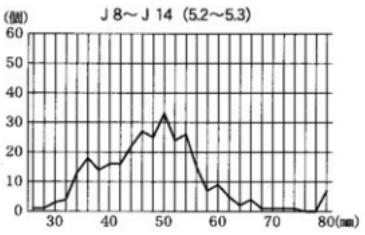
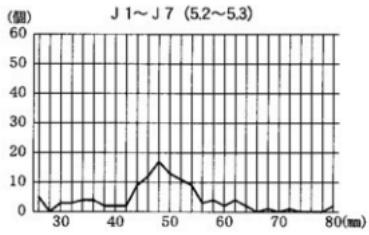
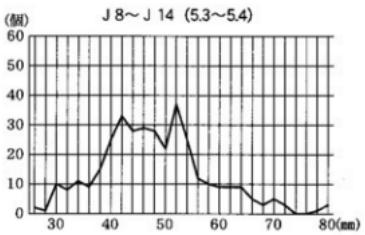
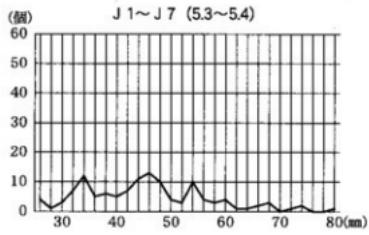
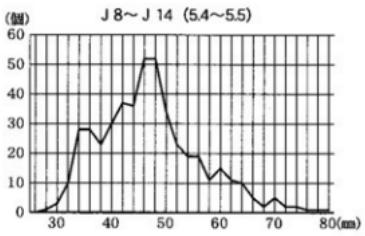
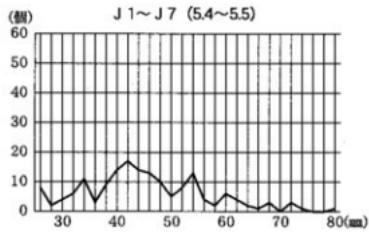
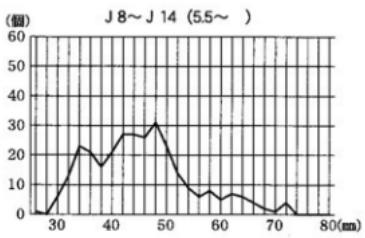
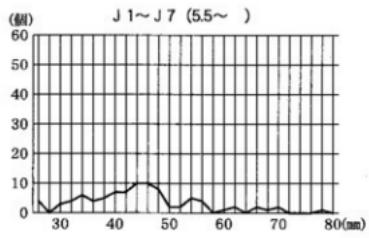
グリッド	イ ス ガ イ シ ダ タ ミ	ウ ミ ニ ナ	木 波 ソ ウ ミ ニ ナ	イ ボ ウ ミ ニ ナ	カ ワ ア イ ナ タ リ	レ イ シ ガ イ	ア カ ニ シ ガ イ	イ レ ボ ニ シ ガ イ	エ カ ガ イ ガ ネ	ハ イ ガ イ	マ ガ キ	シ マ ミ ト ガ イ	オ キ シ ガ ミ	ハ マ ダ リ	シ オ ラ サ ガ キ ガイ	そ の 他	カ リ ニ ナ 料
5.3~5.4	1	23	15	1	42	1	2	5	1/0	2/4	715/656	2/0	1/0	5/8			
5.2~5.3	3	7	1	8	10	2	5	18	1/0	10/9	640/620	21/23	1/0	40/34	1/0	1/0	1/0
5.1~5.2	5	3	4	5	4	15		8/5	633/623								
5.0~5.1	1	2	3	5	1		3	1/2	3/3	462/409		9/12					
C1 / 6.9~6.96	3	21	7	5	25		37	10	12	0/2	2/0	622/643	2/3	0/1			
6.8~6.9	22	14	1	17	3	2	35	3	2	12	20	1/0	1402/1149	2/2			
6.7~6.8	18	17	4	93	61	1	183	24	1	4	10	11/13	1966/1995	0/3	36/27	0/1	0/1
6.6~6.7	5	20	6	18	36	1	86	12	4	8	12/13	1369/1374	17/12	2/1	141/148	1/1	1/1
6.5~6.6	2	2	8	4	2	20	21	2	4	12/8	1001/1311	13/11	2/3	184/161	1/0	0/2	0/2
6.4~6.5	2	10	21	3	41	6	2	5	3/6	182/266	3/7	1/2	161/165	1/0			
6.3~6.4		4	1		5				0/3	2/0	0/1						
6.19~6.3	1	6	14	1	21	6		1/3	106/140	2/3	7/12						





貝類の組成(2)





ハマグリの殻長分布

図 版



1号土壙墓出土の土器

図版1 北調査区



1. 貝層検出
状況(南から)



2. 貝層断面
(北から)



3. 貝層断面
(1号土壤墓付近)

南調査区 図版2



1. 貝層検出状況
(東から)



2. 調査風景
(貝層土壌サン
プリング中)



3. 貝層の遺物
出土状況

図版3 土壙墓



1. 1号・2号土壙墓



2. 1号土壙墓
(下層の状況)



3. 3号土壙墓

その他の遺構 図版4



1. 土壙1

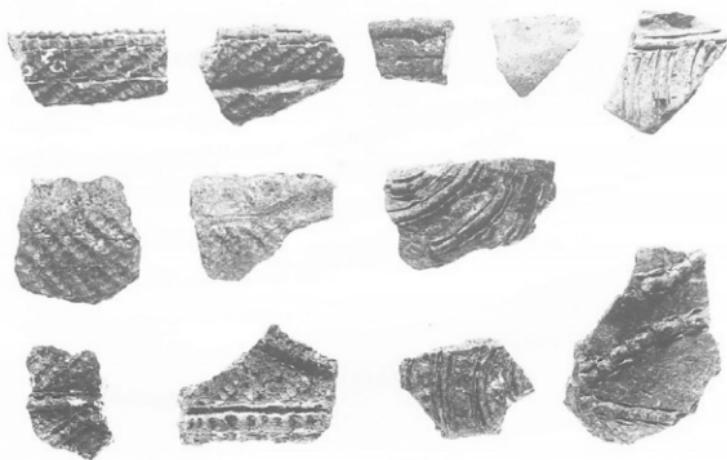


2. 溝状遺構

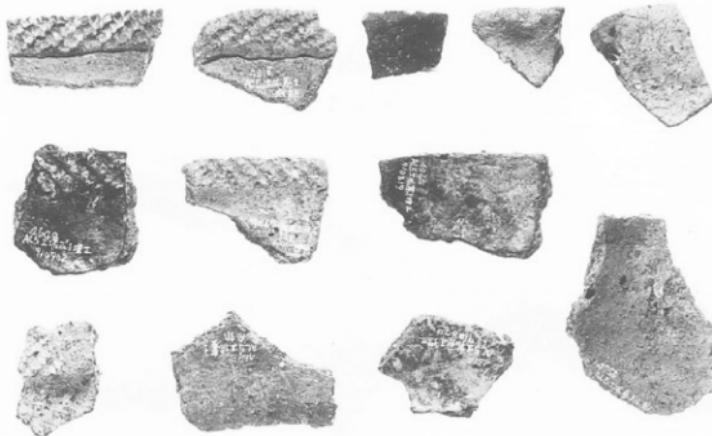


3. 貝塚遠景
(左側トンネル手前)

図版5 1号土壤墓出土土器

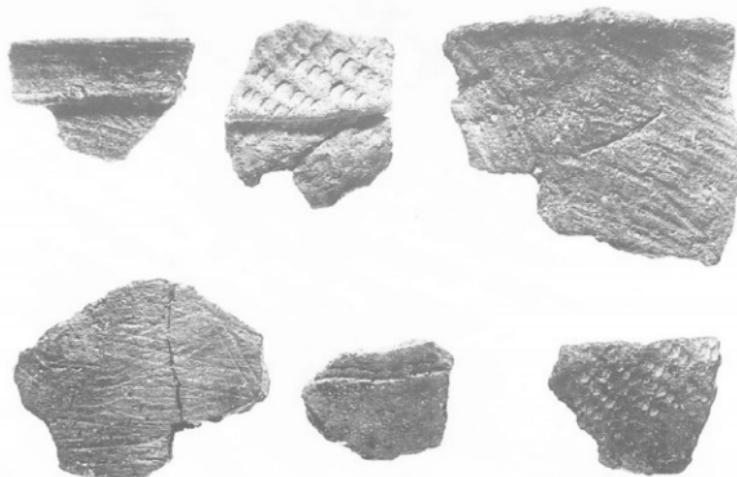


(表)



(裏)

包含層出土土器(1) 図版6

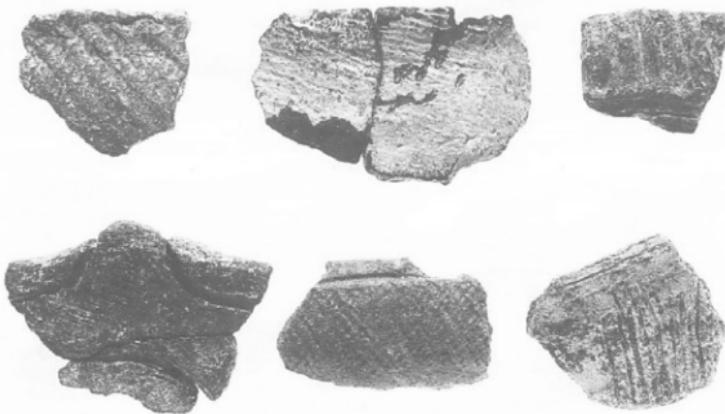


(表)

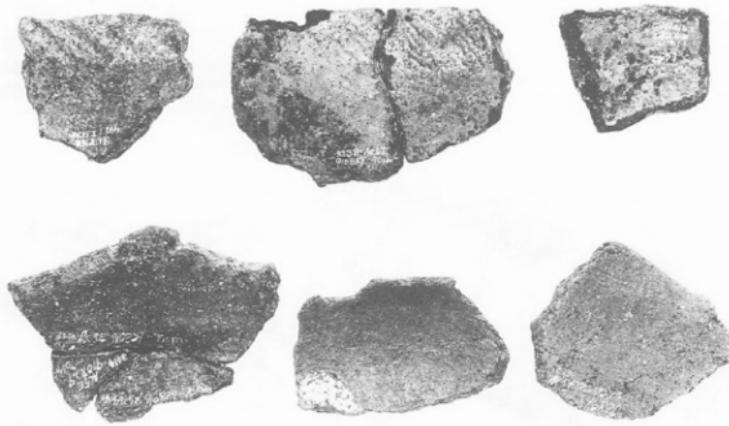


(裏)

図版 7 包含層出土土器(2)

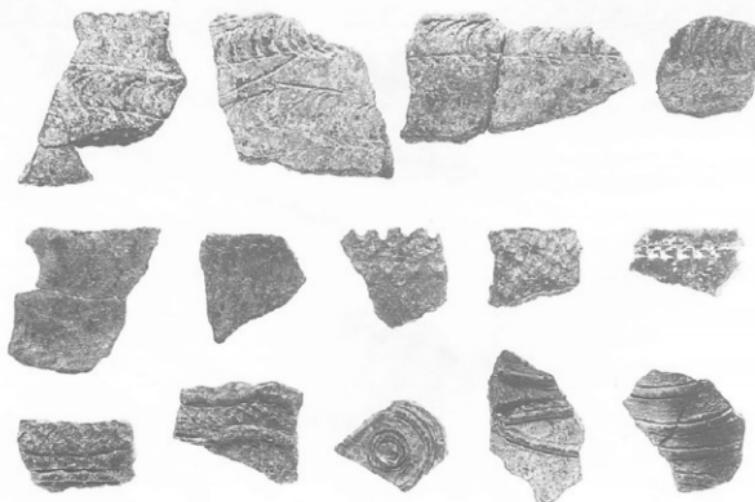


(表)



(裏)

貝層出土土器(1) 図版8



(表)

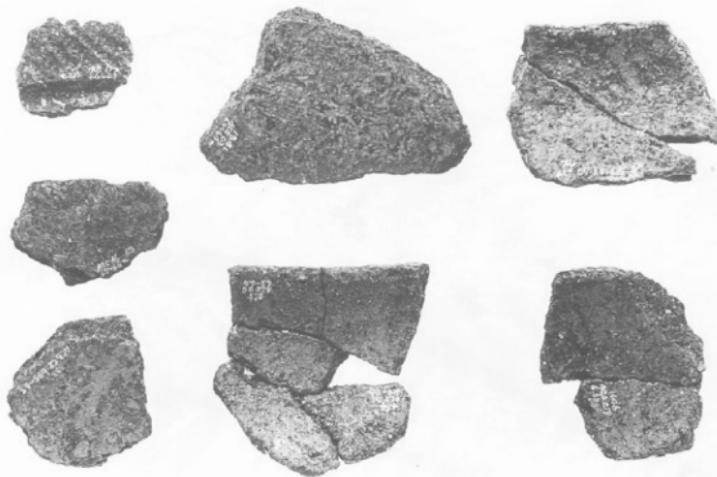


(裏)

図版9 貝層出土土器(2)



(表)

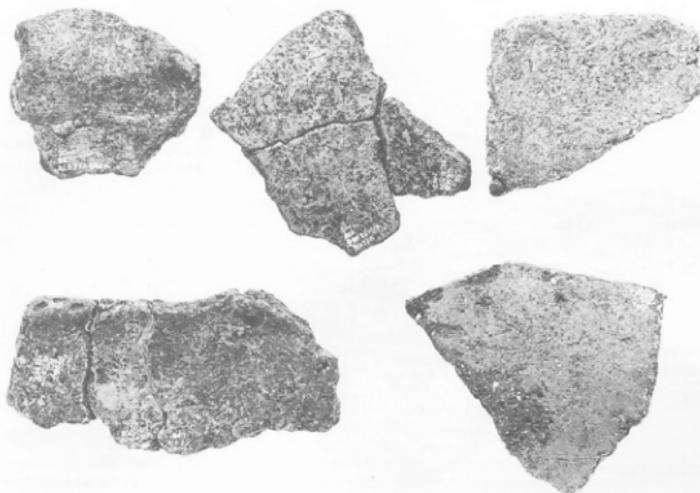


(裏)

貝層出土土器(3) 図版10



(表)

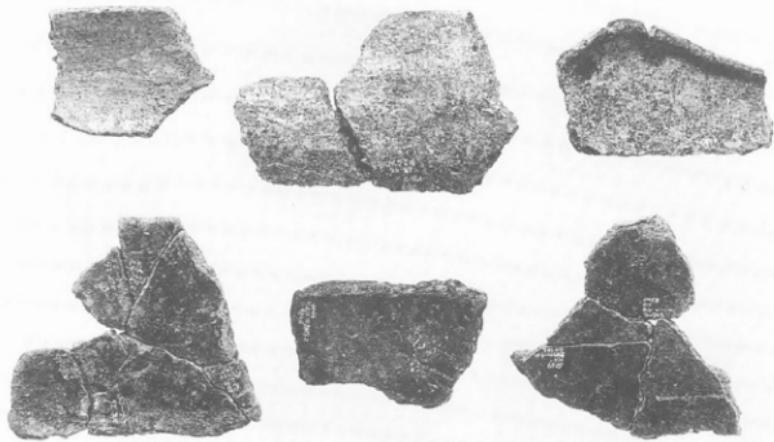


(裏)

図版11 貝層出土土器(4)

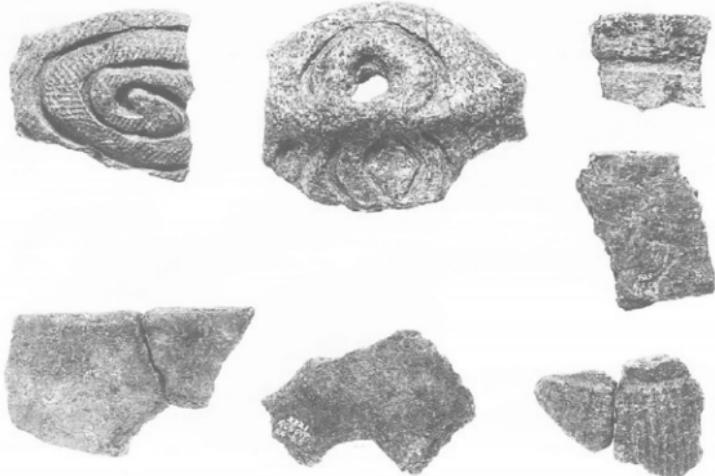


(表)



(裏)

貝層出土土器(5) 図版12

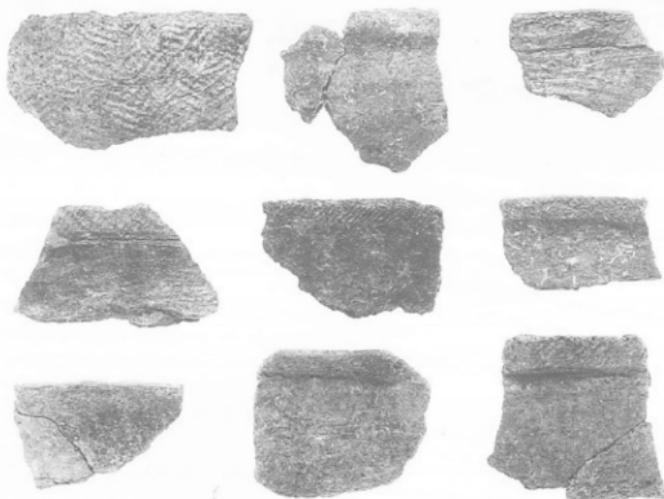


(表)

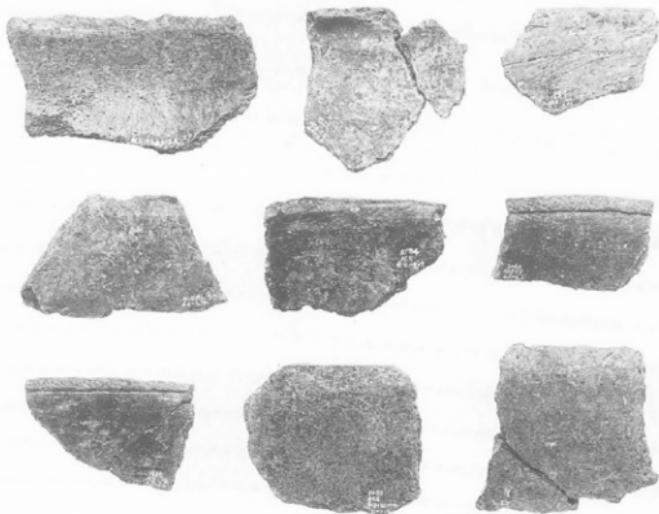


(裏)

図版13 貝層出土土器(6)



(表)



(裏)

出土土器(1) 図版14



1号土壤墓出土の土器



貝層出土の土器

(表) (裏)



貝層出土の土器

(表) (裏)

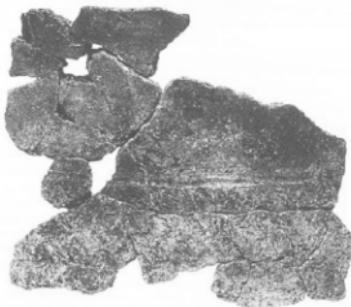


貝層出土の土器

(表)



(裏)



貝層出土の土器

(表)



(裏)



包含層出土の土器

(表)

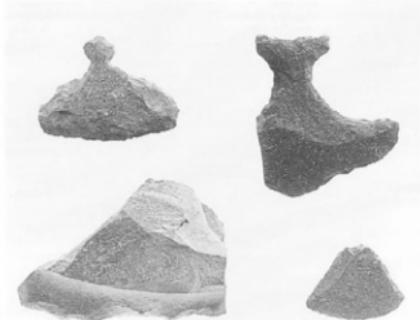


(裏)

土壤墓出土石器 図版16



石 箭



石匙・異形石器・スクレイバー



叩石・石錐

図版17 包含層・貝層出土の石器



石 鐛



石匙・スクレイバー



石製装身具

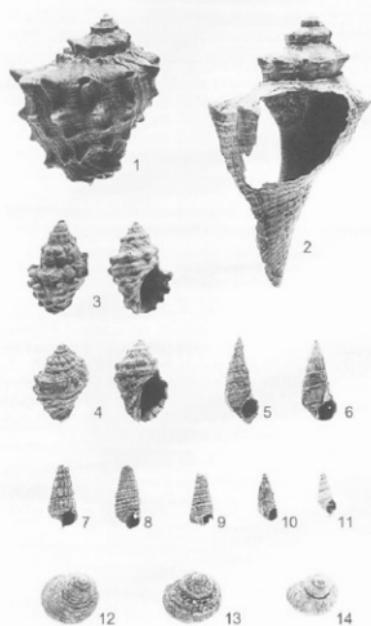


石 槍

骨角貝製品・動物遺体 図版18



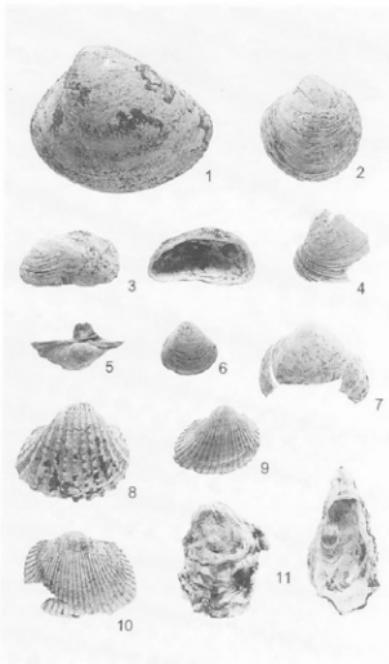
骨角貝製品



腹足綱 (1/2)

1. アカニシ
2. テングニシ
3. レイシガイ
4. イボニシ
5. イボウミニナ
6. ウミニナ
7. フトヘナタリ
8. カワアイ
9. ヘナタリ
10. ホソウミニナ
11. カワニナ
12. イシダタミ
13. スガイ
14. ヤマタニシ

図版19 動物遺体(1)



斧足綱(1/2)

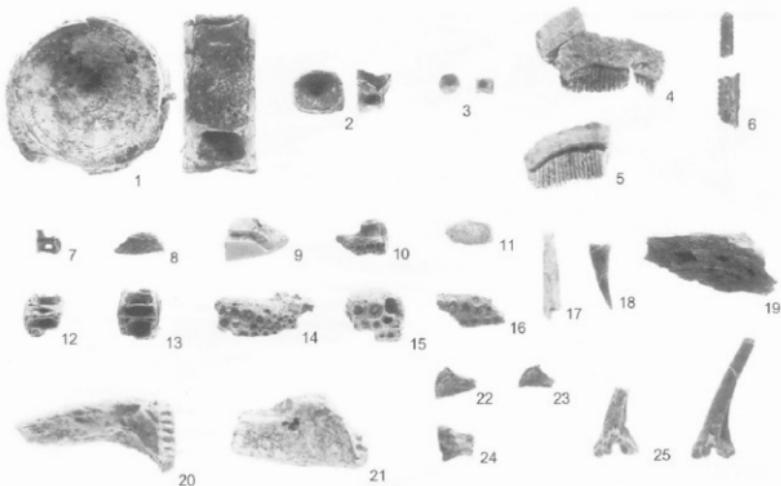
1. ハマグリ
2. オキシジミ
3. カリガネエガイ
4. アサリ
5. オオノガイ
6. ヤマトシジミ
7. シオフキガイ
8. ハイガイ
9. ハコロモガイ
10. サツウガイ
11. マガキ



中型獸類(1/1)

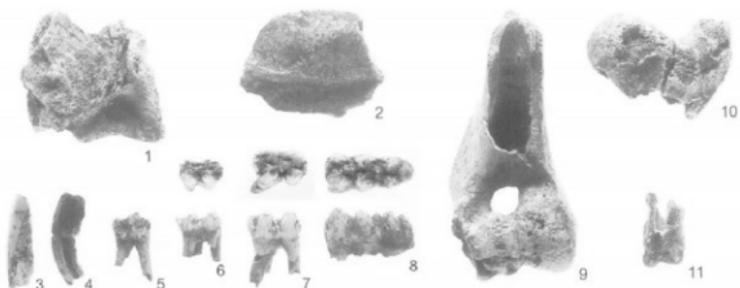
1. サル I
2. アナグマ RM¹
3. イヌ LM²
4. ¹⁵イヌ上腕骨 R
5. タヌキ L I
6. タヌキ L P₄
7. タヌキ LM₁
8. タヌキ下顎骨 L

動物遺体(2) 図版20



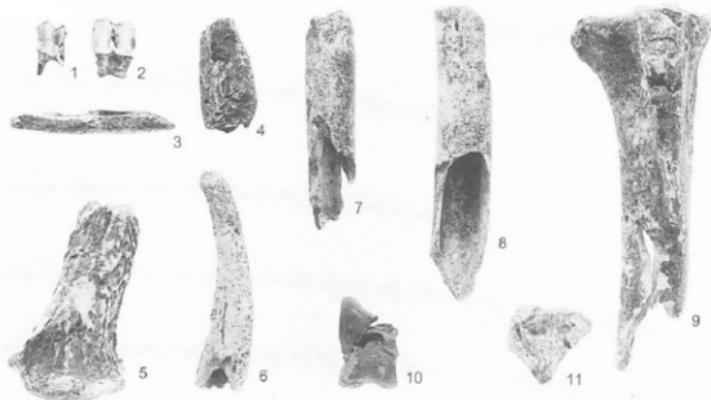
1. メジロザメ科椎体
2. サメ類椎体
3. エイ類椎体
- 4・5. マダラトビエイ歯板
6. エイ類尾鱗
7. ヒラ尾椎
8. スズキ歯骨
9. スズキ耳石
10. ハタ類前上顎骨L
11. ニベ耳石
12. タイ類尾椎
13. タイ類椎体
14. クロダイ前上顎骨L
15. クロダイ前上顎骨R
16. クロダイ歯骨L
17. クロダイ腎臓血管間棘
18. タイ類第1腎臓棘
19. マダイ歯骨L
- 20・21. フグ類前上顎骨L
- 22・23. フグ類前上顎骨R
24. フグ類歯骨L
25. カワハギ類背鰭第1棘

魚類(1/1)

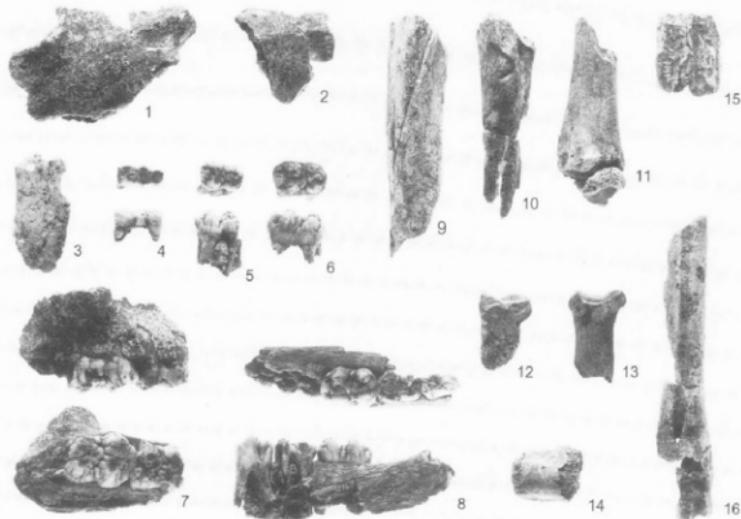


1. 側頭骨R
2. 頭頂骨R
3. R I i
4. ♀ R-C
5. RP₄
6. RM₁
7. RM₂
8. RM₃
9. 上腕骨R
10. 大腿骨R
11. 基節骨L

イノシシ(1/2)



1. M: 2. RM_s: 3. 下顎骨下縁 4~6. 鹿角 7. 大腿骨L 8. 大腿骨R 9. 脊骨R 10. 距骨 11. 跗骨L
シカ(1/2)



イノシシ 1. 頬骨R 2. 頭頂骨L 3. 下顎犬齒R 4. Rdm_s 5. RM_s 6. RM_d 7. 上顎骨R 8. 下顎骨L
9. 脊骨L 10. 尺骨R 11. 脊骨R 12. 末節骨L 13. 第3中手骨L 14. 胸椎
シカ 15. 鹿角 16. 中足骨R

1号土壤墓出土イノシシ・シカ(1/2)

報告書抄録

ふりがな 書名	ふなぐらかいづか 船倉貝塚							
副書名								
卷次								
シリーズ名	倉敷市埋蔵文化財発掘調査報告							
シリーズ番号	第8集							
編著者名	小野雅明・福本明・鍵谷守秀・藤原好二							
編集機関	倉敷埋蔵文化財センター							
所在地	〒712-8046 岡山県倉敷市福田町古新田940 番地 TEL 086-454-0600							
発行年月日	1999年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経 °'\"	調査期間	調査面積	調査原因	
ふなぐらかいづか 船倉貝塚	おかやまけんくらしきし 岡山県倉敷市 ふなぐらかいづか 船倉町	33202	4-222	34° 35' 10"	133° 46' 39"	19910708～ 19910927 19911017～ 19911130	110 m ²	都市計画道路 羽島四十瀬線 工事に伴う発 掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
船倉貝塚	貝塚	縄文時代 前期	土壙墓3基 土壙 1基	縄文土器・石器・骨角貝製品・貝類・魚類・獸類などの自然遺物				
		縄文時代 後期	溝状遺構1条					

船倉貝塚

倉敷市埋蔵文化財発掘調査報告 第8集

平成11年3月31日 印刷発行

編集・発行

倉敷埋蔵文化財センター

〒712-8046 岡山県倉敷市福田町古新田940番地

TEL 086-454-0600

The Excavation Report
Of
Funagura Shell Mound In Kurashiki

Volume 8

Kurashiki
Archaeological Center

March 1999